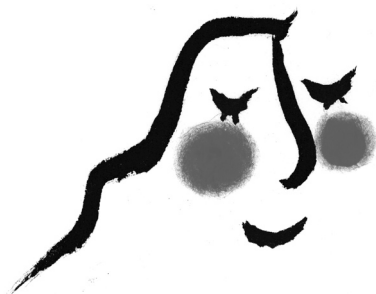


育つ日々

たりたくみ



この本をわたしの父へ

る方へのレスポンスという気持ちで綴りました。

日記なんて、鍵でもかけて誰にも見られないように心配りをするものなのでしょうが、わたしは書いたものをすぐに自分の外に放つことを、快いと感じました。それは自分を開いていくということで、また、見えない人と手を繋ぐことのように思えました。

そしてここでは画面に現れては消える文字ではなく、紙の上に印刷される文字の中で、わたし自身を開こうとしています。とても大それた試みだなあと、実はどきどきしているのです。

日記にはその日の出来事というよりは、その時、心に浮かんだことを記してきました。そういう意味では内的な旅の記録といえるのかもしれませんが。

今、目の前に見ている花が二十年前のある時と結びついたり、昨日のことを書こうとして、いつの間にか子どものある時のことを書いていたりします。わたしの「時」は遡り、繋がり、また未来へと交錯します。

そんなふうにして、時々綴った文章の中から、わたしの父の思い出と、子育てについて書いたものをまとめてみました。

子どものわたしが育った日々、わたしの子ども達が育っていった日々、わたしが母親として育

てられた日々のこと…

こうしているうちにも「時」は休みなく進み、わたし達はその中を歩いていきます。人生というこの旅の中で、この時、あなたの「時」とクロスできることをわたしはとてもしあわせに思います。

二〇〇四年 四月

Virtual Cluster, NeoBook Project

育つ日々
目次

I 父の十二月

四月	父は夢みる	12
五月	子どもの日の飯盒炊飯	19
六月	茶の間は油絵の匂い	26
七月	切腹の記	31
八月	月夜の田んぼで	35
九月	家族会議	39
十月	大学芋はどっさりと	44
十一月	秋の子ども展覧会	49
十二月	父の作ったクリスマスケーキ	52
一月	お年玉は日記帳	57
二月	ちゃぶ台でのカウンセリング	63
三月	人生のしめくくり	70

II 育つ日々

誕生

子育て事始

育児日記を紐解いて

育てる仲間は育つ仲間

「たんぽぽ文庫」のこと

裸足でイナゴを追いかける園児たち

カタツムリの誕生日

アメリカに到着！

異国で育つ

子連れ女子大生

「死なないと思えば何でもできるよ！」

「いい人生だった！」

ピニヤタを割れない少女がいた

カルチャーショック再び

夕暮れ時のさびしさは

里子のクレメンス

青年日、バックパッカーとなる

ぶつとび卒業式は着ぐるみもあり

一人暮らしのトレーニング

火を灯して

おわりに

188

184 178 173 163 159

I
父の十二月

四月 父は夢みる

ちようど桜の花がほころび始める四月の初め、二十八歳の父は父親になった。わたしが生まれた日である。

その前日、両親は住んでいた貸家を引き払い、丘の斜面に建てられた町営住宅に引っ越してきたばかりだった。

わたしは出産予定日になっても、しつこく母のお腹の中に居座っていたらしいのだが、引越しの騒動にびつくりしたのか、それとも新しい家が気に入ったのか、やおら外の世界に出てくる気になったらしい。突然の陣痛は、医者に行くの間にも間に合わない勢いだった。

父は近くの産婆さんの家に飛び込み、産婆さんの手を引いて連れてくると、その足で医者を呼びに走ったのだった。電話も車も一般の家庭にはなかった時代である。

ところが、父親が息せき切つて医者連れて戻つてみると、すでに赤ん坊は産婆さんの手で取上げられた後だった。わたしの気忙しさは出生の時点で早くも始まっていたようだ。引越しと出

産、若い父と母はさぞかし大変だったことだろう。

父は娘の名前を葦子にしようとした。パスカルの「人間は考える葦である」から拝借した「葦」である。この思いつきに、父はひとりほくそ笑んだ。が、しかし、そこに込めた意味は良いとしてもアシという音はなんとも響きが悪い。名前でかわられたりしては娘が不憫だと思い、町役場には、葦子と書いてヨシコと読むと、届けを出した。しかし、それは受け入れてもらえない。がっかりしながら役場から戻ってきた父はその後もいくつか凝った名前を並べてみたらしかつたが、結局は美子（ヨシコ）という、当時一番多い女の子の名前に落ち着いた。

今なら葦子（アシコ）なんて、珍しいし、なかなかいい名前だと思うが、その話しを聞いた当時は、自分の名前が川辺に生えているアシだのヨシだのという名前ではなくて助かったと、胸を撫で下ろしたものだつた。

父も母も、自分達の生まれ育った故郷を離れ、親、兄弟、親戚から離れての暮らしだった。当然生まれ育った土地とは言葉も慣習も違う。その土地の言葉が話され、その土地の習慣が常識である人々の中にあつて、わたし達家族は「よそのもの」であり、子ども心にも、言葉や習慣の違い、またそこに生じる違和感をなんとなく感じて育った。これは日本にいながらすでに異文化体験をしたようなものである。

その「よそもの」の意識のせいなのか、それとも父の信念の故か、父の子育ての中には、人と足並みを揃えるというのではなく、より大きく、より広く、より高くといった理想のようなものがあつたような気がする。

しばしば世の母親達がそうであるように、父は自分の夢を子どもを通して実現させようとしていたのだろうか。いずれにしろ、父は、当時の父親には珍しく、子育てには並々ならぬ意気込みがあつたのである。

幸か不幸か、母が小学校の教員をしていたため、子どもたちの教育係りはもっぱら父の役目となつた。小学校から大学に至るまで、入学式や卒業式に来たのは父。授業参観も母親達に混じつて父はやたらと目立っていた。

参観日の朝、わたしの目は黒板を見ながらも、意識は完全に背中の方へ集中している。教室にはいつもと違つた香水や化粧の匂いが満ちていた。後ろの引き戸がガラリと開いて、親たちが次々と入ってくる。父が入つて来る瞬間は後ろを見ていなくても分かつた。教室に、いつもの父のポマードの匂いがぶんと混じつてくるからだ。そしてわたしは、父が後ろに立っているのを確認するや、俄然、張り切るのだった。

教育係の父は、わたしや弟のみならず、近所の子たちを何かにつけて教育しようとしていた

節がある。

例えばラジオ体操や地域の子ども会のリクレーションには決まって出沒し、近所のちびっ子たちの指導を買って出た。また通学路には父が木の板に巧みなイラストで仕上げた「飛び出し注意」の立て札が立っていた。

読書感想文のコンクールや交通安全などのポスターのコンクール、夏休みの作品ともなれば、まず父の前に呼ばれ、取り掛かる前にアドバイスや指導がなされた。そういったことに父が子ども以上にフアイトを燃やしていることは傍目にも明らかで、子どもとしては、「他の子のように自分だけでさっさとやっつて終わらせたいのに」という恨めしさが無かったともいえない。

*

わたしが高校の入学を控えていた春休みのこと、父が意気揚々とあるパンフレットを持って帰った。それは中学生と高校生を対象にしたカナダでのサマースクールのパンフレットだった。

今はすっかり定着した海外夏期学校や海外体験学習だが、当時はまだ珍しく、小さな田舎町ではなおさらのことだった。この話を聞いた直後はうれしい気持ちを通り越して仰天した。我が家は金持ちではない。しかも、一ドルが三六〇円の時代である。そこにかかる膨大な費用は借金するということである。これではなんだか気も重い。しかし、父の言い分はこうである。大人になっ

て観光で外国に行っても、外国から学ぶことはあまり期待できない。まだ若い時に外国の空気を吸う必要があると。

父の意図は当時のわたしにはもうひとつ図りかねたが、少年少女世界文学全集に始まり、モーパーサンに、ドストエフスキーと、脈絡もなく、手当たり次第に外国の文学ばかりを漁り読みしていたわたしは、すでに外国かぶれだった！

カナダ行きが実現可能だと分るや、わたしの小さな胸は期待で、膨らみに膨らみ、ラジオの英会話の番組を聞いたり、英会話クラブに入ったりと泥縄の準備を始めたのだった。

しかし当然のことながら通っていた高校は海外でのサマースクールに難色を示した。当時、その高校は受験体制が強化されていて、夏休みも夏期講習が組まれていた。校長は海外の体験よりも夏期講習の方が大事だと、サマースクール行きを思い留まらせようとしたらしかなかったが、父はこちらの方が大切だと主張して譲らなかつた。父の夢はある時には頑なだった。

父がわたしをカナダへ行かせたことは、わたしの英語の成績にも、英会話にもすぐには結びつかなかつた。逆にわたしはカナダの高校生達を見て、自分たちの課せられている受験勉強がずいぶん次元の低いものだと思つてしまったのである。

同じ年齢の彼らは日本の高校生とは比較にならないほど成熟して見えた。夏休みの課題は、分厚い本が二冊。それを読んでレポートを書くのだという。受験のための模擬テストや演習をこな

すのではなく、そんな勉強らしい勉強ができるならどんなに楽しいだろうと、カナダの高校生達を羨んだ。

そんな海外体験の後では、明けても暮れても大学受験だけを目指す学校に、わたしはめつぼう反抗的になっていった。それでいて大学には行きたいというのだから、なんと扱いづらい生徒だったことだろう。

父はわたしを海外に出したことが目に見える結果を生まなかったばかりか、さらに生意気を助長したと、内心後悔したのかもしれない。

その後ずっと、英語とも外国とも無縁な日々を送っていたが、夫の海外赴任のため、アメリカで生活をするようになり、カナダでの体験がやっと繋がったのである。

少しも好きではなかった英語が別の輝きをおびて迫ってきた。やがて英語はわたしにとって自分を表現するもうひとつの言葉となった。言葉を得ることは、またちがった自分を得ることになる。

息子たちは親に付き合い、望まないままに二つの文化と二つの言葉の中で育ち、それ故の生きづらさも味わった。どうなることかと思ったが、今や二人とも大学生、帰国後すっかり鳴りを潜めていたアメリカでの教育や経験が、ここへ来て、ようやく生き始めた。

二人とも、比較文化や国際関係を学び、通訳や翻訳などのアルバイトをこなしながら、ようや

くバイリンガル、バイカルチャーとして歩み始めている。

すでに記憶を失ってしまった父は、わたしのことも孫のことも、認識できない。けれど、もし、父に孫達のことがかかったら、どんなに喜ぶだろうと思うのである。

父は自分が抱いていた夢が孫達へバトンタッチされると、嬉しそうに笑うことだろう。

五月 子どもの日の飯盒炊飯

父は自転車にわたしと弟を乗せてよく遠出をした。弟は自転車の前に乗せられ、わたしは後ろの荷台にまたがった。わたし達の住んでいた町営住宅は高台にあったから、どこに行くにも、急な坂道を登り降りしなければならなかった。

父は無謀にも、その急な坂道を、弟とわたしを乗せたまま、すごいスピードで下るのだった。父にしてみれば、それはわたし達を楽しませるつもりだったのだろうが、わたしはいつまでたっても、そのスピードに慣れず、怖かった。必死の思いで自転車にしがみつくのだが、時々自転車のどこかに足を挟んでしまつて痛い思いをしたり、危うく放り出されそうになったものである。そんなスリルを伴うものの、自転車での遠出はやっぱり楽しみだった。

ある日の遠出のこと、帰宅の途中でわたしも弟も自転車に乗つたまますっかり寝込んでしまつたらしい。困つた父は知り合いのぶどう園まで自転車を押してゆき、そこでわたし達を自転車か

ら降ろし、しばらく昼寝させてもらった。

目覚めてみると、目の前に知らないおばさんがいて、テーブルには、大粒のぶどうや、見たこともない緑色のぶどうが山盛りにおいてあった。わたし達はぶどう農園からもいできたばかりのぶどうをたらふくいただいた上に、お土産のぶどうまで持たせてもらって、夕方近く、また父の自転車の前と後ろに乗って家へと帰って行ったのだった。

いくつもの子どもの日があり、父はいろいろな場所へわたし達を連れていった。隠れキリシタンの後が残る洞穴を探検したこともあったし、キャンバスと油絵の道具を抱えてスケッチの旅にでかけ、父に教わりながら、初めて油絵を描いた子どもの日もあった。残念なことにそのひとつひとつを思い出すことはできないが、ある年の子どもの日のことだけは妙にはつきりと覚えてい

る。

その子どもの日朝、父が河原で飯盒炊飯をやるうと言い出した。わたしが小学校一、二年の頃だったと思う。その父の提案にわたしの目はきらりと輝いたに違いない。飯盒なら知っている。よく山登りをしていた父は登山に出かける前日、飯盒だの鍋だのをリュックサックに詰めながら、登山の話をしてくれた。

山登りの時にはテントを張り、みんなでその中に寝るのだそうだ。布団のかわりに寝袋の中に

もぐりこむとサナギになったような気持ちがあるだろうか。電気釜なんて使えないから焚き火を焚いて飯盒でご飯を炊くのさ。山では降りて来る人と登っていく人が途中で会えば、「やあ、やあ、こんにちは」と、知らない人同士でも友達のように挨拶をするらしい。登山とはなんと楽しいことだろうと、話を聞くだけで夢は膨らんでいた。

そして、父がリュックに詰めるチョコレートやクッキーなどの魅力的なお菓子は、万が一遭難した時の為の非常食だから戻ってきたらもらえぬ事になっていた。父はいつも遭難せずに戻ってきたから、父が山から戻って来る日は、リュックサックのお菓子がわたし達のものになるうれしい日でもあった。

さて、河原での飯盒炊飯。それは山登りみたいに楽しいことのように思われたのだ。

朝、家を出たわたし達は自転車に長いこと揺られ、見知らぬ河原へ着いた。ずいぶん広い河原で、水はゆつたりと流れていた。上には鉄橋が架かっていて、頭の上を、時折音を立てて汽車が走り過ぎる。わたし達はちょうど鉄橋の下あたりでリュックサックを開き、父は石を組み立ててかまどを作り、そこに木の枝を渡し、米と水を入れた飯盒をかけ、火を起こして米を炊き始めた。

これが話しに聞いていた焚き火で炊くご飯のことなんだと感激もひとしおだった。飯盒でご飯を炊くのは確かにおもしろかったが、わいわいと何人もの人で登る登山のイメージとは違い、ただ広い河原には父と弟とわたしの他誰もいなくて、なんだかずいぶん寂しいところに来て、寂

しいことをしているような気持ちでした。

いったい御飯の炊けるまでの長い間、わたしと弟は何をして過ごしたのだろうか。弟は小さい頃から我慢強く、文句を言わない質だったので、おとなしく焚き火でも見ていたのだろうか。それとも父はスケッチブックを我々に与えて自分もスケッチをしたのだろうか。

ずいぶん時間が経った後、父が飯盒を棒切れで叩いてみて、ご飯が炊けたぞと言う。ぼうぼうと燃える火で真っ黒にすすけた飯盒のふたを開けると、ほかほか湯気の立つ、真っ白なご飯がみごとに炊けていた。とにかくやつと御飯が炊き上がった時はかなりお腹が減っていたに違いなかった。その時食べた御飯がそれまでに食べたどの御飯よりおいしく感じたからだ。父は飯盒にスプーンを突っ込み、その中のご飯を飯盒の蓋によそってくれ、脇には缶詰めの魚と肉が載せられた。缶詰がなぜこんなにおいしいのだろうかと思議でしかたがなかった。

父はこのただの御飯と缶詰めの食事がこれほどヒットすると知っていて、子どもの日の飯盒炊飯を思いつたのだろうか。あの広い河原に小さな子ども二人と飯盒飯を炊きながら、父は寂しい気持ちにはならなかったのだろうか。

時々、記憶の中からあの広い河原の中の我々の姿が浮かびあがってくる。そしてあの時の味を思い出し、魚の缶詰めを手にとってスパーのかごに入れてみるのだが、そして期待して口にしてみるのだが、缶詰がああ時のようにおいしかったためしはない。

父がわたし達を自転車に乗せては遠出をしていたのはどういう理由からだっただろう。わたし達に自然や、知らない土地を知らしめたいと思っていたのか、あるいは自分がどこかに行きたいのに子どもをほおつてもおけないから子連れの遠出となったのだろうか。

そういう父の影響のためかどうかは分からないが、わたしも覚えたばかりでおぼつかない運動だというのに、自転車の前と後ろに子ども達を乗せ、弁当や水筒に着替えまで積んで、住んでいた団地から三キロほど離れた子ども公園へ出かけた。

遠くの公園に行った時は、行きはよいよい帰りはこわいで、ちょうど昔のわたしと弟のように、子ども達が自転車の前と後ろで眠りこけてしまい、かといって駆け込む知り合いの家が近所にあるわけもなく、こくりこくりと前に後ろに首をぐらつかせる幼児を片手で押さえながら、泣きたい気持ちで夕暮れの道を自転車を押して帰った。

なぜそんな大変な思いをしてわざわざ遠出をしたのだろうか。そんな遠くまで行かなくても、団地の中にはいくらでも遊ばせる公園があったし、そこには誰彼と顔見知りの母親達がいたのに、あれはきつと父の真似をしたのだ。やってみたらことをやらなくては気がすまないというような気持ちになっていたのだろう。それとも、記憶の中のわたしの、少し頼りなげで、うつすらと寂しかったあの気分をもう一度味わってみたいと思ったのかもしれない。いずれにしろ、子どもを連れて遠出をしないではいられない気持ちに駆られてのことだ。

子ども達が小さい時にはテントや寝袋に飯盒も持って、家族でキャンプもした。ナイヤガラ近くのキャンプ場にテントを張ったり、リスやアライグマが側にやつてくるようなキャンプ場で過ごしたこともあった。

見知らぬ土地で焚くキャンプファイアーの光りは確かに少しもの寂しく、まだ小学校にも上がらないでいた次男などは、「ぼく達は今度はどこに住むの」と不安な声で訴えた。家のない放浪生活をしているような気持ちになったのだろう。

実際、わたし達は、大きなバックパックを抱えては、アメリカのあちこちやヨーロッパを何日もかけて旅した。ヨーロッパなど子どもが小さいうちに旅するのはもつたいないと周囲のアメリカ人達から言われたが、子どもが大きくなっていっしょに旅ができるとはとても思えなかった。今しかチャンスはないという気持ちがあったのだ。そしてそれはその通りだった。

遠出が好きだった父を母といっしょにアメリカへ招いたのは父が退職した年だった。旅ともなれば、父は行く先々のことを丹念に調べ、旅行の日程などもきちんと表に作らないではすまない性格だったのに、あの頃はすでに物忘れの兆しも出ていて、時刻表を調べたり日程表を作ったりという気力もなくなっていた。せつかくアメリカ旅行のために買い換えたビデオカメラも父はさっぱり握ろうとしないのだった。それまでは父に何もかも任せていた母が、この時は旅をリー

ドし、写真を撮り、ビデオまで回し、わたしはそんな母を頼もしく思った。

それでもメトロポリタン美術館やボストン美術館を父は気に入っていたようだった。父はこの時までには、まだ記録したり、整理したりという能力は残っていたようだ。写真やパンフレットなどをまとめた「アメリカ旅行記」が、実家の本棚に父の手書きの背表紙をくつきりと見せて鎮座している。

あれほど遠出が好きだったのだからと、夫といっしょに実家へ帰省する夏には、病院の許可をもらい、父を車に乗せて、海を見せに連れ出す。車に乗せるのも、降ろすのも一苦労だし、海を臨むベンチに父を座らせても、父の目に映る海を父の脳は認識しているかどうか心もとない。父の関心はそこで広げる飲み物や食べ物にしか向かないように見える。それでも、わたし達はやっぱり父を連れ出したいと思う。

去年の夏は夫が抱きかかえるようにして、何とか父を車に乗せることができたけれど、今年の夏、父を連れてドライブすることはまだ可能だろうか。

海を眺める年老いた夫婦と中年の夫婦。通りかかる人が見れば、なんだか寂しいなと感じるのかもしれない。家族での遠出はいつでも少し寂しい。そしてその寂しさがまた捨て難いとわたしは思っている。

六月 茶の間は油絵の匂い

わたしが学校から帰ってくると、父は茶の間でよく油絵を描いていた。仕事から四日に一度は当直明けの非番と言われる日があったのだ。

小さな家だったから茶の間は四畳半。父はちゃぶ台に画材を並べた。様々な色のラベルがついた油絵の具、何か強い匂いのする液が入った筆洗い、絵の具と油にまみれて汚れた布、そして柄の長い大小の筆がたくさん。イーゼルがちゃぶ台の脇にあり、そこに描きかけのキャンバスが立って掛けてあった。キャンバスの絵はアマリリスや鉄砲ゆりのこともあったし、どこかの風景のこともあった。絵が時間とともに、ずんずん本物そっくりになっていくのはいつ見ても不思議な気がした。

絵を描いている父の機嫌がよかったからだろうか、それとも絵に熱中してこちらへ注意が向かわないのが都合よかったのだろうか、こちらに背中を向けて絵を描いている父を見ると何か安心

した。そんな時に遊びに来た友だちが「おじちゃん、うまい」と感歎の声をあげると、わたしはうれしくてにんまりとし、父もまた得意気だった。たいていの友だちは珍しがって、しばらく父が描く様子を眺め、その後、絵の具やキャンバスの脇にわずかに空いた空間でお人形さんごっこやおみせやさんごっこをして遊んだ。

父はずいぶんたくさんさんの絵を描いたはずだが、今、実家に父の描いた絵はほとんど残っていない。時間をかけて丁寧に描き込んだ絵も、人から欲しいと言われれば、父はさっさとあげた。どうしてあげてしまうのと聞けば、「また描くけん、よかさ」と言っただった。

夫の実家にも父の描いた絵が一枚、飾つてあるが、これは父が単身赴任していた土地から夫の実家までバイクで訪問した時に、その道中で描いたものだ。キャンバスと絵の具をバイクに積んで、途中の景色の良い川辺でスケッチをし、それを手土産に、と考えるところがいかにも父らしい。出来上がった絵をはじめ込む額までバイクに積んで行ったというのだから苦笑してしまう。

父が予科練の生徒だった時に終戦となり、その後は醤油屋で働いたり、田舎の小学校で臨時教師をしたりしていた。そしてその頃、誰から習うということもなく、独学で油絵を描き始めたらしかった。

力とスピードのある筆づかいで、大まかにさっさと絵の具を置いていくような調子で描いて

いくのに、離れたところから見ると、デッサンの確かな、写実的な絵になっていた。町の公民館の絵画教室で指導したり、お寺の道案内の看板を描いたり、絵のことで頼まれることはなんでもやっていた。絵を描くことがほんとに好きな様子だった。

他にも父にはいろいろな趣味らしいことはあったが、油絵は、言ってみれば、父のライフワークのようなものだった。そして、定年退職したら毎日好きなだけ絵が描ける、というのが父の口癖だった。

しかし、ちょうど定年退職を迎える頃から父の記憶は怪しくなってきた。いろんな人に絵を描いてあげると約束したのに、本人はすっかり忘れていて、母が絵の約束をしている人とたまたま話しをし、絵はまだですかと言われては、答えに窮した。

記憶が繋がらないためか、父は描くと言ってキャンバスに向かうものの、長続きせず、絵はどれも描きかけのまま残されていた。今でも描きかけのキャンバスが部屋の一角を占領している。

父にとって絵を描くというのはどういうことだったのだろう。母は、「お父さんは絵を描いて、それを人にあげるのが楽しみだったんだろうね」と言う。描く事を楽しみにし、それを惜しげもなく人にあげては喜んでもらう。考えてみれば、ずいぶん幸せな日曜画家だ。それにしても、父の描いたたくさんさんの絵は今どこにどうしているのだろうか。時々、知っている方々から、父の絵をどこそこの施設で見かけたと教えていた。だくことがある。いつか父の絵を訪ねる旅をしようと母

と話している。

そういえば、一度思いがけない場所で父の絵に出会ったことがある。あれは、父が今の病院に入る前、初めて老人保健施設を利用した時のことだ。その老人介護施設は、町に昔からあった病院に併設された新しい施設で、母が入院する二週間だけ入所をお願いしたのだった。痴呆が進んでいて、他の患者さん達とのトラブルも予想されたので、日中はわたしが施設に向き、デイサービスでの催し物や、リハビリ室での運動、食事などに付き添っていた。

父の病室から食堂へ行こうと歩いていると、食堂の脇の壁に、何かなつかしい感じのする油絵が掛かっていた。はっとしてその絵のサインを探すと、やはり、その絵は父が描いたものだった。絵の右下にあるのは間違いなく父のサインだったからだ。

父に、「ほら、これお父さんが描いたものよ」と、見せるのだが、父は「そうか」というだけで、その絵には何も興味を示さなかった。それでもわたしは何かうれしく、お世話してくださったというケースワーカーの方や介護士の方にその事を伝えたことだった。今はさんざんワーカーの方々を手こずらせている父があのような風景画を描いたことがあったということにみなさんが驚き、すごいですねえ、上手ですねえと父に言ってくれました。その時は父も顔をほころばせていた。

わが家に一枚だけ、父の描いた油絵があつて玄関のところに飾つてある。わたし達がニュー

ジャージーに住んでいた頃、父と母が遊びに来ていて、その時、父が近くの公園で描いたものだ。父は絵葉書にもなる小さなスケッチブックとポケットサイズの水彩しか持ってきていなかったから、画材は、油絵の具も筆も、わたしが持っていた粗末なものだった。

もう記憶障害が始まっていたから、母もわたしも、父が無事描き上げられるようにと祈るような気持ちだった。そして、父が公園で描いていた二時間あまりの時間、邪魔にならないようにと五歳の次男を遊ばせながら少し離れた場所から父の描く様子を見守っていた。

父の絵を横目で見ながらウォーキングしている人達を通り過ぎていく。父の絵を覗き込んでからこちらに向かって歩いて来るカップルを見ていた次男は、やおらその人達に駆け寄ると何か話しかけてからまた母とわたしのところへ戻ってきた。さっきの人達に何を話したの、と聞くと、

「絵を描いているのは、ぼくのおじいちゃんだよって教えてあげたの」と得意そうだった。その絵はその時の気分や空気を閉じ込めていて、わたしには思い出深い。

七月 切腹の記

今のようなホームビデオがまだなかつた頃、８ミリカメラが売り出された。一本のテープで、三分とか五分しか撮影できず、見る時は映画館のように部屋を真つ暗にしなければならず、また現像には時間もお金もかかり、今のホームビデオと比べると何とも不経済な代物だった。しかし自分で映画が撮れるのである。そのころカメラにかなり入れ込み、現像から引き延ばしまで自分でやっていた父は、８ミリカメラが世に出るや否や、即、買った。月賦だと何だつて買えるというのが父の流儀だった。この８ミリのテープが段ボール箱に二、三箱はあったから、父は新しいこの文明の利器が嬉しくてたまらず、片っ端から撮つては現像に出したに違いない。

あの頃は時々お客があつた。父は酒が一滴も飲めなかつたので、いわゆる酒飲みが集まるような宴会は我が家には無縁だったが、それでも、時には父の仕事仲間や、遠くから親戚が訪ねてきては、たまのハレの日となつたのである。そしてそんな夜はきまつて映写会が催された。

押入れのふすまの上から白い布を垂らし、小さなスクリーンがしつらえられ、電気を消した暗い部屋の中に、映写機の回るカタカタという音が聴こえ始めるのだった。

８ミリカメラが来る前は、こういうお客をもてなす席で、父はわたしに、習っているバレエを踊るよう命じた。ドーナツ盤のレコードをポータブルプレイヤーでかけてもらいながら、わたしは、トータムボールの陰で泣くインディアンの娘の踊りやら、お母さんアヒルが五羽のアヒルと洗濯をする踊りを習った通りに踊った。

お客を前に、わたし一人が拍手喝采を浴びるのは晴れがましくもあつたけれど、みんなといっしょに見る側に回れる映写会の方がよほど気が楽だった。そしてわたしは、そこにいる人々の気持ちが一とつに集まるような映写会の夜がとても好きだった。

映写会はわたし達子どもの記録フィルムのようなものが主流だつたと思うが、一つだけ特別なフィルムがありそれは映写会の圧巻でもあつた。「切腹の記」というタイトルのそのフィルムは、父が十二指腸潰瘍の手術をした際の記録フィルムだ。

本人は全身麻酔の上でお腹を切られているわけだから、撮影しているのは父以外の人間ということになる。父は、病院の院長に頼みこみ、担当以外の医師に手術室で８ミリを回してもらおうということになつたらしい。

さて、その映画の冒頭に映し出されるタイトル文字なのだが、「切腹の記」というタイトルが

入るように、父は手術の前夜、厚紙に得意なレタリングでタイトル文字を書き、そこから映し始めるようにとカメラ担当の医師にお願いしてから手術室に入ったということだった。

胃の三分の二を切り取るという大手術の前に、母は父にもしものことがあつたらどうしようかと心配していたというのに、父は何とも呑気なものだった。

しかし、手術の記録フィルムなど頼む方も頼む方だが、許可した病院も病院。そんな突拍子もない個人のリクエストがまかり通る、のんびりした時代だったのだろう。

さてわたし達家族はその「切腹の記」をその後、繰り返し見ることになる。父は得意そうだったし、わたしも見る度に、なぜかわくわくした。でもお客はどうだっただろう。夕食の後で、そんなものを見せられて気持ちが悪くなった人だっていたかも知れない。この家族はどうなっているのだろうかと訝られたとしてもしかたない。

しかし、とりわけわたし達家族が変人扱いされたり、ことさら悪い評判が立ったりはしなかったから、家に来る客もまた素朴な良い人達ばかりだったのだろう。

この「切腹の記」の映写会がかなり風変わりなものでなしてあつたと、わたしは大人になって初めて気がついた。弟と昔の話をしている時である。「あのフィルムを人に見せるなんて変だったよ、全く」と弟があきれた調子で言うのである。そう言われてみれば確かに妙な趣味だった。あの時はこんなものだと過ごしていたけど、我々はかなり変わった家族だったのかもしれない。家族な

んで、どこの家族もみんなどこか変わっていると、何かで読んだ覚えがあるが…

ところで、そのフィルムの教育効果というものがあつただろうか。

わたしは小学校五年生の時に体験したフナの解剖も、中学一年でのカエルの解剖も目を輝かせてメスを握り、気持ち悪がる子達を尻目に率先してやったような記憶がある。人体の模型や図鑑を眺めるのが大好きだつたし、数学があきれるほどためな割には、生物は一番得意な教科だつた。

扁桃腺の手術に始まり、わたしは四度も切つたり縫つたりをやつたが、恐怖心とは無縁で、入院がなぜか好きだつた。

明日が子宮筋腫の手術という晩、不安で眠れなだらうからと看護婦さんが睡眠薬を持ってきてくれたが、わたしは読みかけていたアンナ・カレーニナの身の行く末が気に掛かかり、遅くまで夢中で読みふけるといふ調子だつた。

そういえば、弟も自分の体に対してえらく突き放したようなところがあつた。高校受験を控えた時期に脳腫瘍の疑いで脳外科に入院していた時など、彼は平然とベッドの中で勉強していた。彼の言い分だと、この病室に入院している子は脳の病気で次々に死んでいくのに、自分の場合はまだ脳腫瘍と確定もしていない状況なんだから、他の子に悪いくらいだというのだ。この言い草には、我が弟ながら、あつぱれと思つたものだつた。こう肝が座っているのは繰り返し見させられた「切腹の記」の教育効果なのではないかとわたしは密かに思っている。

八月 月夜の田んぼで

わたしが小さかった頃、小さな町の小さな商店街は、夕方の六時ともなれば店じまいをするよ
うだったが、夏の間は土曜日ごとに夜市が立ち、夜遅くまで、町の賑わいが続いた。今でもヨイ
チという言葉の響きは、丸い大きな金だらいの中の金魚やヨーヨー、赤や緑のかき氷の映像を伴っ
ている。

高台にある町営住宅から商店街までは徒歩でおよそ三十分ほどの道のりだった。町の賑わいを
めざして父と母と弟といっしょに歩き始めるのだが、いつも家の外に出ると、夜の闇の深さにど
きりとした。昼間と全く様子の違う世界がそこにあるということに、いつまでも慣れなかつたの
だ。

家族いっしょに行くのだし、時には近所の友だちやその家族といっしょに歩いていくのだが、
それでもどこか心細い。急な坂道の脇は墓場になっていて、そちらは見ないように歩いていくと

坂の下から、川の音が聞こえ始める。川面は夜の闇に覆われて真っ黒だから何も見えないものの、川辺に沿って歩き始めるや、それまで遠くから聞こえていたカエルの鳴き声が急に大きくなり、カエルたちがあちらこちらから迫ってくるような不気味さだった。そして、その場所へ来ると、父は決まってあのカエルの歌を歌い始めた。

♪月夜の田んぼで、コロコロコロ　コロコロコロ　鳴る笛は

♪あれはね、あれはね、あれは蛙の銀の笛、ささ銀の笛…

橋を渡って、向こうに町灯りが見えるまで、この歌を繰り返してみんなで歌った。いつの間にか心細さも消え、町の灯りが近づくにつれて、いろんな夜店を思い浮かべ、胸ははちきれそうな期待でいっぱいになっていった。

今でも人通りのない夜の田舎道を歩くと、自然にこの歌が口をついて出てくる。そして、歌い始めて、やおら歌っていることに気がつく。すっかり刷り込まれているのだ。

この歌に限らず、父はその場所や季節に合わせてよく歌を歌った。青々とした水田の側に行く時には「おお牧場は緑」や「草競馬」を歌い、秋には「赤とんぼ」、冬には「雪の降る町を」を歌った。そして寒さが温む頃になると、「あわて床屋」や「春になれば」が聞かれた。そんな季節の

歌は今でも父の歌声といっしょに思い出す。

父は何の為に、どこへ向かって歌っていたのだろう。

カラオケで歌う自己陶酔的な歌ではなかったし、人に聞かせようとして歌っている風でもなかった。かといつてわたし達に教えようとしていたわけでもない。歌はいつでもふつと口をついて出てくる様子だった。思いをどこかへ向かって放つための歌、そんな気がする。

どこへか。自分でも、人でもないどこか、どこか遙かなところ。

歌っている父の眼も気持ちも、ここではなく、どこかわたしの知らない遠くにあるということ、子どものわたしにも分かっていた。父の歌は祈りのようだったと、今、新しい発見のように思いつく。

わたしは父の歌から、何よりも、向ける眼差しの方向を学んだのではなかったかと、そんな気がしてくる。

痴呆が進むにつれ、父のできることはひとつ、またひとつと少なくなっていく。まず、絵が描けなくなつた。次ぎに文字が書けなくなり、さらに読めなくなつた。

ところが、ある時、母の勧めで父の日にハーモニカをプレゼントしたところ、父はそれを意外なほど達者に吹いた。楽譜もないのに、いろんな曲を次から次ぎに吹くのである。良い音色で、味わい深い吹き方だった。吹いた後に余韻が残る、そんな吹き方だった。

父がハーモニカを吹いていたのはわたしは学校へ上がる前くらいまでのことだったと思う。とても古い、断片的な記憶の中に、砂利道を散歩していた父が、ズボンのお尻のポケットからハーモニカを取り出して吹き始める場面がある。そして後ろについて歩く時、父のお尻のポケットはいつも膨らんでいた。あのポケットに入っていたものはきつとハーモニカだったのだろう。

父の消えてゆく記憶のなかでハーモニカだけがなくならずに残っていたのだろうか、それとも古い記憶の底の方から、忘れていたはずのハーモニカが痴呆の進行に伴って顕われてきたのだろうか、何とも不思議だった。

父がさかんにハーモニカを吹き出した頃、わたしはカセットテープレコーダーで、父の演奏を録音した。父が次々といろいろな曲を吹く間、テープを回しっぱなしにしていたら、六十分テープ一本分に録音ができた。

けれども今、そのテープをわたしは聴くことができない。最後に残ったハーモニカさえも吹けなくなってしまった父のことが思われてつらいのだ。

もう好きだった歌の一節も、口に上らせることができなくなった父は、それでも心の深いところでは、毎日、遙か遠くへ向かって、新しい歌を歌い続けているような気がする。

九月 家族会議

第二人とわたしの三人兄弟のうちで、わたしが一番しかられた。なぜだろう。まずは長女だったから。次に要領が悪かったから、さらには生意気であり、何かと父に楯突いたから。でも一番の理由はわたしが一番父に似ていたからだろう。

しかり方は大きく二つに分かれる。まずは激怒型、これはもうかなり恐ろしい。二段ベッドの上から引きずり下ろされたり、玄関に突き落とされたりとそれは災難であった。荒くれ者の非行少年達を日々相手にしているのである。脅しやすかしくはお手の物だったのだろう。日頃はいつも笑っているような優しい父なのに、一旦お怒りモードに襲われるや、まるで別の人になるのだった。あの顔も声も相当に怖かった。それなのに、わたしときたら、一方で恐ろしさに慄きつつも、反抗心を露にした。あの時の父の激怒に真正面から向かっていった時の恐怖を思えば、わたしはどんなことにも勇敢に立ち向かっていけるような気がしている。

もうひとつは教育型、これには家族会議を通して民主主義的解決を図ったものや、テープレコーダーで録音しながらのカウンセリング調のものもあり、こちらも父の仕事柄を反映していて、なかなか手も込んでいた。

怖かったことはあまり思い出したくないから、後者の方を取り上げるとしよう。

夕食の後、「今日は家族会議を開く」と、父が宣言するや、みな緊張した。家族会議はどういうわけか、茶の間ではなく黒く光った物々しい応接台のある部屋で開かれた。

「家族会議」とタイトルの書かれた帳面があり、記録が取られる。といつても、参加者は父と母と二歳下の弟とわたし。後は発言権のないまだ赤ん坊の弟だけである。議題は「どうして兄弟喧嘩をなくすか」とか「家の仕事を怠けずにやるためのきまり」とかいったものであったが、九月頃、祭りの時分に開かれた家族会議はなんともおかしなもので、議題はわたしの紛失癖にどう対処するかというものだった。

その日、わたしはお祭りのためにもらったおこずかいをほとんど何も買わないうちにすっかり落としてしまっていた。年に一度の神社のお祭りは三日間続く。三日間のおこずかいの金額は児童会の話し合いで決められ、それ以上お金を持っていたり、決められた額ではまかなえないほどたくさん買い食いしたりしていると、目撃者から学級会で追求されるしくみになっていた。

いったい幾らだったのだろう。五〇〇円くらいではなかったろうか。金魚すくいが五円か十円

だったから。

わたしがお金をなくしたのは祭りの初日だった。児童会で決められたおこづかいを全額落としたのだから、明日もその次ぎの日も続くお祭りでしたしは何も買えなくなるという窮地に立った。母に訳を話し、お祭りのおこづかいを再度要求し、母が判断に迷い、父に告げ、それで家族会議の運びとなったのだろう。この失くし癖を今のうちに何とかしなければ大変なことになると親連は常々頭を痛めていたのかもしれない。

この日はまずは尋問から始まった。何をしてお金を落としたのか、なぜ落としたのか、すぐに気が付かなかったのはどういう訳か。しかし、聞かれても答えようがないのである。知らないうちに手からすつぽり抜けていたのだ。

わたしは何か心に奪われると知らないうちに手許が弛んでしまらしく、これまでも学校に行き帰りに、弁当箱とか、友達から借りた本だとか、家の鍵だとか、実にさまざまなものを失くしていたのだ。

議論はお金を落としたのだから、学校のきまりに従ってそれ以上のお金はもらえないとするか、落とした分は使わなかったのだから、その分またもらえるかというものだった。弟がわたしの味方をしたのか、あくまで決まりを守るべきだと主張したのかは覚えていないが、議論の末、父はわたしに失くした分の半額を与えるという決定を下した。少し残念ではあったが、一文無しより

はました。でも残り二日のお祭りは、景気よくお金を使う弟や友だちを横目で眺め、あれもだめ、これもだめと買い控えなくてはならず、楽しみは半減した。

この時の家族会議や、両親の教育的配慮は、しかし、効果があったのだろうか。その後、わたしは、一時は緊張して、所持品を何度も確認したに違いなかった。そして物を落したり忘れたりすることは、しばらくは少なくなつたのかも知れない。しかし、生まれ持った性格、家族会議くらいで変わるものではない。今でも相変わらず、傘を買つては置き忘れ、新しいハンカチを持つて出かけては、どこかへ落としている。子どもの頃からしてこれだから、わたしは「最近物忘れがひどくなつたわ」なんて言う訳にもいかない。もの忘れはもともとひどいのだ。

父はそんなわたしの先々のことを考えては憂えたが、父が心配していたように自分の子どもをどこかへ置き忘れることもなく、どこかで見失つてしまうこともなく、どうやら無事に育てた。

しかし、このわたしの紛失癖は実は父親ゆずりなのである。父は毎朝、鍵は、眼鏡はと母や子供達に捜させていた。そしてわたし達は、あまりに毎朝のことだったので、それを疑問にも思わず、あちこち探しては「お父さん、あつたよ！」と得意気に新聞紙の下や、ちゃぶ台の下から眼鏡や鍵を見つけ出すのを日課にしていたのである。

我が家の次男が小学校に通うようになった時、彼がわたしに輪をかけてひどい紛失癖、忘れ物

癖の持ち主であることが発覚した。

アメリカの小学校は、そもそも学校へ何も持っていかなくてよかった。バックバックの中に一冊だけ宿題のためのノートをころんと入れて行き来するだけである。

彼が学校から持ち帰らねばならぬたつたひとつの宿題帳を毎日のように忘れ、その度に学校へ取りに戻らねばならなかった時、わたしは家族会議を開こうとはしなかった。それが無駄だと身に沁みて分かっていたからだ。しかたない、血だもの、と潔くあきらめ、日々彼の忘れ物取りに付き合うのだった。

十月 大学芋はどっさり

芋、栗、カボチャがおいしい季節になった。

二日ほど前、母から栗の渋皮煮と、マロングラッセが冷凍便で届いた。マロングラッセは父がお世話になっている病院の看護婦さんや看護士さんに食べてもらおうとたくさん作ったと言う。手間暇かけて母が作った貴重なマロングラッセ、一度に食べてなるものか。家族でひと粒づつ味見をして、そのまま冷凍庫にしまった。我が家の冷凍庫のスペースが許す限りこのマロングラッセをしまっておこう。それにしても冷凍庫は超満員の状態だ。かさ張るタコ焼きの他には大学芋が場所ふさぎになっている。

最近は大学芋は冷凍に限ると思っているわたしは冷凍庫に大学芋を常備しているのだ。外側はぱりっとして中はほくつと柔らかい冷凍の大学芋は、小腹が空いた時や弁当箱の隙間を埋めたい時に重宝する。

しかし、冷凍大学芋のことを父が知つたら何と言うだろう。「大学芋くらい自分で作れ」というだろうか。父は「お父さんが作つてやろうか」と言うに違いない。

子どもの頃、父はよく大学芋を作つた。それも我が家ではとうてい食べきれないほどどっさり。

大量の芋の皮が剥かれ、切り分けられ、揚げられ、これも大量に煮詰めた甘辛のたれにからめられた。大皿に大学芋が盛られ、いくつもの大皿がちゃぶ台を埋め尽くしていった。

それにしてもあの大量の大学芋はどうしたのだろう。冷凍庫などなかった時代である。ご近所にでも配つたのだろうか。

この大学芋で大変だったことがある。

わたしが小学校二年生の十月に下の弟が生まれた。まだ母と赤ん坊が病院にいたある日、父が大学芋を作つた。そして、どういう訳か、わたしとすぐ下の弟がその芋を持たされて、長い道のりを歩いて母のいる病院まで持つて行くことになったのだ。

父は鍋二つに作つたばかりの大学芋をぎっしり詰め、蓋をして風呂敷で包んだ。弟が一つ、わたしが一つ持ったのだが、いくら歩かないうちに重さがこたえ始めた。坂道を降りたところで、二人とも鍋の包みを地面に降ろし、痺れた手を振つたりしなければならなかった。

わたしは弟の鍋がわたしのものより軽いのを知っていたので、弟をうまくだまくらかして、わ

たしの包みと取り替えっこしたらしい。そこいらのことを、作文に書いたので覚えている。作文によれば、姉なのに弟をだまして、重い方を持たせたりして悪かったとすぐに反省し、また取り替えっこしたらしい。

それにしても、こんなにたくさんさんの大学芋を母がみな食べるはずはない。いったい、そんなにたくさん持つていく必要があったのだろうか。またそれほど重いものを小さな子ども達に運ばせて父は一人で何をしていたのだろうか、今になってみればいくつも疑問が浮かぶ。

きつと、大学芋は同じ病室の人や看護婦さん方に差し上げるつもりだったのだろうか、実際そうしたのだろう。父の大学芋をみんなが喜んでに違いない。そして父はわたし達を使いに出した後、延々と芋を揚げ続けていたような気がしてくる。

ところで下の弟が生まれた日のこと。病院から知らせの電話があった。当時、自宅に電話を持っている家などほとんどなく、電話局に勤めている人の家の軒先に赤電話が設置しており、電話がどこかからかかってくると、その家の人がそれを受けて、家まで伝えに来るといしくみになっていた。弟が生まれたという知らせもそんな風に届いたように記憶している。

知らせを受けてすぐ、わたし達は病院に向かった。夕方だった。父を真ん中にしてわたしと弟

が両脇にくっついて病院までの道のりを歩いた。男か女かはまだ分かってなかったのか、それともわたし達には隠していたのか、父は歩く道々、弟と妹とどっちがいいかとわたし達に聞いた。わたしは女の子がいいと主張し、弟は男の子がいいと対抗した。

病院に着いてみると、待ち合い室が人だかりで、なんだかひどく熱気がある。弟が生まれたのでみんながお祝いに集まっているのだと思っていた。ところが看護婦さんはテレビの前から立ち上がると、わたし達を賑やかな待ち合い室から離れた人気がない病室の廊下に連れていった。その廊下の隅に赤ん坊が入れられたワゴン車だけがほつんと置いてあった。

時は東京オリンピックの頃、東洋の魔女といわれた日本女子バレーボールチームの金メダルをかけた闘いの最中だったのだ。病院に居る人達が、赤ん坊なんか構っておられないという様子だったことに、小さなわたしは慥然となった。

生まれたての赤ん坊は真っ赤で、くしゃくしゃな顔をしていた。しかも女の子ではなかった！弟が勝ち誇ったような得意な顔をしたので、わたしはなんだか負けたようで悔しかった。しかし赤ちゃんの顔はすぐに白く可愛くなってゆき、わたしは世話もしたが、生きているお人形のように小さい弟を楽しんだのだった。

東洋の魔女達は金メダルを獲得し、また他の種目でも日本人の活躍が伝えられ、日本中が何か

沸き立っているようで、その気分は子どもにも伝わって来ていた。

父は赤ちゃんは東京オリリンピックの最中に生まれたのだから、平和を願って「和」という字を入れようと提案した。

その時、「平和」という言葉とわたしを取り囲んでいる世界とが結びついて、晴れ晴れと胸が膨らむ思いだった。戦後二十年、日本はすっかり平和な国となって再生していたのだ。そして、ますます豊かになりつつあった。

おもちゃや絵本、お菓子、テレビの番組、わたしが育つ時とは比べ物にならないほど何もかもが豊富になっていた。日本は、その後もますます豊かに、そして便利になった。スーパーでは冷凍の大学芋さえ買えるほど。

しかし今、その異様に膨らんだ豊かさはパチンと弾け、また世界の平和はぐらりと傾いている。今を生きている子ども達は、あの日わたしが感じたようには、「平和」という言葉の語感を感じてはいないだろう。大人も若者も子どもも、閉塞感と先の見えない漠とした不安にまわりつかれているような気がする。

あの時代、今ほど豊かでも便利でもなかったが、行く手に明るい希望を見ていた。あの時の気分をなつかしく思う。

十一月 秋の子ども展覧会

その日父は当直明けで、とりわけやることもなく、描きかけの油絵を続ける気にもなれなかったのだろう。あるいは、今日のようにきりりと澄み切った秋の空を見上げて、何か変わったこと、とびきり充実したことをしたいと思っただのかもしれない。家の脇で泥だんごをこねていたわたしと弟といつもの遊び仲間に、「秋の展覧会をするぞ！」と宣言した。

そこにいた子ども達は誰一人テンランカイがどういう遊びなのか知らなかった。ぽかんと口を開けている子ども達を見た父は、まずわたしにお金を渡し、近くの駄菓子屋へ行つてキャラメルを人数分買ってくるように言いつけた。

父はキャラメルのひとつ箱ひとつ箱に「秋のてんらんかい参加賞」とていねいに書いてデザインまでほどこした紙をくりりと巻きつけた。子どもをその気にさせるには、まずは賞品。父はその昔、田舎の小学校の青年教師だったこともあったから、そういう勘も働いたのだろう。

軒下にずらりと賞品のキャラメルが並べられると、子ども達は俄然やる気になった。まず、父はそれぞれに画用紙を配り、絵を描くよう指示した。子どもたちが黙々とクレヨンで絵を描いている間、父はどこからか大きな模造紙大の紙を持って来て何やら作業を始めている。

わたし達の絵が描き上がると、今度は習字だという。いっしょに遊んでいるうちの二人は二学年上だったし、同い年の子も、書道教室に通っていたから習字ができたが、わたしと弟は筆など持ったこともなかった。父が家の硯箱を出してきて、墨の刷り方を教えてくれたので、水を黒くすることはできたけれど、くねくねと思うようにならない筆で、薄くて頼りない紙に文字を書くのはあまり楽しいものではなかった。他の子の書いている様子を真似しながら「くり」、「きく」と書いたものの、なんとも不本意な出来映えで、明らかに見劣りがした。

硬筆コンクールの時には、横で見張っていて、何度も書き直しをさせるのに、こんなに下手な習字を一枚だけ書かせて、それでよしとするなんて父らしくもないと思った。父にすればこれは展覧会あそびだったのだろうか、小学校二年生では、そういうところまで考えは及ばない。ともあれ、夕方までにはいくつかの作品が出来上がり、展示の運びとなった。

父は大きな紙を何枚か張り合わせたものを、家の外壁の端から端まで張り巡らせ、紙の上には「秋のてんらん会」という大きな切抜き文字を糊付けした。その文字というのがふるっていて、いろいろな柄の包装紙をレタリングの文字に切り抜いたもので、その巧みなタイトルのおかげ

で、一度に展覧会らしい装いになった。五人ほどの子ども達の絵や習字や作文といった作品がその下に貼られ、名前の札も付けられた。さながら秋の野外展覧会といったところだ。

友だちのお母さんやお姉さんやらが見に来ては誉めてくれたし、家は道に面していたから、通りかかる人も見では声をかけてくれたような気がする。最後の仕上げに、父は自慢のカメラを持ち出し、子供達を作品の前に並ばせて記念写真を撮った。

アルバムの中の子ども達は、賞品のキヤラメルを手に、どの子もえらく得意気な顔をしている。

十一月、今日のように陽射しが柔らかく、空が澄みきった秋の中になると、あの日の展覧会の一日が生き生きと甦ってくる。

父はすっかり記憶を失くしているが、あの写真の中の子ども達は今でもその日のことを覚えているにちがいない。

十二月 父の作ったクリスマスケーキ

わたしが小学校四年生から中学一年までの四年間、父は隣の県に単身赴任していた。母が地元の小学校に勤めていたため、家族ぐるみで引越すわけにはいかなかったのだ。

まだ二歳の弟には手がかかった。弟が赤ん坊の時は母が仕事に出かけている間、近所の散髪屋の若夫婦に預けられていたが、少し大きくなり、保育所に行く頃になると、行きはわたしが学校の行きがけに保育所へ連れて行き、帰りは二つ下の弟が学校帰りに弟を迎えに行った。

小さな弟は遠慮なく我々を手こずらせ、わたしも、すぐ下の弟も、あの手この手を使つては、機嫌をとつたり、だましたりしながら、それはけつこう骨のおれる仕事だった。母は見るからに大変そうだったから、わたし達も、甘えや泣き言はぐつとこらえた。この時期は我が家に訪れた初めての試練の時だったのかも知れない。

そういう日々であったから、父がそれぞれにお土産を携えて帰つて来る月に一度の週末が待たれた。三十六色の色鉛筆セットや、流行っていた外国のポップスのレコードなど、小さな町には

売っていないような珍しいものがあつてわくわくした。小さい弟には次々に新しいおもちゃが増えていった。時代も、豊かな時代になりつつあつたのだ。

クリスマスも間近に迫つたある週末のこと、父はとりわけ大きな包みを抱え、意気揚々と歸つてきた。歸ってくるなり、「ケーキを作るぞ!」という。事の意外性にわたし達は喜ぶというよりは面食らつた。クリスマスになると、パン屋や菓子屋の店先に並ぶ、夢のような食べ物、あのケーキ。あんなのが作れるわけではないと、始めから疑つてかかつた。一つの包みは新品のピース天火——ガス台の上に乗せて使う旧式のオーブン。もう一つの包みは小麦粉や大きな固まりの無塩バター、チョコレートの固まり、それに、絞り出しの道具や銀色の小さい粒、といったケーキ作りの材料だつた。粉ふるいや絞り出しの道具まであつた。見たこともないような道具や材料に心は次第に惹きつけられていったのだつた。

父の職場の官舎に住む奥さん達がこの時期になると、みなで集まり、クリスマスのでコレーションケーキを作り、それを職場の人達にプレゼントするらしく、父はそこへ出向いていつて、ケーキ作りの手ほどきを受けたらしかつた。手作りのケーキを見て、父はきつと感激したのだ。それでその感動をわたし達に伝えたいと思つたに違いない。何より父自身がそのケーキ作りをやつてみたてしかたがなかつたのではないだろうか、今になればそんな気がする。

父は細かく書き込んだメモを見ながら、わたしと弟にあれこれと指図した。小麦粉をふるいで振ったりするのはままごとのようだったし、スポンジケーキが焼ける時はお菓子屋さんの店先そっくりの甘い匂いがしてきて興奮した。

一番苦労したのはバタークリームを作るところだった。バターと砂糖と卵を泡立器でかきまわすとクリームになると父は主張するのだが、三人で交代でかき混ぜても、腕が痛くなるばかりで、少しもクリームらしくならなかった。そればかりか、一度はクリームになりそうな気配を見せたボールの中身が今度は見事に分離してしまった。もうだめだな、やっぱりお店に売っているケーキを作るなんて無理なんだと、わたしと弟はさっさと見切りを付けて遊び始めた。

わたし達が興味を失った後も、父は孤軍奮闘し、その甲斐あつてやがてボールの中味はみごとにクリームに変わっていた。指をつつこんでなめてみると、とろりとしたバタークリームになっていた。それはうっとりとするようなおいしさだった。ここまで来ると、もしかしてケーキはできるのかもしれないと期待が湧いてきた。

さて、いよいよ父のアーティストとしての本領が発揮できる時となる。そう、父は暇があればキャンバスに向かっている日曜画家。慎重にクリームをスポンジの台に塗り付けた後、父はそのクリームをいくつかに分け、赤と緑の食紅でクリームに色を付けた。それを絞り出しの金具が付

いた布の袋に入れると、白いケーキの上に、ピンク色の花びらを作っていた。花びらは中央から外側に向かつてくるくと巻かれてゆき、やがてバラの花になった。薄緑のクリームで葉も描かれ、仕上げにふりかけられた銀色の粒はクリームの上できらきらと光っていた。お菓子屋の店先に飾られているケーキが我が家のちゃぶ台の上に並び、まるで夢を見ているようだった。

夕方までに、ケーキは三つ出来上がった。父の言いつけでそのケーキを、遊び仲間のいるお向かいの二軒の家を持っていった。その家の人達が驚き、そして喜んだのは言うまでもない。わたしも、ケーキを届けた家の人達も、その出来事はよく覚えていて、たびたび話題にのぼったが、父はそんなことがあつたかなあ、とすっかり忘れていた。まだ痴呆が出るようになるずっと前のことだったが：

そんな思い出深いケーキ作りだったが、父親がケーキを作ったのは後にも先にもこの時だけだった。道具はあるというのに、それから一度もケーキを焼こうと言いだすことはなかった。あのケーキ作りは父にとつてかなりしんどい作業だったのだろう。しかし父が伝えたかった感動は充分、子ども達に伝えられた。

父の手ほどきの甲斐があつてか、ケーキやクッキーが自分で焼ける歳頃になると、わたしはその旧式のピース天火を使つてよく菓子を焼いた。わたしが母にパウンドケーキの作り方を伝授してからは、母はそれをいくつも作っては、あちこちに配っていた。受け持ちのクラスの子三十人

全員に一本づつプレゼントしたというのだから、母の教育愛も根性も相当のものだ。あの旧式の天火は実家でオーブンレンジを新調するまでの二十年間、実にたくさんのケーキやクッキーを焼いてくれたのだった。

さて今年もクリスマスのケーキやクッキーを焼く季節。子ども達が大きくなっても英語教室や教会用にケーキやクッキーをどっさり焼く。年々億劫になつて材料を揃えるまではめんどくさくてしかたないのだが、一旦テーブルの上に道具や材料を並べてお菓子屋さんモードに入りさえすれば、クリスマスキャロルが流れ、甘く暖かい匂いに包まれるお菓子作りの一日は悪くない。来週には帰省し、父がいる病院を訪ねる。父にバナナケーキを持って行こうと思う。

一月 お年玉は日記帳

小さい頃、わたしの家は日本の伝統的な風俗習慣からは程遠い暮らしをしていたのに、どうい
うわけか正月だけは様々な決まりごとがあった。

大掃除を済ませて清々しく片付いた部屋に、母はお供えのおもちをあちらこちらに置き、その
前で手を合わせた。その後、花器の前に座り新聞紙の上に松だの菊だのを並べ、神妙な顔付きで
花を生けるのだった。花バサミを握り、花を凝視する母を少し開けたふすまから盗み見していた。

わたし達が紅白歌合戦に興じる間、母だけ冷たい台所に立っていつまでも煮物などを作ってい
た。父や子ども達のくつろいだ気分と対象的に正月を迎える母には何か近寄りがたい厳しさのよ
うなものがあつた。主婦にとつて正月とは何と大変なものだろうと、わたしは遠い将来の自分の
姿をそこに重ね合わせて、そんな日が来るのはあまり有り難くないような気がしたものだつた。

そして我が家の決まり事と言つてもいいくらい、大晦日の夜には父の機嫌が悪くなり、時には
火山の噴火のごとく爆発した。いったい父の気持ちの中で何が起こっていたのだろうか。それも

これも非日常の儀式を執り行おうとする緊張が、父にも母にもあつたからなのだろう。

元旦の朝はそれでも夕べの爆発や気まずさもみごとに洗い流され、すがすがしい正月の朝がそこに用意されていた。

わたし達は正月の朝だけはお湯を使わずに冷たい水で顔を洗うことになっていた。わたし達が顔を洗うのを待って、母はそれぞれにおろしたてのタオルをあてがう。これが意味のある事らしかったが、水を少しも吸わないざらりとしたタオルの感触は心地よいものではなかった。しかしこの独特の感触の故に、また新たな年を迎えたのだと実感した。

母は樟脳の匂いがふんとする着物を着ており、わたしもウールの着物を着せてもらった。着物を着るのはこの日だけだったから、この樟脳の匂いはそのまま正月の匂いだ。何もかも日常と違う。匂いさえもこの日だけのものだった。

この日は炬燵のある茶の間ではなく、ひんやりとした六畳間の応接台の周りにみなで座る。

初めにお茶をいただき、干し柿を食べる。干し柿の種がいくつ入っていたかをそれぞれが申告し、「四つだから今年は幸せ」とか「五つだと縁起が良いとか」どれも良い事ばかりの「占い」を言ってもらった。お茶に続いて父から順番に、盆に載せられた大きな鏡餅を持ち上げ、うやうやしくお辞儀をし「今年〇歳になります。」と宣言するのだ。

お鏡を持ち上げるだけなのに、みながずいぶんかしこまり、神妙な顔をしていた。

その後はそれぞれが、これも厳かに三々九度の杯をいたたき、母が一日がかりでこしらえたおせち料理を食べた。なますも黒豆もそれぞれの野菜の煮物も、嫌いでも少しづつは必ず食べなければならず、またそれぞれの食べ物には願いや教訓が添えられた。黒豆はまめまめしく働く。れんこんは見通しが良いという風に。

わたし達は父母の郷里とは離れて暮らしていたので正月に親戚が来るわけでもなく、また訪ねることもなかった。それだったからよその家にはあるらしいお年玉という習慣がわたしの家にはなかった。子どもにお金を渡すという習慣を父はなにか嫌っていたような節もある。

お年玉はもらわなかったが、父からお正月には何度となく日記帳をもらった。何かにつけて「書いておけ」と言うのが父の口ぐせだった。しかしそういう父が続けて日記を書いているとは思えなかった。

父が子ども達に日記を書かせようとしたのは父の父、つまり祖父の事が頭にあつてのことではなかったらうか。

父がまだ若い頃に他界した祖父は、いわゆる日記マニアで、自分の事といわず、町の出来事といわず日々事細かに記録していたらしい。ほんとうかどうかは知らないが、祖父の日記を頼って近所の人が過去の事柄を確かめに家に来ることもあつたという。その度に祖父はずらりと年ごと

に並べた日記帳を取り出してきてはその日付の所を開いて見せたということだった。そんな祖父のことを、もう痴呆が始っていた父は得意気にそして生き生きと話してくれた。そしてそれは初めて聞く祖父の一面だった。

八年ほど前の正月。あの頃は父の進んでゆく痴呆を少しでも防ぎたいと帰省の度にあれこれりハビリじみたことをやってみていた時だった。いっしょに絵を描いたり、粘土細工を試みたり、また俳句カルタや漢字カルタなど、子育ての中でやってきたことを父にやらせようとした。それはそのまま、わたしが小さな頃、父からやらされたことでもあった。その時、わたしは父に日記を書かせようとした。「お父さん今日どんなことをしたの」と聞くが当然覚えているわけはない。「お父さん今夜何を食べたの」という問いも父には何の助けにもならない。そこで「お父さん、今日一日のことをわたしが言うからその通りに書いて」と、わたしが言うことを父に聞き書きしてもらった。父は書きながら「そんなことしたの」「そんなことがあったの」と聞き返してながら書き取っていたが、次第にイライラした表情を見せ、爆発寸前の時のように緊張が高まってきた。

父は自分が記憶できないということを否応なく見せつけられ、それに怒りを感じたのだ。わたしが覚えている父のしたことを父自身は覚えていない。それなのにそれを事実として記録させられるのは考えてみれば残酷なことだ。わたしはあわててその作業を止めた。

父はいわゆるエピソード記憶ができない。しかし今考えていることや感じたことに対してはまともな言葉でしゃべっているのだから今話しているようなことをそのまま文に書けばいいのだと思いついた。そこで翌日また日記帳を取り出すと、「お父さん、今おとうさんが見えることを文に書いてみて」と促す。父は素直にペンを執ると、父らしい巧みな文章で母やわたしがそこにいること、娘からせかされて情景を描写しようとしていることなどを書き連ねた。過去のことを書くのは無理でも今のことを書いていけばよい、これは我ながら名案だと思った。

翌日、同じことをするべく昨日書いた日記帳を父の前に開いた。父は昨日自分が書いた文を声に出して読み、これは誰が書いたのかと問う。お父さんが昨日書いたのよと言うと、父は受け入れがたい様子で混乱を見せた。もう勧めても何も書こうとしなかったし、わたしも父に無理やり書かせようとすることがむごいことのように思えてきた。リハビリのつもりが本人の気持ちを傷つける結果になってしまうのだったらこんなことやらない方が良いのだとその時思った。そして悲しかった。

今年のお正月も父は病院で迎えた。父にはもう妻も子ども達も分らない。けれども父に声をかける人にはここにこと微笑み、もう緊張や不安からも開放されているように見える。太陽の光が降り注ぐ広く明るいホールには同じように痴呆の進んだ人達が集っている。以前の父なら俺は

こんな老人達と同じではないと憤慨したり、自分が職員のもりで老人達をお世話しようとしたり、指導員の人達をどなりつけたりということもあつたが、今は素直にケアを受け、まわりのお年寄りや指導員の方々ともあまりトラブルもないようだ。様々な葛藤や不安の後にやってきたこの平和な状態は家族にとつても、また本人の事を思つてみてもほんとうに有難い。

人がどのようにその終末を迎えるのか、わたし達はそれを選ぶことはできない。しかし、どのような終わりであっても、人生を閉じるというのは厳粛な営みだ。

新しい年も、父の一日一日が守られますように。

二月 ちゃぶ台でのカウンセリング

新し物好きの父は、8ミリカメラにしろ、テープレコーダーにしろ、目新しい物は、いの一
に買った。借家住まいの公務員、しかもキャンパスだの絵の具だの本だのと、父は一人、食べら
れないものにお金を注ぎ込むわけで、もし母親が小学校の教員として働き、食べるものを手に入
れてこなかったなら、わたし達は食べることに事欠いたかもしれない。しかし、そういう父の
お陰で我が家は豊かな文明の利器に取り囲まれていた。

そうは言うものの、オープンリールのばかりでかいテープレコーダーはどう考えても、四畳半
の茶の間には不釣り合いであった。それでいったい何を録音したのだろうか。テープの入った段
ボールの箱は二つも三つもあつたが、聞き返すことはあつたのだろうか。そう、父はカメラにし
ろ、8ミリにしろ、テープレコーダーにしろ、物事を記録することにえらく情熱を燃やすちだつ
た。

その時わたしはそのテープレコーダーを前にして、父からカウンセリングもどきを受けていた。確か小学校二年生だった。学級担任から話しがあつたのか、友だちの親から文句が来たのか、どうやらわたしは誰かとけんかをしたことが問題になつていようだった。

テープレコーダーの重そうなスイッチを父がガチャリとひねると、リールが回り始めた。父は普段のようではない、ちよつとよそ行きの言葉遣いで、わたしの名前にも「ちゃん」をつけて、今日はどんなことがあつたの、と聞いてくる。ゆつくり回るテープレコーダーを見つめてみると、嘘は言えないと観念した。テープレコーダーにちゃんと嘘の証拠が残る。これでは閻魔大王の知るところとなり、舌を抜かれてしまう。日頃は父が怖いあまりに、都合の悪いことは適当にごまかしていたが、この時ばかりは本当の事を白状したに違ひなかつた。

父はそれを後で聞き、職場でやる要領で八歳児の精神分析を試みようとしたのか、あるいはわたしを訴えた友人の証言が真実だったかどうかを確かめ、反論の材料にしようとしたのか、今となつては知る由もない。けれど、あのちゃぶ台の上のテープレコーダーと神妙な父親と娘の図を思い浮かべると、笑いが込み上げてくる。

*

その後も、テープレコーダーの持ち込みはないまでも、わたしはしばしば茶の間でのカウンセ

リングを受けるはめになった。

中学校三年生の時、受験する高校を巡ってのカウンセリングは何回にも渡って続いた。要するに、わたしが通いたい高校と父が通わせたい高校が異なっていたので、父からの説得が続いていたのである。

わたしは中学校一年生の頃から、いえ、もっと前から、ひとつの高校生活を夢見ていた。それは無謀にも、親から離れ、下宿して、市内の高校に通うという夢だった。その夢の実現に向けて、中学校に入るやいなや、それはもう、効率が悪かろうがどうであろうが、とにかく鬼のように頑張っていたのだ。これだけ努力を惜しまずに実績を積んだのだから、他の成績がいい子達と同様、わたしにも下宿して市内の高校に通う権利が与えられると勝手に決めていたのだ。

しかし、受験校を決める段階になって、父は何とかわたしの決意を変えさせようと、くだんのカウンセリングが始まったのである。父の言い分はこうである。田舎の中学校でちよつとばかり成績が良くても、市内の高校へ行けば、元々ガリ勉で持っているわたしはどん尻にだつてなりかねない。それよりは家から五分のところにある地元の高校に通う方が教師達からも目をかけてもらえるだろうし、大学受験には有利だといふのである。しかしそれはその通りかもしれないけれど、その見はセコイ！ 勉強だけが高校生活じゃあない！ とわたしは主張した。

受験勉強にもいいかげん飽きていた中三のわたしは、実際、高校の成績なんてどうでもよかつ

たのだ。下宿して市内の高校に通うということこそがいわば夢の頂点だったから、その後のことは実のところ後は野となれ山となれという心持ちだった。そして、そのことは完全に父にはバレていた。きつと父はわたしの成績が下がり、勉強することも投げ出し、親元を離れた自由さから、あらゆる方向へと転落すると、最悪の筋書きを描いていたのだろう。そこが非行少年や非行少女たちに長年かかわってきた者の勘、いや深読みだったのかもしれない。

二月のある日、父は、しぶとく市内の高校をあきらめないわたしをその高校へ見学に連れて行くという強硬手段を取った。その学校の様子を見せるために、わざわざ中学校の授業を休ませ、電車とバスを乗り継いでわたしの志望する高校へ連れて行ったのである。

その学校がある場所は馴染みのある県庁所在地の駅周辺からずいぶん離れた寂しげなところだった。その高校の周囲の見知らぬ通りを歩きながら、この辺りの知らない人の家で寝起きするのかもしれない、急にこころもとなくなってきた。身体全体にひゅうつと肌寒い風が通り抜けるような気がしたのである。そうすると、あれほど夢にみて、膨らみに膨らんだ高校生活の絵がなんだかいつぺんに色褪せてしまったのだ。

落ちたのである。父の作戦勝ちだった。やはり十五歳では勝ち目はなかった。わたしは自宅から見えるほど近くにある高校に通うこととなり、父は胸を撫で下ろしたのだった。

もしあの時のカウンセリングや父の作戦がなかったとしたら、わたしはどんな高校生活を送り、その後はどういう道を歩いていただろうか。きっとわたしの人生はもつと違った色調をおびていたことだろう。どこかでわたしはその複雑な色調を望んでいたが、父にとってはとんでもないことだった。

危険や試練や波乱万丈といったことから娘を遠ざけたいという親心は分からないわけじゃない。しかし、どこかで、わたしは捨ててきたもうひとつのわたしの影（シャドウ）をいつまでも未練がましく思ってきた。その未練がまじさが、また、わたしを前へと動かしてもきたのだろうが…

さて、茶の間のカウンセリング、我が家の子育て現場ではどうだったのだろう。

わたし達が基本的に大切にしてきたのは、子ども達のその時期にしかできないことにブレーキをかけないということだった。遊びにしろ、運動にしろ、またツツパリにしろ、その時期に自分を賭けてやらねばならないと感じることが子どもにはあると思うのだ。子どもの行く末を心配するあまり、彼らの「今」を損なうことだけは避けたいと思っていた。しかし、子どもの意思や気分の赴くままに、全く手綱を放してしまえば明らかに暴走する。子どもによっては、暗い場所、

危険の匂いがする場所へは近づかないように身を守ろうとするが、また子どもによっては、敢えて、そちらの方向へずんずんと引き込まれていく。父がその昔、わたしを縛り付けないまでも、目に見えない手綱をしつかり握っていたことが、思春期の子ども達と渡り合う中で、しばしば思い起こされた。

ある時、親の願いと子どもの方向とは真つ向から対立する。対立や緊張を回避する方法もあるのかも知れないが、我が家の場合は、真正面からピンバシとぶつかり合ってきた。話し合いやカウンセリングもどきもなくはなかったが、喚いたり、怒鳴ったり、泣いたり、とけっこう華々しかったし、壁に穴の二つ、三つも空いた。今になってみれば、あれは嵐のような時期だった。あの時の壁の穴は今だに穴のまま、修理していない。きつと彼らはその穴を見るたびに若気の至りにちくちく胸を痛めることだろう。給料取りになったらまつ先に修理してもらおう。

さて、夫はその存在感と迫力で、いくら凶体の大きい息子たちといえども、黙らせることが可能だったが、わたしは力や声の大きさでは到底勝ち目がない。わたしの取った手段は言葉に訴えることだった。自分の考えや批判を言葉を尽くして書きまくった。赤や緑のマジックペンで紙十枚くらいに書きなぐっては子ども部屋のドアの上から下までセロテープで貼り付けた。その攻撃に出会ったのはもっぱら長男だったが、彼は学校から戻ってきてドアの上に文字を書きなぐつ

た紙が目に入るやゾクリとしたらしい。

いくらうるさがられても、親が信じて立つところ、決して譲れないことを訴え続けることは、あきらめてしまうよりはいいに違いないと思つたものの、どうなのだろう。嵐は通り過ぎたものの、まだ彼らは発展途上の身、成果のほどは分からない。

三月 人生のしめくくり

昭和の始めの三月、父は五人兄弟の末っ子として生まれた。不幸にも、母親は破傷風のために、父を産んで五十日目にも他界する。父は、兄弟や叔母達から育てられ、母乳の代わりに山羊の乳と重湯で育つたと聞いている。

生れてすぐから波乱万丈の人生を送ってきた父は今年で七十六歳。痴呆の症状が出てから十六年。アルツハイマーということで専門の病院に入ってから五年半になる。まだ歩くこともでき、食事もなんとか自分でできるものの、父はもう半分はあちらの世界に所属しているようだ。もうこの世の何も所有せず、記憶さえも持っていない父は、花のように、木のように、神様から生かされているままに穏やかな日々を生きている。

あまりに早く訪れた痴呆に驚き、なぜ父にこんなことが起こるのかと嘆いた時もあった。旅先で突然姿を消したり、夕暮れ時、どこへ行くともなく家を出て行方が分からなくなった父を、

近所の方達がみなで探してくださったりということが繰り返された。四六時中父といっしょにいる母にとつては、心も身体も休まる時がなかったのだらう。母はみるみる痩せてゆき、肝臓の病気が進み、顔色も悪くなった。このままでは母が倒れてしまうと心配だった。

しかし母が何よりつらいのは、痴呆の父を世間の目にさらさなければならぬということだったと思う。家族は父がそれまで職場や地域の中で築いてきたことが、ガラガラと壊れていくような思いに囚われ、父の人間としての尊厳をどうやって守ることができのらうとやりきれない気持ちになった。

しかし、父に痴呆が出始めた頃にはお元気だった方々が、何人も他界され、また痴呆になり、七十六歳の父の状態は、もはや特別ではなくなった。アルツハイマーとしては進みが緩やかで、今だに寝たきりになっていないのは、発病後十年間、父に寄添い世話した母の適切な介護の故だと感謝に思う。

三年前の四月にネット上で日記を書き始めた。そして六月の父の目を前に、父の思い出を書こうという気になった。一週間の間、毎日一つタイトルを決めて父の思い出を書いていったのだ。不思議なことに指がキーボードを打ち始めると、空っぽだったはずの頭に様々な絵が浮かんできた。すっかり忘れてたと思っていた状況が色鮮やかに蘇り、わたしはいつのまにか、子どもの頃の思い出に夢中になっていた。時には書きながら思わず笑ってしまうこともあった。その当時はお

おまじめでやっていたことが長い時間を経て眺めてみるとなんと滑稽でまたいとおしくもあつた。そして、その時の気分も匂いもいっしょに思い出した。

父のことを書きながらわたしは昔のわたしや母や弟達に再会したし、折り合いの悪かつたはずの昔のわたし自身とも、なんだか仲直りしたような気分になつたのだつた。

父が以前、自叙伝を書くつもりでいたことを知つたのは、今年の年明けに伯母夫婦を訪ねた時のことだつた。父が書き残そうとした事が何であつたか、もう知るよしもないが、おそらく、外地の子ども時代の事や、引き揚げ時や終戦直後の混乱期の事、少年院の教官としての日々といったことを書き残しておきたいと思つたのだろう。

わたしが書いた父の思い出の数々は、父からしてみれば特筆すべき事ではなのだろう。けれどわたしが父について何か書くことができるのであれば、子どものわたしが見た父の姿しかない。そして、それは、わたしにとっては何より大事なことだ。

伯母達の話しを聞きながら、ネット上で書いてきたものを、父へのレスポンスとして本にまとめたいと思つたのだつた。

父は自分でも気がつかない内に痴呆が始まり、それがだんだん進んでいったから、自分で自分の人生を意識的にしめくくるといふ作業ができなかつた。

父ともっといろんな話をするのだった、父の子ども時代や青年時代のことなども、もっと聞いておくのだったと悔やまれる。また、信仰のこと、魂のことも父と話したかったと思う。

わたしが教会学校に行くことを奨励していたし、わたしが二十一歳の時にキリスト教の洗礼を受けた時にもそれほど反対はしなかったから、わたしの生き方を認めてくれてはいたのだろう。しかしわたしにとつて、父にとつて、神はどんな存在なのか、そういう話はしないうままだった。

そんな中で一つだけ、父とそのことについて触れ合ったと感じた場面があり、わたしはその後、その時の父の様子や言葉を幾度となく思い返した。意味のある対話ということであれば、あれが父との最後の対話だった。

五年前のこと、母が静脈瘤を取る手術をすることになり、その間、痴呆の父を老健施設にお願いすることになった。弟達もわたしもみな他県で暮らしており、父の世話は母だけがしていたのだ。

もう、その頃は、父はわたしを娘とは思わず、わたしが家にいると、そこが自分の家とは思えずに、「おじゃましました」と、帰ろうとする。また、身体は強健なので、失踪すると走って追いかけても追いつかないほどだった。帰省したものの、とても父と二人だけで過ごせない判断し、初めて施設に預かってもらうことになったのだった。

昼間はわたしが父といっしょに施設ですごし、夜は父が眠るのを見届けて施設から戻り、また

翌朝早く施設へ出かけた。それでも、父は夜中に起きてはなかなか眠らずに職員の方や看護婦さんをてこずらせているようだった。

そんな時、母を病院に訪ねる折り、母にと思つてカトリックのシスター、鈴木秀子さんの「愛と癒しの時間——心が充たされる瞑想」を本屋で求めた。病院へ向かうバスの中で、その瞑想の本を読んでいて、ふとこれを父に聞かせたいと思いついた。そこでその夜、四つだかあつた瞑想のための文章を朗読して録音し、翌日父のところへ持つて行つたのだつた。

病室なので、テープレコーダーにイヤホンを取り付け、父の耳に持つていった。父が内容を理解できると思わなかつたが、切れ切れにでも瞑想ができ、就寝前の時間に心が鎮められたらと思つたのだつた。

父の反応は意外だつた。テープを聞いていた父は、強い感情の動きを見せた。顔がみるみる輝きをおびてきて、「おお、こげんこと言いよる、ほんとか、ほんとか、あなたは愛されています」と言いよる。ああ、泣こうごとのある……と言いながら父は実際に泣いていた。

こんな父の姿を見たのは初めてだつた。歓喜している表情、子どものように語られる言葉を受け入れ、それに打たれている父。「こげんこと初めて聞いた。うれしかあ、うれしかあ」と自分の感情をそのまま口にしてる父。そんな父を見ながら、わたしは何か大きな力に打たれていた。

曇りのない父の魂が神と出会っている、そう思った。

父はこのテープを聞いたことも、それを聞いて涙を流したことも、また語ったことも、それから何分もしないうちに忘れてしまった。父の脳はもうどんなことも新しく記憶することはできないから。

けれども、あの時、父の心に起こった出来事は、父の脳が記憶していなくても、神の記憶の中にはきちんと留められていると思うのである。そしてそれは、わたしが聞いた、父の人生のしめくくりの言葉だったと思っっている。

II
育つ日々

誕生

午前三時二二分五〇秒。育児日記のページ目に長男が生まれた時刻、つまりわたしが母になった時刻がその日付とともに書き込まれている。

ホームビデオは持つていなかったから、誕生の瞬間を留めるべく分娩室に小さなテープレコーダーを持ち込んでいた。助産婦さんが、長男が生まれた瞬間に時計を見て、高らかにその「時」を読み上げてくれたので、それが産声とともに記録されることになったのだ。

予定日にはまだ早かったが、朝からしくしくとお腹が痛むので、夫の帰宅を待つて病院へ行く、すでに三指半開大、そのまま入院となる。

夫は入院のための荷物を家へ取りに戻り、女性の主治医は夜中のお産に備えて、自宅へ一旦戻った。

その産婦人科はまだ看板を掲げたばかりで、入院している人は二、三人というところではなかつ

たろうか。そのような時期であったからか、産院の都合で出産時間を調節されることもなく、あくまで自然な分娩をということで、医師も助産婦も長期戦の構えだったのだ。

病室で主治医と夫と三人で四方山話をしているうちに、陣痛が始まった。

この陣痛が起こった時のために、ラマーズ法の本を頼りに様々な呼吸を練習しては、イメージトレーニングを積んできたのだった。お産の経過も、そこに起こることも暗記してしまうほど何度も読んだ。いよいよ本番だ。しかし練習通りにいくものだろうか。

陣痛の間隔は本に書いてあった通り次第に短くなり、それに合せて呼吸法を変えていく。夫はタイムキーパーとなつて、時計をにらみながら陣痛の間隔を計り、わたしに伝えた。

しかし、痛い。暴れ馬に乗っているようである。こういう痛さについては、あの本には書かれていなかった！

ひとたび呼吸に乗りそこねると、馬から振り落とされるような感じで、息もできないほどの痛みに翻弄される。そこでなんとか呼吸の波を取り戻すと、ちょうど手綱を握り直したような感じになり、コントロールができるのである。

幸いなことに陣痛と陣痛の間は意識がなくなるほど眠く、次ぎの陣痛でガンと起こされるまでわずかな時間、コトンと眠りに落ちた。

陣痛の間、なんとか自分を保っていたのに、一度だけ「後どのくらいですか？」と弱弱しく医師に聞いた。この夜が果てしなく続くような気がして、辛抱が間に合うかどうか不安になったのだった。

四人の子どもを出産している気丈な女性医師は、まるで同情の余地なんてないといった調子で「何意気地のないこと言ってるの、まだまだこれからよー」とヒシリと言いつつ放った。はつとして、わたしは弱気を払いのける。同じ女として、この医師に無様な姿は見せたくないと思った。その後は弱音を吐くこともなく、必死で呼吸という手綱を握った。

ハッ、ハッ、ハッ、とう短息呼吸に助けられつつ、何回かのいきみを逃し、後はいやでも力が入る。産道を通ってくる新しい命の手ごたえは、ドクドクと強く、激しい。

その時、わたしの内部では大きな変化、まるで化学変化のようなことが起こっていた。これが母となるということなのだろうか。わたしという存在が別のものへと生まれ変わってゆくのが自分でも分かる気がした。

わたしの育児日記には「大きなかたまりがすべり出たような気がした」と記されている。

ドアの外で待機していた夫が分娩室に通され、彼は生まれ出たばかりの赤ん坊を見た。そして、

赤ん坊とわたしとを繋いでいるホースのように太くて長い臍の緒に鉗を入れた。その時から赤ん坊はすっかり母親の体から離され、自分自身の力で生き始めたのだ。

生まれ出た赤ん坊が、横にいる夫にあまりにそっくりなのでみなで笑った。

大きな仕事を終えた後の安堵感、ひたひたと押し寄せてくる嬉しさ、もう何もいらなと思うほどだった。そして、何もかもがひっくり返ったように新しくなったと感じていた。

この世界に命がひとつ生まれ、朝になろうとしていた。

子育て事始

さて、いよいよ子育ての始まり。

新生児を連れ帰った団地の2DKには、父親と母親になつたばかりのわたし達の他には誰もいない。産院で医師や看護婦、また産婦仲間に囲まれていた時には何もかもが新しくなつたようなくわくする気持ちがあつたものの、そこを離れて日常へ戻つてみると、狭い部屋に新生児が一人加わつたというだけで、部屋の中もまた周囲も、何一つ新しくなつてはいなかつた。

そして新しく加わつた責任だけが身に余るほど重く、寝ていると、それがぐつと両肩を押してくるような気がした。出産直後のウツもあつたのだろう。新生児と並んで寝ていると、あまりの心細さに涙が出てきた。

しかし、赤ん坊はそんなこちらの心細さなどおかまいなしに、きちんと三時間ごとにけたたましく泣いては空腹を訴える。落ち込んでいる場合じゃない。やるしかない。

幸い夫は一週間の休みが取れたので、沐浴やオムツの交換は、ああでもない、こうでもないと言いながら二人がかりでやることになり、あわただしい新生児との日々が始まった。

ちようどわたし達が赤ん坊を沐浴させている時に、教会の方がお祝いに駆けつけてくれた。わたし達の様子がよくおかしかったと見え、まるでままごとみたいだと笑いながら、赤ん坊に手を焼いている様子を写真に収めてくれた。写真の新米パパとママの真剣な顔、そしてなんとというぎこちなさ！ 確かにこれは笑える。

あの頃、妊婦仲間はみな里帰り出産だった。産前産後の二、三ヶ月を実家で過ごし、育て易くなつてから赤ちゃんを連れて団地に戻ってきた。しかし、わたしの実家は母が勤めていて、とても妊婦や新生児の世話などできる状況ではなかったから二回の出産とも実家には戻らず、夫と二人で乗り切ることに決めたのだ。

一度、出産後のことを主治医に相談したことがあった。彼女は、「大丈夫。産んだ後はすぐ動けるんだからね。日本の妊婦は大事にされすぎるのよ。アメリカの妊婦なんて出産した翌日からもう大学の授業に出て来るのよ！」と背中を押され、勇気が出てきた。

わたしの場合、出産に漕ぎ着くまでがなかなか難儀で、長男の時は切迫早産で入院して三ヶ月の間、日々二十四時間点滴を受け、次男の時には妊娠直後から、まるまる十ヶ月間、布団の上げ

下ろしさえできない状態だった。妊娠中は長男を保育所に預け、家事その他は夫が引き受けるという具合だったから、その間の夫の孤軍奮闘には並々ならぬものがあったのだ。

怪我の功名で夫はすっかり家事には慣れていたし、わたしは産んでしまえば、それまで寝たつきりだったことが考えられないほど健康体に戻り、慣れてくれば、夫と二人で切り盛りするのも、それほど大変なことではなかった。

物理的にはそれほど苦労することなく、その時期を乗り切っていったものの、精神的なプレッシャーは強かったのだろう。子どもが大きくなるまでは、赤ん坊をどこかに置き忘れ、血眼になって探す夢を繰り返し見たし、またどういうわけか、子どもの頃の淋しかった記憶が戻ってきて、夜中に大声で泣き出し、夫をびつくりさせることも何度かあった。子どもの時にまで遡って、深層でダイナミックな変化が起こっていたのに違いない。

子どもを産み育てるということは、もう一度、自らが、母の胎から出たその時点に遡って生き直し、育ち直しをすることなのではないだろうか、そんなことを思った。

わたしが子どもだった頃には「生きている」という自覚もなく過ごしていたわけだから、子育てをしながら、初めて自分の子ども時代を、新しい発見と共に生きたと感じたのである。

幼児期、学童期、思春期と来て、今、ようやく二十歳を過ぎたところ。実年齢では五十歳に近いというのに、気持ちは二十代。そしてどこかで我が家の青年達と張り合ってもいる。

育児日記を紐解いて

書いたものを本にすることになって、わたしは十数年ぶりに育児日記を開いてみた。日記とは名ばかり、一冊の分厚いノートに、ところどころ写真の切り抜きなども貼り付けながら思いついたようにぼつぼつと書いたもので、長男が幼稚園の年長を、次男が年少を終えるまでのことが徒然に記されているといった代物だ。それでも始めの頃は、ずいぶんこまめに記録している。

長男が満一歳を迎えた日の日記を読んでいて、思わず涙がこぼれた。以前に読み返した時には起こらなかった感情の動きだ。

ずいぶんと時間を経て、その文を記した時の二十六歳のわたしと初めて対面したような驚きがあった。その時のわたしは、育つていく命にただただ驚いていて、その他の事は何も見ていない。その赤ん坊が二十代の若者として成長する姿など思い描こうにも描けない。そして、その時を必死に生きているといった健気さが見える。今という時からその時のわたしを眺める不思議。

へ Hが一歳になった日 へ

今日でHは一歳になった。

Hが生まれて一年が経った。

Hが人間として生きた最初の一年だった。

わたし達が人間の親として生きた最初の一年だった。

これほど一年という時間が重かったことはなかった。

この一年という時間の中で

Hは目は見えるようになり、音が聞けるようになり、

人を識別することができるようになり、

あやされて笑うことができるようになった。

手でおもちやを握ることができるようになり、

自分で寝返ることができるようになった。

「おっ、H、がんばれ、がんばれー」

わたし達はHの生命を突き動かしている力、

はつきりとした神の力を感じて胸がいっぱいになっていた。

這い、つかまり立ちし、伝え歩きし

Hはもう行きたいところへ自分から行ける。
取りたいものが自分で取れる。

何にでも興味を示し、何でもさわりたがった。
寒い日でもできるだけ外で遊ばせるようにした。

だんだん暖かい春が近づいてくる。

暖かくなるにつれてHの動きも活発になり、
這い這いも高這いになってからはドタドタと音をたてて這う。

目がいたずらっぽく輝き始めたのはいつのころだっただろう。
体中で何かを見つけそれに反応している。

そのテンポの速さに親は目が回ってしまった。

もうじき一歳になるというある日、

それまでわたし達の手を握ってしか立てなかったHが
自分からわたしの手を離れた。

そして、ひとりで立った、と思う間もなく

一步、二歩と足が前に出た。

わたし達は手を取り合ってヤッホー、ヤッホーとはしゃぎまくった
Hが独り立ちし、自分で歩いたのだ…

日記はこの後もHの心の成長などにも触れながらまだまだ続いていくのだが、この日記を読みながら、わたしは老いていく父の姿をまた思い浮かべていた。Hがひとつずつ獲得していったことを、父がひとつひとつ失っていったからだ。ちょうどフィルムの巻き戻しをするかのようにひとつずつ…

あの頃は子ども達が育つことしか見ていなかった。孫の成長を喜ぶ父や母だつてそれは同じだっただろう。しかし、今は一方に失いつつ、生まれてきたところへ戻つていこうとしている父を見ている。その姿はこれから来るわたしや夫の姿でもあるし、またやがては長男や次男の姿でさえあるのだ。

ひとつの命が生まれ出て、日々育ち、やがてその命を閉じてゆく。そのひとつながりの時間の始めから終わりまで、変わることなく注がれている眼差しが在る。野の花、空の鳥のように生かされ、守られている日々が、ここに、確かに在る。

育てる仲間は育つ仲間

最近、仕事や教会以外で、プライベートで人と会って話したり、いっしょに何かをするということがめつきり少なくなってしまった。ひとつには書いたり、読んだり、そうでなければジムへ通ったりと一人でいることに充足しているからなのだろう。しかし、これはいいことなのだろうか。付き合いが悪い人間だなあ、いろんな方々に無沙汰の限りを尽くしているなあ、と、時折、ふつと不安に思うのである。

いや、いや、何事にも時があるのだ。仲間で過ごす時、一人で過ごす時、子ども達からまとわりつかれる時、夫婦二人で寄り添う時…

しかし、振り返ってみれば、付き合いの悪いわたしではあるが、わたしの人生のどのステージにも仲間がいた。近所の遊び仲間、中学校の音楽部の仲間、高校時代のクラスメート。大学時代の音楽科の仲間に聖書研究会の仲間、仕事仲間に教会の仲間、そしてネット仲間。

わたしのようにどこかここかが抜けている人間はいつも仲間の手際よさに感心し、教えられることが多かった。どの仲間からもその時の必要に応じて助けられ、また鍛えられたように思う。子育て仲間もまさにそんな仲間だった。子育ての時期には、仲間の存在は大きい。今のような核家族での子育てでは、母親が赤ん坊や幼児だけを相手に一日過ごすという状況を余儀なくされる。ストレスばかりが募り、刺激や交流がなく、うっかりすれば、閉鎖的になり、そのことにすら気が付かない。次第に無感動、無感覚な精神状態に陥ってしまう。

子どもを健全に育てるためにも、母親の精神衛生のためにも、よい仲間はかせない。

わたし達が子育てを開始した場所が二千所帯を抱える大きな公団住宅の2DKだったというのは考えてみればラッキーだった。3DKや3LDKと違い、2DKに区切られたアパートメントハウスにはたいがい新婚カップルが入居してくる。

わたし達がそこに入居したとほぼ同時期に同じ階段の並びに四組の新婚カップルが入居した。そして、まるで示し合わせたかのように、あるいは感染ったかのように、新婦のお腹は次々に膨らみ、妊婦となり、母親となった。みなスタートは二十代。ついこの前まで、会社員だったり、公務員だったりしていた娘達がみるみる母親へと変貌を遂げたのだ。

わたし自身もそうなのだろうが、女は母親になると本当に変わる。顔つき、声、物の見方、考え方が次第に、しかも傍目にも分かるような確かさで変わる！

若い娘は、たいていジコチューでそれが身体のどこにも滲みでているのだが、身二つになると、身体全体から「慈悲」とか「受容」とかという空気がかもし出されてくる。赤ん坊を抱いた母親を見ると、ああ、この人には心が許せるなど、張り巡らした垣根をふつと払ってお近づきになれる気がする。

電車なんかで見かける赤ん坊を抱いた母親は決してその微笑を自分の赤ん坊にだけ向けているのではない。外に向かつて心が開いている。だから隣の席に座った見知らぬ人が、「可愛いですね、何ヶ月ですか」と思わず声をかけてしまうのだ。

わたし達四人の新婚娘はほぼ同時期に、たとえ一時的とはいえ、慈愛と受容に満ち満ちた存在に変貌したので、お互いがお互いを受け入れ、自然と育児仲間が形成されたに違いなかった。

それぞれ二人とか三人とか出産したが、どういうわけか、これもまた申し合わせたように生まれてきたのはみな男の子だったから、総勢九人の腕白な男の子達が一階から五階までの階段を駆け上がり、また駆け下り、あちらのドアからこちらのドアへと渡り歩いた。彼らにとつてはその四つの家はどこも勝手知ったる遊び場で、彼らが〇〇ちゃんのおばちゃんと呼ぶ母親達は、いつてみれば保母のような存在だったのかもしれない。確かにそれは共同保育のようだった。そして日々は活気に満ちていた。

あの時の仲間の姿を思い浮かべると、みなにこにここと笑っていて、なんとも忙しく動き回って

いる。まだ二十代だというのに、「おばちゃん！」と呼ばれながら…

育児のやり方やライフスタイル、また価値観が著しく違くと、何かと支障をきたすのだが、そこはまだ娘からいくらかも経っていない若い母親達。また自分の育児や母親としてのスタイルも定まっていないという柔軟さがあった。ということは、まささ中でお互いがお互いに学びつつ母親どうしの関係そのものを作っていたのだろう。

洗濯物を干す時にどうすれば皺がすつきり消えるか、複雑な縄目をつけたセーターをどうやって編み上げるか、子どもにどんな調子で話しかければ安心するか、青菜の茹で加減から洗濯の仕方まで、わたしは自分が身につけていなかったことをずいぶん彼女達から教えてもらった。そしてわたしも何がしかのお役に立ったのかもしれない。

ともすれば社会から置いてけぼりを食らうような孤独な子育て時代、お互いの存在を近くに感じることで孤独に陥ることもなかったような気がする。

そう、子育て仲間、母として育ち合った仲間でもあった。また髪振り乱しての戦争のような日々だったから、戦友のようでもあった。

「たんぼぼ文庫」のこと

長男が幼稚園の三年保育に入ると同時に、同じ団地に住む三人の仲間といっしょに我が家の2DKで家庭文庫をオープンした。家庭文庫というのは、地域の子ども達に、良い本に出会う場所を提供する、言ってみれば、ボランティアの私設図書館だ。

文庫の日には、ドアの前に「たんぼぼ文庫」の看板が出され、我が家のテーブルは貸し出しカウンターに変わり、わたし達は「文庫のおばさん」となった。

我が家が「たんぼぼ文庫」になるのは、毎週木曜日の午後一時から五時まで。その時間には団地の子供達が次々にやって来た。クリスマス会などは三十人にもなることがあり、狭い2DKは子ども達でごった返した。

午後二時と四時には「おはなし会」をもうけ、交代で「おはなし」や読み聞かせ、本の紹介、手遊びなどをした。子ども達が真剣な顔で「おはなし」に聞き入ってくれると、何とも言えない

充足感に満たされたことだった。

料理をしながら、また掃除機をかけながら、グリム童話や、日本の昔話などのお話を覚え込み、夜はわが子や夫相手に「おはなし会」のリハーサルをした。その頃は「おはなし」の練習の中に家事や育児を挟み込み、生活は文庫中心に回っていたような気がする。

文庫用の本は、わたしが集めたものの他に、寄付金や資金集めのバザーで買ったもの、また市の図書館から団体貸し出ししてもらった。選りすぐりの絵本や児童書が本棚二つにぎっしりと詰め込まれていて、そんな本の背表紙を眺めるだけでうっとり嬉しい気持ちになった。

あの頃は何と言つても、絵本や児童書、そして「おはなし」に恋していたのだ。こんなすばらしい本や「おはなし」を一人でも多くの子ども達に手渡さなければと、文庫のおばさん達の心は燃えていた。

さて、この「たんぼ文庫」の開設までには、様々な出会いが繋がっている。

結婚と同時に大分から埼玉に移り住むようになって一月が過ぎた頃、用が出来て大分に帰省し、たまたま子どもの本をテーマにした講演会を聞いた。その講演の中で、子どもの本について研究し、実践している都内の私設図書館が紹介された。その図書館は、語りの大切さを伝え、「おはなし」の担い手を育てるといふ活動もしているという。

教職を退いて、見知らぬ土地で専業主婦の日々を送りながら、何かを勉強したいと切実に思っ

ていたわたしは、「学ぶべき事はこれだ！」と狙いをつけ、家に戻るや、さっそくその図書館を訪ねたのだった。

そこで行われている「おはなし」の勉強会に心惹かれたが、通うには遠く、また妊娠、出産、子育てと、身辺に大きな変化が起こり、その志はいつの間にか影を潜めてしまっていた。

ところが、次男を出産した頃、わたしの住んでいるK市に、子どもの本についての学習や「おはなし」の勉強をしている母親達の自主グループがあることを知った。毎週金曜日の勉強会の時にはメンバーが交代で託児をするので、赤ん坊を抱えているわたしのような母親でも、会に参加できるというのである。この良い知らせに飛びついたのは言うまでもない。

親や兄弟が近くにいないわたしのような立場の母親は、四六時中子どもといっしょで、そこにはかなりストレスが生じ、子どもと離れて何かを学びたいという飢え渴きが起こる。一週間にわずか一時間半ほどのこの勉強会がどれほど有難く、また貴重だったことだろう。児童書の知識が豊富な先輩達に触発され、子ども時代に読みそびれていた絵本や児童文学を次々に読んでいった。また、メンバーの多くは文庫活動に携わっていたから、家庭文庫にも目が開かれ、わたしの住む団地に文庫を開きたいという気持ちが生じたのである。

文庫を開いてから三年が経った時、夫の海外駐在に伴い、我が家はアメリカへ引っ越すことになった。その後、「たんぽぽ文庫」は文庫仲間がそっくり引き継いでくれ、団地での文庫活動は

しばらく続いた。

一方アメリカに移り住んだわたしは、その地で子どもの本にかかわるボランティアを続けることができた。

子ども達が通う公立小学校にはライブラリーのボランティアが二十人ほどいて、二人でペアを組み、午前か午後、学校の図書室の貸し出しカウンターに座っていた。

専門のライブラリアン（司書教諭）もまた事務的な仕事を担当するアシスタントもいるので、図書ボランティアの仕事は本の貸し出しと返却の手続きや本の整理に限られていて、のんびりしたものだ。

どのクラスも週に一度、図書館教育の時間があり、クラスごとライブラリーにやって来る。ライブラリアンはそれぞれに、カリキュラムに沿った読書教育や、図書館教育を施していた。

もちろんその中にはブックトークや読み聞かせもあり、曲がりなりにも「文庫のおばさん」だったわたしは目を輝かせて、ライブラリアンの授業をカウンター越しに参観、かつ学習させていたのだ。

わたしがこれまで夢中で読んできた絵本や児童書の多くは翻訳本だったから、オリジナルの原書をライブラリアンが紹介したり、読み聞かせをすると「それ、知ってる！」と、胸が高鳴った。またライブラリアンは子どもの本に興味があるわたしに何かと良い本を紹介してくれ、わたしの児童書や絵本のコレクションは増えた。このボランティアでは実に多くのことを学ぶことがで

きたのだった。

ところで、この学校の読書教育は、決してライブラリアンだけに任されているわけではなかった。それぞれの教室には担任がアレンジした個性的な学級文庫があり、特徴のある読書教育をしていた。

一年生の次男の担任はC・S・ルイスの「ナルニア国物語」の一巻と二巻を何日もかけてすっかり読み聞かせをし、二年時の担任はロアルド・ダールの作品を次々に読み聞かせていた。

一方、四年生の長男の担任は、子ども達に物語、エッセイ、詩などを書かせては、それを文集にまとめて発行していた。また、そのクラスでは、「おはなし会」が開かれ、親も招待された。親による「おはなし」というプログラムもあったので、わたしは「ブタとおばあさん」というイギリスの小話を語ったことだった。アメリカ人の子達にしてみれば、外国人の語る英語の小話は変な感じだっただろうが、どの子もまっすぐな目をして聞いてくれ、文庫での「おはなし会」を彷彿とさせた。

文庫のおばさんだもの、いくらそこが外国でも、お話のひとつくらい語らなくっちゃと、その時は自負もあつたし、心臓も相当に強かつたのだ。

今、わたしは日々の仕事の中で、アメリカ人の子ども達にではなく、日本の子ども達にマザー・

グースなどの英語の歌あそびを教え、英語の絵本を読み聞かせている。考えてみれば、これは文庫での「おはなし会」のようであり、また、アメリカの小学校のライブラリーの時間のようでもある。

子どもの本との繋がりは今後も続いていくことだろう。

裸足でイナゴを追いかける園児たち

文庫仲間の子ども達も、我が家の子ども達も、少し遠い隣町の幼稚園に通っていた。

そこでは、やる気まんまんのガキ大将のような園長のもと、園児達は一年中裸足で、どろんこにまみれて遊んでいた。

広い運動場の真ん中に土を盛り上げて作った小山があつて、子ども達はその山をよじ登っては勢いよく滑り降り、その下にある泥の水溜りの中に泥しぶきをあげて飛び込んでいた。

幼稚園の周りは田んぼや畑が広がっていて、子ども達は米を植え、芋を育て、裸足でイナゴを追いかけた。イナゴが食べられるということは知っていたが、わたしは初めてこの幼稚園でイナゴの佃煮を食べた。田舎に育ったわりにはこういう生活とは無縁だったわたしは、ここでも、やりそびれたことを子ども達といっしょに体験したのだった。

園児達はお昼の時間ともなれば、ぼかぼかと陽が降り注ぐ檜作りの縁側で、園長先生やおじい

ちゃんの理事長先生ともいつしよに、にぎやかにお弁当を食べていた。

弁当は親の手作り。おかずは海の物と山の物を入れるように、加工食品は入れないようにと指導されていたから、野菜の煮物や青菜のおひたしなどを早起きして作ったものだった。なかなか大変だったが、お陰でこの時期、我が家の食生活は非常に健康的だった。

甘い菓子や油で揚げたスナック菓子も子ども達から遠ざけようという共通の認識があったから、家でも菓子類はあまり与えなかった。子ども達がほとんど病気もせず、今に至るまで虫歯が一本もないのは幼児期の健康的な食生活の故かもしれない。

さて、通園。子どもも親も歩かなければならないからと通園バスは家の前まではやってこない。朝に夕に親子でバス乗り場まで往復四十分の散歩を続けた。

バスまでの田舎道にはいろいろと発見も多く、虫を捕まえたり、花を摘んだり、豊かな時間を過ごした。親子三人で道端にしゃがみ込み、虫穴から虫が出てくるのをいつまでも待っていたりということもあった。

子どもも丈夫になったが、いつしよに歩いたわたしも、赤ん坊の頃からいつしよに送り迎えをした次男もずいぶん丈夫になったことだった。

今は幼稚園にも鼓笛隊があり、鍵盤ハーモニカや笛の練習をさせる所もあると聞くが、この幼

稚園では先取りのお勉強はいっさい無し。文字も教えないし、読ませない。そのかわりに、たくさん絵本を読み聞かせてもらい、先生が弾くピアノに合わせてリズム運動をし、竹馬やコマ回しに熟練し、糸と針で何日もかけて袋を縫った。

そういえば、池に放された鯉を園児がつかみ取りして、それを家に持ち帰るなんていうぎよつとする催し物もあった。当然、親はその鯉を料理することが要求される。わたしはその昔、フナの解剖は喜んでやったものの、この大きな鯉はどうにもだめで、友人に裁いてもらったが、あの鯉、いつたいどう料理したのだっただろう。

卒園式の日には、ホールの壁いっぱい、園児が何日もかけて仕上げた卒園製作の水彩画が貼られた。描き込まれた絵はそれぞれその子の気持や生活が伝わってきて、はっとするような芸術作品だった。

ところで、この幼稚園との出会いには、なんとも不思議な巡り合わせがあった。

わたしがまだ学生の頃、本屋でたまたまある保育園の写真集を手にとった。店先で何気なく開いたその写真集の子ども達の顔を見た瞬間、どつと胸に突き上げてくるものがあった。園児たちの表情には力があつた。あどけないというのではない。かわいいというのではない。単に明るいとか元気というのでもない。なにか真摯なもの、率直なもの、そして強いものがそこにあつた。子どもってこういうものだったのだ、人間って凄いなあと、感動した。そして、日本のどこ

かにこんな子ども達が育っている場所があると思うと、明るい気持ちになった。

さて、時は流れ、わたしは二年間小学校で教員をした後、結婚と同時に埼玉へ移り住み、子どもも生まれ、三年半が経過していた。

次男の出産が終わり、病室に移された時のことである。同じ病室の隣のベッドには出産のお祝いに駆けつけた客が数人來ているようだった。カーテンが引かれていて、そこにどうい方がいるのかも知らなかったが、狭い病室、話していることはそのままいやでも聴こえてくる。

その話の中にしきりに聞き覚えのある保育園の名前が出てきて驚いた。あの写真集の保育園のことを話しているらしい。そういえば、あの保育園は同じ埼玉県にあつたと記憶を辿る。

お客が引いてから、わたしはカーテンを開け、挨拶もそこそこにして、その保育園のことを尋ねた。話しに上っていたのはやはり写真集の保育園だった。その方は隣町にある幼稚園の保育者で、先ほどの客人達は同僚の先生方、そしてその幼稚園は例の保育園の姉妹園だということが分かった。わたしはこれからの二人の子どもの育児に急に光が射しこんできたように感じ、その出合いがなんともうれしかった。

時を置かず、その幼稚園を訪ねたのと言うまでもない。まだ長男は二歳半、幼稚園の入園にはあと一年待たねばならなかったが……

その幼稚園を訪ねた日は、ちょうど卒園式の日だった。木の床の広いホールの中に見知った人は一人もいなかった。卒園する子ども達も初めて見る子ども達だった。それなのにわたしは父母達に混じって涙を拭いていた。

子どもが大勢の観客の中をたった一人で堂々と歩き、手を高く掲げて卒園証書を掴む姿や、全身霊を込めて歌うその明るく突き抜けたような声を聴きながら、わたしは恥ずかしいほどに嗚咽した。ひとりひとりの子どもが、どこにも寄りかからずに自分を生きている。いったいどう育てれば子ども達がこういう顔をするのだろうか。

その後、園長先生に挨拶し、卒園式の感想と、一年後の入園の希望を伝えると、彼はわたしと同じ団地から通ってきている園児が一人いると言って、その子の名前を教えてくださいました。

ほどなく、団地の中で、その園児のお母さんと会うことになるのだが、彼女を通して、先の子どもの本を学ぶサークルへと導かれ、文庫もいっしょに立ち上げたのだった。

子育て仲間にしろ、幼稚園にしろ、学びの場や文庫にしろ、必要な時に与えられた。時と時とは、ひとつの意図によって繋がっていくようだった。

カタツムリの誕生日

子ども達がまだ小さくて、文字が読めなかった頃、持ち物に名前を書く代わりに、それぞれのキャラクターを決め、幼稚園へ持ってゆくりユックサクや袋などにはそのキャラクターの絵をほどこしていた。

長男はトンボ。そして次男はカタツムリ。深く考えることもなく、なんとなくそれぞれのイメージで決めたキャラクターだったのに、日を追うごとに、それぞれが、そのキャラクターに似てくるような気がして、あのしるしのせいで、よけいに彼らの性格が強調されているのではないかしらと本気で心配したりもした。

長男が幼稚園の年長組で、次男が年少組の時のこと、幼稚園の父母会では、床いっぱいに並べた子どもたちの絵を見ながら、そこから導き出せる子どもの発達の具合について話し合いをしていた。

ところが次男の絵はなんとも不思議な絵で、画面いっぱいにはカタツムリらしいものが無数に描かれていて、どのカタツムリも、背中に「X」の記しがついた丸や四角のものを乗せているのである。何かを意図して描いたということは自明だが、これはいったい何を表しているのだろうか、先生も首を傾げていらした。

絵の下の方に目を移すと、先生が鉛筆で書いてくださったタイトルがあった。

「カタツムリの誕生日」、ははん、謎が解けた！

つい数日前が、長男の誕生日だった。お友達をたくさん招いて、初めて誕生日会をやったのだった。あの日、おにいちゃんはお友達からたくさんプレゼントをもらったのに、自分は何ももらわなかった。これまで何でも同じようにもらってきた次男にとって、それはとてもつらい試練だったのだろう。そこでの「カタツムリの誕生日」である。

たくさんのカタツムリが背中にしよっている「X」をつけたものは、リボンをかけたプレゼント。当然カタツムリは自分の分身。カタツムリにたくさんのプレゼントを描いてあげること、自分を慰めたのだ。

ぼくにだってそのうち誕生日がやってくる。その時にはおにいちゃんがもらったようにたくさんプレゼントがもらえるんだと、そんなことを自分に言い聞かせながらプレゼントを背負ったカタツムリをひとつ、またひとつと紙いっぱいに描いていったのだろう。くやしくて泣きわめいた

り、我が儘を言ったりしないので、こういう絵を描くところが、いかにもカタツムリの次男らしい
と思った。

小さい子どもと過ごしていると、こういうハツとさせられることや思わず吹き出してしまうこ
とが日常的にあるものである。そういうことを夫や、親に話すと、記録しておけと言われた。育
児ノートは持っていて、それをゆつくり開くような時間も、また心のゆとりもなかったのだ。

すっかり忘れてしまって、もう取り出しようもない失われた記憶の中には、豊かなストーリー
やおもしろい会話や、育つてゆく上での様々なエピソードがあつたに違いない。

今のようにパソコンが日常に入り込んでいけば、今書いているようなWeb日記を育児ノート
代わりにできただろうし、手書きのファミリーニュースレターの代わりにホームページやメルマ
ガを駆使して記録や伝達に役立てることができただろうにと残念に思う。

*

さて、出産に始まり、子育て仲間との育児、裸足で泥んこの幼稚園生活、本を中心として仲間
や子ども達と繋がった文庫活動と進んできた「育つ日々」だったが、長男の小学校入学を前に、
突然、転勤の話が持ち上がった。しかも行き先はアメリカ！

このニュースを聞いた直後は、これは良いチャンス、子どもの教育にとっても、わたし達にとっても大きな転機に違いないと顔が輝いた。しかし、考えるほどに心配は膨らんでいく。

なにしろ裸足でイナゴを追いかけるといふ幼稚園時代を送った子ども達、文字教育は小学生になつてからという考えだつたから、ABCはおろか、「あいうえお」さえ読めない。

また我が家からジャンクフードを締め出し、昔ながらの日本の食事を心がけてきた。いったいアメリカで何をどう食べれば良いのだろうか。

また何よりも、美しい日本語、豊かな日本語をと、読み聞かせや「おはなし」を育児の真ん中に据えてきたのである。日々英語の中で生活する子ども達に、どうやって日本語を維持させるのだろうか。日本語を失つてしまうのではないだろうか。

全く異なる環境の中で、再び一から積み上げて行かねばならないのだと思った。しかし、わたし達が住むことになるその場所が何しろ未知な場所、何をどう積み上げてゆくのか、何を中心にして、家庭生活や教育を整えていけば良いのか、皆目見当がつかないのだった。

先が見えないまま、新しい土地への旅立ちを目の前に控えていた時、わたしはしばしば、旧約聖書のアブラハムの物語を思った。アブラハムはある時、神から「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい。」と命を受ける。そしてアブラハムは行き先を知らないまま、神の言葉に従い、家族を連れて旅立った。

何が起こるか、どんなことが待っているかは分からなくても、神に信頼して、今までのすべてのことがらを後にして、家族四人、旅に出よう！ そんな静かな決意が生まれた。

そして、場所が変わっても、言葉は違っても、トンボはトンボ、カタツムリはカタツムリ、夫もわたしも大切にしてきたものは変わらない。新しい土地で、わたし達らしく生きようと、不安は勇気に変わっていったのだった。

アメリカに到着！

アメリカに到着！

三月の末、幼稚園の卒園式の翌日、八年間住んだ公団住宅の2DKをどうにかこうにか引き払い、夫の待つアメリカへ向かった。

最後まで使った寝具や衣類、家財道具を規定量ぎりぎりまでダンボールに詰め込み、詰められなかったものは、引越しを手伝ってくれた友人達に処分を頼み、あたふたと日本を後にしたのだ。た。

六歳と三歳を連れての空の旅、今考えてもぞつとするが、泣いたり、喧嘩したり、ジュースをこぼしたり、おもちゃの部品を失くしたりしながら、気の遠くなるような十二時間はやがて過ぎ、飛行機は無事ニューヨークのJFケネディー空港に降りた。

トイレに行きたいという息子達の手を引き、急ぎ税関を抜けようとするストップがかかる。山のようなダンボールの箱はよかったのだ。問題になったのは幼稚園で園長先生に作っても

らった卒園記念の竹馬だった。その竹の部分が青いからこれは植物扱い、アメリカ国内には持ち込めないというのだ。害虫などの寄生を危ぶんで植物の持ち込みはできないという規則があったことを思い出した。

だが、せつかく苦労してここまで持ってきた竹馬、夫は息子が竹馬を操る姿をまだ見ていないのだ、やすやすとあきらめるわけにはいかない。これはおもちゃだし、子どもの物だと訴えたが聞き入れてもらえない。持ち込みが出来ないというのなら、せめて足を乗せる木の部分だけでも持つて行くから外してくれと食つて掛かった。そこにはマジックペンで細かく描かれた息子の絵があつたからだ。他人には何のことはない落書きに見えるその絵も、親にしてみれば、卒園を記念する大切な作品なのだから。

わたしの剣幕に押されてか、はたまた国を越えて母心は同情を買つたのか、がつしりした体型の黒人の職員が三人がかりで、その竹馬を分解し始めた。しかし子ども達の安全を考え、太いワイヤーでしっかりと固定されたその竹馬はビクともしない。それに、それを描いた当の本人からは「そんなのいいよ、それよりおしっこをもらしそう」と懇願され、わたしは涙を飲んでその竹馬をその場所に置き去りにしたのだつた。

一方、空港に迎えに来ていた夫は、乗客がすべて到着ロビーを出て行ったのに、我々が出てこないものだから、これは何かあつて、飛行機に乗らなかつたに違いないとその場を離れるところ

だった。

あの税関であれ以上粘っていたら、事態はやっかいなことになっていただろう。今のよう携帯電話がなかったから、ちよつとしたことで容易にはぐれたり、行き違つたりし、またその修復はかなり面倒だった。

さて、山のような荷物をポーターに頼んでカートで運んでもらい、ようやく空港の外に出た。夫は駐車場から車を取ってくるから、そこで待つておくようにと言うと姿を消した。すると、当然夫が車を取ってくるまではそこに居てくれるだろうと思つていた頼みのポーターは、我々の荷物をそこに降ろすや、チップを要求し、さつさと行つてしまった。

ポーターがそこを離れるや、まるで彼と入れ替わるかのように五、六人の怪しげなグループがこちらへ向かつて来た。彼らが遠くからこちらをちらちら見ていたにはわたしも気がついていて、何かいやな気分がしていたのだ。

何と彼らはわたし達に近づくと、何も言わずにそこに置いてあつた我々の荷物を持ち上げて運び始めた。そしてあつけにとられてゐるわたしをよそに、子ども達の手を取つて歩き始めた。子ども達も状況が掴めず、されるままになつていた。見ればさつき彼らがたむろしていたところには車が止まつている。わたしは我を失つて「No！」と叫んだ。ちようどその時、夫の車が向こうからやつて来て、彼らの前に急ブレーキで止まつた。夫が物凄い形相で彼らを睨みつけて車か

ら飛び出すや、彼らは荷物をそこに置き、子ども達の手を離してニタニタと笑いながら立ち去っていった。

いったい、わたしは彼らからかわれたのだろうか、それとも夫が来なかつたら荷物も子どもも連れ去られてしまったのだろうか。空港に降り立つや二つのハプニングに出くわし、あまりのことに自失し、わたしは朦朧としたままで、ワシントンブリッジを越え、ニュージャージーへと向かう車の中にいた。

ここは日本ではないのだと身に沁みて感じた。自分で自分や子ども達を守らなければならない。おそらくはこれまで生きてきたテンションとは全く違ったテンションで生きることになるのだろうと考えていた。

そういうハプニングでの幕開けだったが、車から降りてみると、我々の新しい居住地は何とも平和なところに見えた。垣根のない広々とした芝生の中に、かわいらしい格好の家が仲良く並んでいる。どんな人達が住んでいるか知らないまでも、そこでの暮らしが楽しいものになるような空気が漂っていた。

実際、わたし達がガレージに車を入れるや、お隣の老夫婦がゼリーで固めたフルーツのデザートを持って挨拶に来てくれた。アメリカでは引越してきた人が近所に物を配る習慣はなく、反

対に隣近所の人達が食べ物などの差し入れをしてくれると聞いてはいたが、全くその通りだったので驚いた。

その日は折りしもイースターだったので、そのご夫婦は子ども達に、きれいな色のゼリービーンズがぎっしり詰まったイースターキャンデーのセットを下さった。

ご主人は大学の先生で、奥さんは養護学校の先生だった。困った時はいつでも言ってくれと申し出て下さり、何とも心強かった。その後、その老夫婦は、彼らの通う教会へ連れて行ってくれたり、わたし達の為に近所の方々とのピクニックを企画してくれたり、我が家の子ども達のチューターを引き受けてくれたりと、様々にわたし達家族を支えてくれることとなる。

さて、時差ボケもなんのその、我が家の子ども達が家の前の芝生で転がりながら遊び始めるや、お向かいの家から同じくくらいの年恰好の男の子が飛び出してきた。それに気がついた長男のHは家の中にとって返すと、さっきお隣からいたばかりのゼリービーンズの箱を抱えて飛び出し、いきなりその男の子の目の前にその箱を差し出したのである。

彼のこの素早い行動に、しばし哑然とし、なるほど彼の意図を理解した。

Hはここでは言葉が通じないということは察しがついていたのだろう。そして子どもはこの国の子どもでもキャンディーが好きだろうという勘が働いたのだろう。Hは昔から友達作りの名人だったのだ。そのスキルが外国でも役に立つことが分かって我が家の子ども達は気を良くした

に違いない。

三人の子ども達はゼリーピーンズを順番に箱から取り出しては食べ、その後は全く言葉無しにそれでも愉快に遊び始めた。やがてその子の兄と姉も加わり、その家の親達とも名乗りあい、握手を交わした。気さくで暖かいファミリーだった。

翌日から、その家の子ども達は我が家に入り浸り、また我が家の子ども達はお向かいの家に入り浸つたようになる。わたし達家族の最初の英語の先生はお向かいの子達だったのだ。

親も子も良い隣人達に出会い、アメリカでの生活がハプニングとフレンドシップに彩られてスタートしたのだ。

異国で育つ

今や多くの日本の子ども達が海外で教育を受け、また外国の子ども達が日本で教育を受けている。言葉の問題、アイデンティティーの問題、そこには様々な問題が横たわってはいるが、こういう人間が増えてくることで、それぞれに孤立した国や社会が深いところで交流し、普遍的なものを共有し合えるようになるのではないだろうかという望みを持つ。「日本で育つのと同じように」というところに固執しなければ、異国で育つというのも悪くはない。

アメリカに移り住むや下の子は Y W C A が運営しているナーサリースクールへ、長男はその地域の公立の小学校へ通うようになった。

日本にいれば、真新しいランドセルを背負って、桜吹雪の中、めでたく入学式を迎えたのだろうが、九月に学校が始まり、六月には学年末を迎えるアメリカの学校では、四月は学年の締めくくりに入る時期だ。

年齢的には長男は現地の学校の小学一年生だったが、あえてキンダーガーデンと呼ばれる年長児クラスに編入し、長い夏休みを過ごした後、九月から小学校一年生をスタートすることになった。

初日、キンダーガーデンの入り口で担任の先生にHを引き渡すと、わたしはさつきと家に戻った。Hもケロリとしていたし、教師から居ろとも言われないので帰って来たのだが、一言も言葉が通じないところで、いったいHはどうやって過ごすのだろう、教師はどうコミュニケーションを取るのだろうかとだんだん心配になってきた。幸い、キンダーガーデンは午前中だけで、しかもこの週は授業参観の週ということだったので、様子を見に学校へ出向いた。

教室に入ると、ちょうどお絵かきの時間で、子ども達はそれぞれ教室に備え付けのビニールのエプロンを付けている。イーゼルには大きな紙が用意されていて、水に溶かれた絵の具が何色か、小さなバケツの中に用意されていた。

Hがどうするか見ていると、周りの子をきよろきよろ見回すや、やおら自分のエプロンに絵の具を塗りたくり始めた。見ればどの子のエプロンもすでに絵の具で汚れている。彼はこれはエプロンに絵の具を塗る活動だと勝手に解釈しようだった。担任の教師はそれを見るとあわててHのところへやってきて、ノー、ノーとかぶりを振りながら、紙に描くようにと促した。なるほど、

こうしてひとつひとつ間違いながらいろんなことを覚えていくのだろう。

次の時間は音楽と体育を組み合わせたような授業だった。子ども達は円を描き音楽に合わせてぐるぐると回っている。Hはクラスの中でもとりわけ動きが活発な男の子を目ざとく見つけ、その子の後ろにくっついた。二人でくっつきあつて楽しそうである。しかし、どう見ても、二人だけ羽目をはずしているようにしか見えない。Hはえらく愉快そうにびよんびよん跳ねているけれど、先生やお母さん方は、日本からの新入生をどう思っているかしらとひやひやした。

やっと一日目の授業が終了。ほっとしてHを連れて帰ろうとすると、Hは先ほどいっしょに跳び跳ねていた子を指差して、あの子に遊びに来てもらいたいと言う。「遊びたいって言ったって、あんた、何もしゃべれないじゃないの!」と思いつつも、迎えに来ていたその子のお母さんに頼んでみる。彼女は、「わたし達もイタリアから来た家族なの、後で息子を連れて行くから住所を教えて」と快く承知してくれた。

今思えば、日本から来たばかりの、言葉も通じない子の家に、子どもを遊びによこすとは、彼女は勇気がある人だった。彼女としては新しくこの国にやってきた外国人に、精一杯の誠意を示してくれたのだ。このイタリアの男の子を皮切りに、実に様々な国の子ども達との交流が始まった。

さて、外国で現地の学校に通うということだが、当然、日本の子ども達が使う教科書での勉強

ではなく、その国の子ども達が学ぶことを同じように学ぶわけである。そしてすべての学校教育が日本語ではなくその国の言葉で行われる。国が支給する全国一律の教科書はアメリカにはないし、小学校の場合、教科書というものがそもそも存在しない。

ここで親は腹を括らなくてはならない。日本の子どもと同じような教育を受けるのではなく、その国の子ども達と同じように教育を受けるのだと。そして、公教育は現地の先生にすっかり委ね、しかし日本人として必要な教育は親が責任を持つということ。

教育や学習に対する意識や、力点を置いていることは国によって異なる。けれども、そこに「人間を育てる」という普遍的なものがあるならば、どこでも通用する人間が育つはずである。日本的なものに拘泥せずに、普遍的なところに立とうとする。その一方で日本人としてのアイデンティティーを失うことなく育んでいこうとする。そのためには親がそれを育てるという覚悟が必要だ。自国のことは親を通してしか学べないのだから責任は大きい。

幸い、子ども達の通う学校は二十か国からのバックグラウンドを持つ子ども達が通っていた。当然、ひとつのパターンに子どもを押し込める教育はここにはない。お互いの文化や習慣の違いを学びあいながら地球の子ども達を育てるというコンセプトがはつきりしていた。

それぞれが違うということが前提にあるので、ひとつも英語をしゃべれないことや、肌の色や生活習慣が違うことを気にかける必要はなかった。

同時に外国人だからといってお客さんになることも許されない。同じコミュニティに住む親として、学校づくり、地域づくりに同様に貢献することが求められていた。これは日本で、PTAの役員を決める時のくじ引きとか、順番などとは異なる。あくまで自由意志（ボランティア）なのである。では、やりたい人、好きな人だけがそれを担うのかといえばそうでもない。こういう社会的な責任を積極的に果たすということが暗黙の内に良識ある大人の条件となっているのである。

日本ではくじ引きで当たってしまえば、やむなくその仕事を引き受け、周りからクレームがつかない程度にその責任をなんとか果たせばいい。ところがアメリカの学校では自分ができそうなこと、役に立ちそうなことに自らやりますと手を上げることが親の務めとして求められているのである。そして自ら手を上げたのだから、誰にも責任をかぶせることはできない。きちんと自分ではじめから終わりまで言い出したことに責任を持つ。

そのかわり、前任の人がやったことや、それまでのやり方を気遣う必要はない。自分がやりたいことをやりたいようにやればいいのである。たいていの場合、だれもやらなかったようなユニークな活動が喜ばれ、評価される。

出る釘は打たれるどころか拍手で迎えられ、出ない釘は擧げを買うといったところだろうか。国が違えば物の価値基準がこうまで違うのだ。

異国で暮らすと、望むと望まざるとにかかわらず、どうしても日本という国を背負って立つという気になる。わたしや家族を通じて日本という国が見られると思うと、多少無理をしても日本人を良くみてもらいたいという「愛国心」が生まれてくるから不思議だった。

そういうわけで、子ども達が通う学校に、わたしもずいぶん通った。ライブラリーのボランティアや放課後の日本語教室は個人的にやっていたことだが、日本人の親達によるボランティアの組織もできていて活発に学校にかかわっていた。

毎年小学校二年生は、ジャパン・ウィークといって、日本の文化について学ぶ週間があるので、その一週間は日本人の母親が毎日教室に入り、習字、お茶、お花、着付け、日本の歌、昔話、食べ物、などあらゆることを題材に、デモンストレーションをしたり授業をしたりした。またバザーの時にはみなで焼き鳥や寿司を作って売り、折り鶴のイヤリングなど、手の込んだクラフト製品の店を開いたりして、学校の資金集めに一役買った。

夫も一度、二年生の子ども達にプリズムを使って光についての授業をした。その時、全員の子ども達からもらったかわいらしい感謝の手紙を彼は今でも大切にしている。

現地の小学校とは子どもも親も良い関係を持つことができ、そこでわたし自身、ボランティアと同時に教育について学ぶ学習の場が与えられ、アメリカで、もう一度小学校教育を受けたといっ

ても良いほどだった。

しかし、もうひとつの責任、日本人としての教育はなかなか大変なものがあつた。初めの二年間は土曜日に開校されている日本語補習校に連れて行つていたが、後の二年は補習校を止めてホームスクーリングに変えたから、親の責任はさらに重くなつた。

アメリカの学校は土、日が休みだが、多くの家庭の子どもは日曜日には教会学校や礼拝へ行く。わたし達も日曜日は近くのキリスト教会に通つていたから、他のアメリカ人の子ども達と同様、休みは土曜日だけだ。ところが、土曜日の日本語補習校に通うと、子ども達には週末の休みが無くなつてしまうのだ。

さて、ホームスクーリングだが、子ども達は現地校から三時過ぎには戻つてくるので、それから五時までを遊びの時間とし、五時から七時までにはキッチンのテーブルでいっしょに日本語での勉強をした。

とても日本の小学校のカリキュラムをすべてこなすことはできないから、国語は日本語で日記を書くことと、日本語の本を読むことを中心にし、理科と社会は日本にいる祖父母が録画しては送ってくれる、NHKの教育番組のビデオを見た。子ども達はブラウン管の向こうから日本の学校や生活の匂いを嗅ぎ取つているようだった。

しかし、漢字には泣かされた。日ごろ目にしないからか、いくら書いても覚えられない。同様

に正方形、長方形、三角形などといった算数用語があきれるほど定着しなかったし、地名なども、普通なら常識として入ってくるものが、その土地が遙か遠くの国で自分達の暮らしに何もつながりがないとなれば、これもまたなかなか覚えられない。

咽元過ぎれば熱さ忘れるで、この当時の苦労は子ども達もわたしも、大方忘れてしまった。それでもたまに、息子達は「僕達はアメリカ人の子ども達に比べると断然遊ぶ時間が少なかった！」と不平をもらすが、そもそもアメリカの学校は遊びのような楽しい活動ばかりだったし、日本の小学生のように宿題も塾もなかったのだから、日本にいたよりは楽ちんだったに違いないのである。

異国での子育ての日々、わたしにはひとつの願いがあつた。それは、複数の文化や人間の中で育っている子ども達が世界の人々や国々と良い関係を創る大人になつてほしいということ。自国の言語、自国の習慣を越え、世界の中にいる自分を意識してほしいということ。

あの時いっしょに学んだ子ども達も、励ましあつてきた親達も、今はそれぞれの日本の生活に戻り、子ども達はそれぞれ大人になりつつある。

彼らが担っていく社会の中で、与えられた経験や言語を十分に生かし、国と国、文化と文化の繋ぎ手として、その役割を果たしてほしいと思うのだ。

子連れ女子大生

アメリカでの子育て時代、小学校でのボランティアもやったが、またその時期、わたしは子連れ狼ならぬ、子連れ女子大生をやった。

女子大生とは言っても三十代半ば、ずいぶん年を食った学生だった。子連れで、コミュニティーカレッジに通っていたのである。

アメリカにはカウンティ（郡）ごとに公立のコミュニティーカレッジがある。高校を卒業して入学してくる学生の他に、職業訓練を受ける社会人や主婦、語学コースを受講する外国からの学生といった具合に、学生は年齢も国籍も実に多様だ。

当然、学生の中には小さな子どもを抱える育児中の母親も多いから、大学の中に託児所がある。託児所とは言っても、この大学の教育学部の学生が教育実習をする場所でもあるから、大学付属の保育所といったところで、保育者も、教育内容も十分満足のいくものだった。便利なことに、

フルタイムで預けてもよければ、自分の授業の時間だけ預けてもよいという仕組みになっていた。

わたしはこのナーサリースクールに五歳の次男を預け、週に四回、朝から午後三時まで授業を受け始めた。子どもを産んでからは、それこそ髪振り乱して腕白坊主たちのお尻を追いかける日々に明け暮れていたから、脳ミソはすっかり硬くなっていて、始めの頃は、集中して英文を読むとひどい頭痛がするほどだった。読むのもそんな具合なら、聞く方はまだひどく、教師が言うことがさっぱり英語として聴こえてこないのである。耳が開通するまでは宿題の中味さえ分からずに苦労した。それでも、語学コースが終了するまで、やめずに通い続けられたのは、熱意のある教授達と、そこで得た友人達のお陰だ。

ドクターMは、ハーバード大学出身のロマンスグレーの素敵な紳士だった。外国人にも聞き取れるように言葉を選び、ゆっくりと話し、実に熱のこもった授業をしてくれた。

川端康成などの日本文学をはじめ、アジア文学の研究をしている彼の授業は魅力的で味わい深かったが、彼のクラスは厳しいので有名でもあった。リーディングのクラスでは、一冊のペーパーバックを一週間で読むという宿題があり、テストにはその内容についての問題が出題された。家で熟読しておかなければ、答えようがない。学生をいかに勉強させるか、追い込むかという方法を良く心得ている教師だった。

またライティングのクラスでは書くことへの様々な技術や表現の方法について教えられた。毎日ジャーナルを書きそれを提出するなんていう骨の折れる宿題があったが、書いたものにコメントを書いてくれるので、それが励みになった。

ドクターTはアラン・ドロンを女にしたような美人で、眺めるだけでもうっとりしてしまったが、クラスは独創的、かつ新しい試みに溢れていた。

授業の中で模擬裁判の場面を作るというものがあつた。生徒は、犯人、犯人の母、目撃者、被害者とその家族、陪審員、裁判官、新聞記者とそれぞれに役割を与えられ、インタビュしたり、証言をしたり、また記事にまとめたりといった学習活動を展開する。研究者でもあるその教授は新しいESL教育の方法を様々に模索しているのだろうかという興味深かつた。

その模擬裁判のクラスの中で、わたしはまだみんなと同じレベルでは話せなかつたものの、自分がまるでハリウッド映画の中に組み込まれたような興奮を覚えていた。

教室には思い出すだけでも、イラン、イスラエル、トルコ、ロシア、韓国、香港、台湾、中国、パキスタン、インドからの学生がいた。彼らはよく発言し、恐れずに質問をする。同じアジア人なのに、韓国からの学生や中国からの学生は弁が立つた。

わたしも含め、日本人は語学の能力とは別に、人前で意見を述べることにかなり遅れを

取っていると感じた。これは国民性もあるだろうが、日本の学校教育は話すことについて他国ほど重きを置いていない。一方アメリカなどは幼児の時からパブリックスピーチを訓練されるし、大学の必修科目にもスピーチのクラスがあるほどだ。他の国も話すということが重要視されているのだろう。わたしはそれほど内気な性格ではないものの、人前で話すということが彼らのように自然には出来ないと感じた。日本の教育現場の中に、話すということ、自分の考えや意見を述べる方法について、実践的、体系的に学び、トレーニングする場面がもつとあっても良いという気がする。

外国からの学生には圧倒されたものの、その中の何人かとは、お互いの家にも遊びに行くような親しい関係を結ぶことができた。

台湾から来ていたFはブランド物のディスカウントショップの情報に詳しく、彼女に教えてもらってはアウトレットの店へ行き、お得な買い物ができる。また本場の中華料理の手ほどきを受けたり、中国語を教えてもらったりした。

パキスタンから来ていたTはいつも民族衣装を身につけていて、静かだけれどもきつぱりとした物言いをするところが好きだった。わたし達は良くお互いの宗教について話をした。彼女はわたしの家に遊びに来ている時にも、お祈りの時間になると、手足を清めてから東の方角に向かってひれ伏していた。その祈る姿を美しいと思った。彼女はイスラム教、わたしはキリスト教、で

もお互いの信仰を尊重しあうことはできる。

カレッジでは日本人の友人も得た。同じ悩みや喜びを分かち合った大切な友だ。今も付き合いが続いているのは有難い。

キッチンのテーブルで、子ども達に日本語で日記をかかせたり、漢字をかかせたりとホームスクーリングをする一方、わたしはわたしで、自分の宿題に追われ、テスト勉強に明け暮れていた。あの頃、子ども達は「お母さん、今日はもう宿題終わったの？」とか「お母さん、今日のテストがんばってね!」と、青息吐息の母親をずいぶん心配してくれたものだった。

その後、子ども達の通う公立学校で、日本語を教えたり、ESLのクラスの手伝いなどのボランティアをするようになり、女子学生からボランティアアワーカーに移行するが、ここでは机上の勉強ではなく、いわゆる教育実習のような実践での学びを与えられたことになる。

子ども達の通っていた小学校にはアメリカ人のご主人を持つ日本人の先生がいて、英語を母国語としない子ども達の為の英語教育に当たっていた。彼女はわたしに教師をしていたことを知り、アメリカの小学校でボランティアで教える機会を与えてくれ、ESLの授業を一部受け持たせてくれたのだった。わたしとしては思ってもみない教育実習であったわけだ。

そういえば、ユダヤ人の学校に折り紙を教えに行ったこともあった。町が主催する子どものサ

マーキャンプの申し込みの為、順番待ちの列に並んでいると、隣にいた人から声をかけられた。学校に来てユダヤ人の子ども達に日本の折り紙を教えてくれないかと言うのだった。彼女はユダヤ教の教会学校の校長をしているという。

友人のJに助けを求め、折り紙の折り方を英語でどう説明するのかあれこれと練習して、自分達の子どもをアシスタントに引き連れて出かけたことだった。

夫が厳しい海外駐在の仕事に従事している間、わたしはわたしで主婦留学や海外ボランティアをやっている感覚だった。教師や友人からはY o s h i k oとファーストネームで呼ばれるし、母親や妻という立場からも解放され、わたしはその時期をかなりのびのびと過ごしたように思う。また、その時にカレッジで学んだり、アメリカの学校にかかわったことが、帰国後、子ども達に英語を教える仕事に繋がっていった。これもまた時に適った得難い体験だった。

「死なないと思えば何でもできるよ！」

「死なないと思えば何でもできるよー！」

ここ十年間、わたしは車も運転しないし、スキーもスケートもやっていない。今それがやれるような気がしないし、やる気も起こらない。わたしは本質的に臆病で、自分の運動神経に、はなはだ自信がない。事故を起こしたり怪我をするよりは危険なことに近づかない方が良く考えるタイプである。

しかしアメリカにいる四年半の間、わたしはたとえ手に汗を握ろうとも、あちこちに愛車ホンダ・アコードをぶつけようとも、ほぼ毎日ハンドルを握った。そればかりか、生まれて一度たりともやったことがないスキーを始め、毎年家族でスキー旅行に出かけるほどだった。子ども達に釣られてローラースケートやローラーブレードもやった。スケートは小学校六年生の時に一度やって懲っていたのである。

なぜだかその理由は定かではないものの、あの時期は不思議と勇気が掻き立てられた。そして、あらゆる場面で怖いもの知らずだった。

あの時、わたしと十歳の息子は雪の山にかかるゴンドラの中にいて、地上をはるか下に見降ろしていた。わたし達は、そのゴンドラが山の中腹まで来た時にそこで降り、ゆるやかな丘陵をスキーで滑るということになっていた。ところが、もうじき、降りるといふ時になって、息子のHが「おかあさん」と切り出した。慎重に、少し、語尾を上げて、わたしの気持ちを何としても変えさせるといふ意思を露わに、しかし、精一杯感情を抑えて、彼はこう続けた。

「人間、死なないって思えば、なんだってできるよ。ねえ、おかあさん、ここじゃなくて、山の一番上からすべろうよ。」

わたしはその確信に満ちた言葉の響きに、妙に打たれてしまった。「そうだ、人間、その気にさえなれば、なんだってできる！」と、おおよそ親らしくない、いえ、親ならばしてはいけない決断をしたのだった。まんまと彼のそそのかしに乗って、わたし達は山の中腹では降りずに、そのままゴンドラに乗って頂上まで上がって行った。

さて、ゴンドラから降ろされると、なんと足の下は絶壁。少なくともわたしにはそう見えた。こういうところから滑るとはHも予想していなかったのだろう。彼は一瞬息を呑み、わたしの方を見ると「もう、滑るしかないよ」と言うなり腰をかがめ、体を前に傾けた。何しろ身体が軽いのだから直滑降をものすごいスピードで滑っていく。滑るといふよりは小鳥が風に乗って飛

んでいるようだ。

わたしの恐怖心は、幸いまだ体全体に回わってはいなかったから、わたしも息子の後に続いて滑り始めた。身に覚えのないような猛スピードにしばらくは身体を任せていたものの、加速していくスピードに気持ちがついていけず、「こわいっ」と身をすくめた瞬間、わたしは急な雪の斜面に放り出された。

スキーが脱げて遠くに飛ばされた他は誰かにぶつかることもなく、骨を折ることもなく、事無きを得たのだが、ゴンドラの上からはたくさんの人がわたしの無様な格好を見ていて、恥ずかしいといったらなかつた。

何しろ急な斜面、拾ったスキー靴を履くことも儘ならず、スキーを抱えたまま、お尻をずらしながら少しづつ、下降していったのだった。Hはといえば、さっさと一人下に降りて、わたしがえつちら、おつちらと降りてくるのを、多少は反省しながら見ていたのかもしれない。

あの時は、彼のそそのかしにまんまと乗ってしまったことをしきりに後悔したが、それでいて、何かひとつ越えられなかったものを飛び越えたような妙なすがすがしさも感じていた。

わたしの十歳というのは、それはもう臆病の極みだった。どの子も目の前にある跳び箱をおも

しろそうにひよいひよい越えていくのに、わたしは自分の順番が来ると恐怖心で、身体を硬くした。ドッジボールなど、たかがゴムでできたボールだというのに、それがわたしをめぐけてとんでくれば、まるで命を狙われているような緊迫感で、必死になって、白線で区切られた空間を逃げまどった。それはまるで拷問のようで、遊びの楽しさなど感じたこともなかった。

恐怖心というのは、どんな場面でも追いかけてくる。夜道の犬、テレビの画面にクローズアップされる宇宙人の顔、夜中に家のきしむ音、そして夢の中でさんざん引き回される、誰もいない黒い海や、何もない広い砂漠、あらゆるものが怖かった。

大人になることで少しづつ、そういつた恐怖心からも解かれていったのだろうが、どうやら子どもを産むということに何かが大きく変化したように思う。

育つていく子どもと共に育ち直しをすると書いたが、実際そうなのだ。自分の身体から出てきたものの、自分とは全く違った性質を持つ子どもに伴走することで、自分には備わっていない性質までも生まれてくる。

Hがまだようやく歩き始めた頃のこと、彼は自分の背丈よりも高い公園のフェンスによじ登ってはそこからどたりと向こう側へ落ちる。そして落つこちるとまたよじ登っては反対側へどたりと落ちる。どうやらそここのところに彼の喜びがあるように見える。わたしなら決してやらなかった、やってこなかったこの行為を、そうやって見ているうちに、そこに生まれる喜びの質のよう

なものがわたしにも伝わってくる。その時点で彼の体験が、またわたしの体験となるのである。二歳にもなれば、道を歩いていて棒切れが落ちていれば必ず拾ってそれを振り回す。それを振り回すだけならまだしも、高いところへ登っては棒切れを振り回しながら飛び降りる。わたしにはあずかり知らぬ動きや気分なのだが、つきあっているうちにその気持ちよさが自分の中にも移されてくる。

あの日ゴンドラの中で、三十五歳だったわたしは、親の良識を置き去りにして、十歳の子どもになつていたのかもしれない。自分が十歳の時にはとてもできなかった夢のようなことを、目の前にいる悪ガキにそそのかされ、やってみる気になったのだろう。そしてまた、これも育ち直しのひとつだったと今では思う。

今でも、ほんとうになんでもないような時に、十歳の日の言葉が、あの説得するような口調もそのままに、耳元で聞こえることがある。

「人間、死なないって思えば、なんだってできるよ！」

「いい人生だった！」

わたし達がアメリカに滞在した最後の夏のことだった。アメリカの学校は六月の半ばに終わり、その後は九月の始めのレイバーデー（勤労感謝の日）まで長い夏休みが続く。夏休みの間、学校はクローズとなる。教師も生徒も夏休みの間はその立場から解かれるので宿題などもない。だからこれから夏休みに突入するという「ラストデー」には特別な開放感があった。そして、その出来事は、「ラストデー」におこった。

子ども達はお向かいの家のダグラスといっしょに、いつものように前庭で遊んでいた。どこの家にも家の回りに芝生が敷かれて子どもたちが遊ぶくらいスペースはあるが、家には柵や塀のようなものはなく、芝生の先に歩道があり、そのまま道路が続いている。我が家と向かいのダグラスの間にある道路は、大きな通りに入るまでの小さな道で、車の通りはあまりなく、スピードを出して走る車もないような静かな通りだった。

わたしは子どもたちが遊ぶ声を耳にしながら、キッチンで夕食の支度とか、洗いものをしていました。先ほど、もうそろそろ帰りなさいと声をかけたばかりだったが子どもたちが家に入る気配はない。いつも五時から七時まではキッチンのテーブルでいっしょに日本の勉強をすることになっていた。しかし、今日で学校が終わったので、子ども達はもうすっかり夏休み気分なのだろう。

その時、車の急ブレーキの音が大きく響いた。一瞬、長男のHの顔が浮かび、彼に何かがあったと直感した。

前庭に向いているドアを開けると、目の前に黒い大型の車が一台止まっており、止まった車からは大きな音量で音楽が流れ出していた。運転席には濃いサングラスをかけた若い男性がいたが、顔はこちらに向けられてはいなかった。

子どもたちの姿を探すと、次男とダグラスが道の脇に呆然と立っていて、そこから少し離れたところに長男が倒れていた。

駆け寄ると意識はあり、上体を起こしたものの立てない様子だった。急ブレーキの音を聞いて、ダグラスのお母さんも家から出てきていた。詳しい状況は分からないながら、ダグラスのお母さんが警察に電話をしてくれたので、救急車が二台と、パトカーが二台すぐに来た。救急隊の人たちがHを担架にのせ、救急車に運び込むと、身体をしつかり固定した。その時になって初めてHは声を出して泣きはじめた。

次男をダグラスのお母さんをお願いして、わたしも救急車に乗り込み、救急車は町の総合病院へ向かった。

検査の結果、額に二ヶ所コブがある他は何も異常はないので帰ってよいと言われ、きつねにままれたようだった。本人も腰を抜かして立てないでいたものの、今は何ごともなかったような様子で確かにどこもダメージを受けている様子はない。ダグラスのお母さんに電話をし、迎えに来てもらった。家に帰りつくやいなや、Hも他の子どもたちも、何ごともなかったように遊び始め、さきほどの悪夢のような出来事は全くの夢であつたかのような印象だった。

家に帰ってしばらくたつた時、ドアのベルが鳴つたので開けてみると、先ほど運転席にいた青年がサングラスを取り、神妙な顔で立っていた。

わたしが子どもに別状なかったことを告げ、急に飛び出したことを詫び、「彼は飛び出すとどういうことになるか、これでやつと学んだと思います」というと、意外にも青年は泣き出し、「ほくも、こういう道でスピードを出すかどうか学びました」と頭をうなだれた。あの時は気持ちが悪転し、または恐怖で車から降りてこれなかったのだろう。

夜になって子ども達に話しを聞くと、Hが虫を追いかけて道路に飛び出したところ向こうから車が来てぶつかり、気が付いたら道の上にあったという。ダグラスはHが車にはねられた後、

彼の体が空中で回転して下に落ちたのを見たという。

しかし、驚いたのはその後Hが話したことだった。Hは道に飛び出し、車が目の前に迫ってきた、道路に投げ出されるまでのことを話したのだが、まず、車が目の前に迫って来た時、自分は死ぬのだと思ったという。そして、その時に、口に出して

「I had a good life」と言ったのだという。

自分の目の前に車が迫って来た時、死ぬことの恐怖を思わずに、自分は良い人生を送ったなどと言うとは、いったいどういう子なのだろうと驚いたのだ。そしてその後、わたしは事あるごとにこの言葉を思い浮かべた。そしてまた、その言葉に励まされるような気がした。

つい先頃、Hと向かいあって食事をしている時に、何かの話しからか、彼がその時のことを思い出して話し始めた。あの時、車が自分に向かって来るのを見て、死ぬと思った瞬間、まるでローモーションのように時間の流れが変わったのだという。そして車にぶつかるまでの間に、これまでのいろいろな場面が映画のコマ送りのように、次々に映し出されていって、思わず、「I had a good life」と言ったのだという。

「それにしても不思議だよ。頭のたんこぶ以外には打ち身の後もなかったなんて。空中で回転したんだから、それだけの衝撃でぶつかったなら相当痛かったはずだし、ダメージもあったはずだ

よ。」とHは言う。わたしは何しろその現場を見ていないのだから、何とも言えない。いったい、あの時何が起こったのだろう…

わたしは、Hが車に接触する瞬間に彼を抱きとめ、ふわりと空中を飛んだ天使の姿が見えるよ
うな気がした。

ピニャタを割れない少女がいた

アメリカに住んでいたころ、子ども達はあちこちのバースデーパーティーによべれた。親がテーマを決め、趣向を凝らして自宅で行うパーティーもあれば、自宅にプロの道化師など呼んでアトラクションをもらうというものもあった。またゲームセンターやスケートリンク、プール、ボートリング場と、あらゆる場所がバースデーパーティーの会場になった。

パーティーグッズを売っている店も多く、それだけで商売が成り立つくらいだから、半端じゃない数のパーティーが毎日、あちらこちらで開かれているのだろう。

パーティーグッズの店でひと際人目を引くものに、様々な形の張りぼての人形があつた。カラフルで様々な形の人形がいくつも天井からぶら下がっているのである。

この張りぼての人形はピニャタと呼ばれるもので、オリジナルはメキシコ。もともとはプレゼントやキャンディーなどを入れる粘土のつぼだ。メキシコでは十二月十六日からクリスマスイブ

までの間、子ども達が行列を作って町を練り歩くポサダという催しものが九回に渡って行われる。その最後のポサダの時にピニヤタ割りをするのだそうだ。

店に吊り下げたあるピニヤタは、たいていは鳥か動物の形をして紙で作られており、子ども達のバースデイパーティーのアトラクションで使われるようだった。

キャンデーや小さなおもちゃがたくさん詰め込まれたピニヤタが木につるされ、目隠しをした子ども達が順番に棒でピニヤタをたたく。ピニヤタがみごと割れて、キャンデーが雨と降ってくる子ども達は奇声をあげながらわれ先にキャンデーを受け止める。なんだか、日本の西瓜割りと棟上の時の餅撒きをいっしょにしたようなゲームだと思った。

わたし達も一度、子どもの誕生会のために、このピニヤタを買ったことがある。わたし達を選んでピニヤタは牛か馬のような動物の形をした黄色いピニヤタだった。

この日、長男のバースデイパーティーのテーマはその頃人気の映画「ゴーストバスター」だった。まずはゴーストバスターのキャラクターが印刷されている紙皿や紙コップ、テーブルクロスといったものでセッティングし、ゴーストバスターのテーマ曲を流し、ケーキやスナック、飲み物を出した。

食べたり飲んだり、プレゼントを開いたりが終わるといよいよアトラクション。ゴーストバス

ターのテーマに合わせて、空き瓶と紙粘土でこしらえたたくさんのゴースト人形を水デッポウで倒すというゲームを苦肉の策で考えた。

他にもいくつか無理やりテーマにこじつけたようなゲームをして、最後は前庭の木につるしたピニャタをゴーストに見立て、ゴーストバスターたちが、それをやっつけるという筋書きだった。もちろん、ゴーストバスターは子ども達全員。みんな背中にバックパックを背負い、その気になってキヤーキヤー言いながら走りまわっていた。

さて、いよいよ最終ラウンド。ピニャタを割らせるべく子どもたちを一列に並ばせようとしていた時だった。ひとりの女の子が、「わたしはできない」と言つて、後ずさりをし、みんなの列から離れてしまった。彼女の怯えたような表情から、宗教上の理由か何かで、ピニャタを割る遊びを禁止されているのだろうかと思つた。なにしろ、息子たちが通う学校にはさまざまな人種の子ども達がいるので、常に、そういった予期せぬ「違い」にぶつかる。

とにかく、あわてて、彼女をピニャタ割りの列から離し、何かと話しかけながら気を紛らわせようとした。他の子ども達がピニャタ割りに打ち興じ、やがて頭上から降ってきたキャンデーに歓声を上げるのを、彼女は一人遠くからじっと見ていた。

後で知ったことだったが、ポーランド出身の彼女の両親は学校の父母会やボランティアでも両

親そろって積極的に参加していて、人種差別をなくすための学校のプロジェクトのために多額の寄付をしたことが伝えられた。確か、その子のお父さんが教室でホロコーストの特別授業をしたと、Hがそんなことを話していたような気がする。人種差別や戦争に対して反対する立場をはつきりと示し、その事のために親の立場で学校教育にかかわっている方達だった。

そのことを知った時、彼女のあの時の意思表示は、この両親の家庭教育の賜物に違いないと思つた。ピニャタを割るという遊びは、考えてみれば、動物の形をしたものを叩いて割るのだから残酷な遊びだ。他の子どもたちにとつては何でもない遊びが、彼女にとつては胸の痛むことだったにちがいない。たとえ紙でできた人形であっても、その人形を棒で叩くという行為を彼女は自分に課することができなかったのだろう。その子が、ピニャタの動物を叩くことを拒否したこと、その時の怯えた表情が今でも忘れられない。

人は本来、人あるいは動物やものを破壊することなどできないに違いない。ところが、それが何かの拍子に破壊に対して無感覚になつてしまう。張りぼての動物だから平気だということと同じように、人種が違うから、宗教が違うから、考え方が違うから、見も知らぬ遠い国のことだからという理由でその国のひとつひとつの命に対して無感覚になつてしまう。

ナチスはユダヤ人という理由で多くの人間を虐殺し、アメリカは第二次世界大戦を終結させる為として日本に原子爆弾を落とした。そして日本もまた南京で大虐殺を繰り広げた。わたしたち

人間の歴史はこれほどの過ちを繰り返してきたというのに、今だに正義を振りかざして破壊と殺戮とを繰り返している。

あの女の子は今二十歳。きっとアメリカのどこかの大学に通っていることだろう。あの子はアメリカのイラク攻撃をどう受け止めているのだろう。ピニャタを叩くことができないと訴えた彼女は胸の痛む日々を送っているのではないだろうか。

カルチャーショック再び

アメリカに渡ってから四年半が経ち、わたし達は帰国の時を迎えた。

キンダーガーテンの途中からスタートした長男は、その夏小学校四年を終了し、次男は小学校二年を終えた。

この時には、二人ともアメリカの子ども達とほとんど変わりなく英語を話すようになっていた。また長男の読書力はその学年にしては高く、「ジュラシック・パーク」などの原作を数日間で読んでしまうほどになっていたし、次男も英語で物語を書いてそれを読んで聞かせてくれるほどに成長していた。

家では基本的に日本語で話すものの、二人が喧嘩する時には英語でなければ調子がでないように、読むにも話すにも英語の方が圧倒的に楽という状況になっていた。しかし、夏休みが終わる九月からは長男は日本の小学校の五年生に、次男は三年生に編入となる。また一からのスタートである。

四年半の間には近所の人達、教会での方々、また学校を通しての友人達と、親も子も別れがたい人達との関係が築かれていて、アメリカに別れを告げ、日本に降り立った時には、新しい環境への不安に加え、別れの痛手がずつしりと堪えていた。

外国で生活する時、言葉の違いや文化の違いの中で起こる精神的な葛藤はカルチャーショックと言われるが、しばらく外国で暮らした者が母国に戻って来た時、そこに違和感や戸惑いを覚える逆カルチャーショックもまた存在する。

海外での暮らしの中で、努めて意識しようとしていたことは、この生活はあくまでも仮の生活、いわば長期の海外旅行のようなもので、日本に戻っての生活こそが本来のものだということだった。子どもも親もそのことをしっかりと意識していなければ、日本に帰った時の逆カルチャーショックが大きいばかりか、下手をすれば、日本の社会に適応できなくなってしまうと危ぶんだのである。

しかし、それほど予防線を張っていたにもかかわらず、戻ってきて感じた戸惑いは、渡米した時の戸惑いよりも大きかったような気がする。

特に日本の小学校は初めてだったので、戸惑いの大半は学校教育の違いや、子どもに対する意識の違いから来るものだった。

小学校三年生の次男は学校からの帰り道や、友達の家からの帰り道、やたらと迷子になり、わたしはその度にパニックに陥った。

転校して間もないある日、友達と二人で学校から出たのはよかつたのだが、いつも登下校している正門からではなく裏門から校外に出てしまった。その友といっしょに帰るつもりでいたら、その子は「僕はこっち、君はあっち、じゃ、あした」と、自分の家に向かってさっさと行ってしまうた。

その友達に悪気はない。それほど複雑な道でもない。当然分るだろうと思つたのだ。

ところが次男は「あっち」が、少しも分つていないということに、一人で歩き始めてから気づいた。とにかくこの年齢になるまで自分ひとりで道を歩いた経験がない上、「あっち」は見たこともない道、彼はいつたどこをどう歩けば家に帰り着くのか見当もつかず、歩けば歩くほど家から離れていったのだつた。

結局、道行く人に父親の会社の名前を告げ、そこへ行く道を教えてもらい、会社の中に入つていって「ぼくの住んでいる社宅はどこですか」と尋ねたらしい。親切な受付のお姉さんが社宅が見えるところまで連れてきてくれた。

一方、わたしは次男の帰りが遅いので、学校に電話をすると、もうとっくに帰りましたと言われ、血の気が引いた。生きた心地もなく、おろおろと家の前に立っていたのだつた。

「帰国母」の感覚としては、子ども達が学校から戻ってくる時間が学年によってもクラスによってもまちまちであることがとても不安だった。これでは、教室から出る時間が遅くて帰宅が遅れているのか、それとも帰り道に何かアクシデントがあつて帰つてこないのかが分からない。もし何かがあつた場合、対応が遅れるではないか。それに、学年ごとに下校時間が違つていては、集団登校の時のように高学年の子が低学年の子の世話をすることもできず、小さな子がたったひとりで家に歩いて帰ることもあり得る。危険なのは下校時も同じなのに、安全対策がスポンと抜けている！

しかし、声を上げてみたところで、これは日本では当たり前のことなのだ。小学校一年生の子だつて一人で家まで歩いて帰る。驚くべきことに、小さなランドセル姿の小学生が満員電車の中や駅の雑踏の中に紛れている。これは日本の風景であり、誰も不思議には思わない。

アメリカでは子供の身の安全については神経質なほど注意が払われていた。学校の下校時刻は登校時刻と同様、全校生徒同じ時刻で、教師達は下校のベルが鳴るまで、ドアの入り口で子どもを待たせ、合図と同時に一齐にドアを開ける。その時刻になると保護者が校門の外に待機して校門から出てきた子どもを連れて帰るか、遠い子についてはスクールバスが家の近くまで送つて行く。

もちろん高学年の子の中には十分くらいの距離ならば歩く子もいるにはいたが、その場合も交差点には町から雇われている、制服を着た見張りのおじさんやおばさんが、子ども達の安全な登下校を見守っているという念の入り用だった。

親は十二歳以下の子どもを、たとえ自分の家の中であっても、子ども達だけにしてはいけないという法律があら、親が迎えに行けなければ、ベビーシッターを頼むか、あるいは放課後に開かれる学童保育のようなプログラムに子どもを預けることになっていた。

小さな子どもが一人でうろうろ歩くなどということは有り得ない事だったのだ。

長男の方はもう五年生だったからさすがに道に迷うことはなかったが、人との関係ではしこたま迷子になった様子だった。

裏表がなく、どこか、のほほんと子どもらしいアメリカの子供達の中で過ごした彼は、ひねった物言いや、陰でこそ悪口を言うといった高学年にはありがちな友達の態度にひどく傷ついたようだった。

何か筋が通らない、道理や意見がまっすぐに通っていかないようなもどかしさがあつて、子どもは子どもで、親は親で、あっちこっち、コツン、コツンと額をぶつつけながら歩いているようなところがあつた。

アメリカでの人間関係は本音と建前のようなものがないから、すつきりしている。言葉で苦勞

するほどには人との関係で悩むこともなかったが、その感覚がすっかり身につけてしまい、日本人としての微妙な人との距離の取り方や、本音と建前の感覚を取り戻すのにはしばらく時間がかかった。

しかし、どこにでも助け舟は現れる。ほどなく、近所に住むアメリカ人の女性と知り合いになった。彼女の夫は日本人で、小学校一年生の娘がいた。彼女自身、アメリカの学校と違う日本の学校に戸惑いや不安があった。わたしは彼女の抱いている不安が分かったし、彼女はまた帰国してきたばかりのわたし達の戸惑いが分かる。わたし達は意気投合し、家族ぐるみの付き合いが始まった。彼女は我が家の子ども達が英語を忘れないように、彼らと英語で話しをしたり遊んだりしてくれ、わたしは彼女の娘に日本語で絵本の読み聞かせをしたり、宿題をみたりした。

また子ども達が通う学校の母親仲間に、以前イギリスに住んだことのある人がいて、わたし達の事を気にかけてくれた。彼女はPTAの役員をしていて、発言力もあつたから、彼女を通して、その小学校にアメリカの学校の図書ボランティアを導入する道も開かれた。母親達に呼びかけて有志を募り、学校図書室のボランティアグループを発足したのだ。また先のアメリカ人の友人も交えて、地域の公民館や、小学校を会場に、様々な国の方々を招き、異文化交流の催し物を企画し開催した。思えばずいぶん積極的に学校や地域に関わったものだ。あれはあれで、カルチャー

ショックを、行動を起こす原動力に変えた貴重な時期だった。

この時期、帰国してから一年半の間、わたし達は〇市にある社宅に住んでいた。〇市は当時、文部省指定の帰国子女の受け入れ市だったので、毎週土曜日には教育委員会の主催する帰国子女のための言語保持クラスが開かれ、同じような帰国子女達といっしょに外国人の教師から授業を受けることができた。

また社宅の近くにある教会は、わたし達がアメリカ滞在中に通っていた教会と同じ教派のキリスト教会で、その英語学校では、アメリカ人の若い宣教師が英語を教えていた。子ども達はその英語学校で英語の勉強を続け、また家族でその教会の礼拝にも出るようになった。

ここでも必要なことが不思議なように備えられ、恵まれた環境の中で、次第に日本での生活に馴染んでいくことができたのだった。

さて、しかし、我が家はもう一度、引越しをし、新しい環境での生活を始めることになる。

長男の中学校入学に間に合うよう、われわれは隣町に、家を購入した。夫もわたしもそこに根を生やすという自覚はなかったものの、ともかくこれから思春期を迎えることになる息子達には独立したスペースが必要だと考え、三度目の引越しを決めたのだった。

幼児の時期を第一期とすれば、アメリカ滞在の時期が第二期、そして一年半の移行期を経て、

今は第三期の終わりということになるだろうか。この町に移り住んでもうじき十年になる。その間に子ども達は思春期から青年期へと育っていった。

夕暮れ時のさびしさ

今日は珍しく家族が四人揃って夕餉を囲んだ。

大学生の長男はアルバイトで深夜の帰宅が多く、次男は次男で部活動に明け暮れている。夫は残業で、家で夕食を取れるのは週の半分。めったなことでは家族が揃わないのだ。

朝、仕事に出かける前、急ぎ冷蔵庫を覗く。豚の薄切り肉とほうれん草と豆腐がある。とくれば豚ちり。生姜を卸してばん酢で。そうと朝から決めていた。

七時すぎ、仕事から帰ってきて土鍋に水を張ったところで、卓上こんろのカートリッジを切らしていることに気がつく。どうしよう、せつかく家族が揃うというのに鍋が出来ない！

そこで鍋の湯で豚肉をさつと茹で、肉を取り出した後、しめじ、ほうれん草、うどん玉を順番に入れ、茹で上がったものをざるにあげ、水で冷やし、冷たい豆腐といっしょに大皿に盛った。ごまドレッシング、そして、ポン酢におろししようがときぎみねぎと七味で食べることにした。

つまり、鍋の中味をすっかり取り出し皿に盛ったというだけなのである。

「これ何ていう料理なの、豪快だねえ」と何も知らない家族は珍しがり、大皿いっぱいの中味だけ冷しゃぶ風」は最後のうどんのひとすじまで箸ががち合い、それぞれの胃袋に無事おさまった。瞬く間だった。

我が家の場合、食するときはしんみりと話すゆとりなどないから、ひととおり満腹になってから話が出てくる。今日の話題は「夕暮れ時」。夫はわたしが昨日ネット日記に書いた、子どもの時のふと訪れる夕暮れ時のさびしさというのがさっぱり分からないと言う。それを聞いた次男は、「ぼく、よく夕方、理由もなくさびしくなっただけがあつたなあ。みんな家にいるのに。」と告白する。

「そんな時どうした？」

「泣いた。」

「お母さんは坂を駆け上がって夕日を見たらしいよ。」
と冷やかし半分は夫。

「ところでHは？」

「それって、ぼく一回も経験ない。そういうのがあるらしいことは聞いたけど」と、自信满满である。どうやらこのことに関しては、私の遺伝子は次男に、夫の遺伝子は長男に

行ったようである。

夕暮れ時のいたたまれなさは過ぎてみれば何ともないことだが、小さい時にはけっこうこたえるものである。

ある時、わたしは家族団らんの夕餉の最中、大好物のチキンライスを口に運んだその瞬間に、その気分に襲われた。スプーンですくった赤い色の御飯をどうしても口に入れられなくて、「おなか減らすために走ってくる」と言つて、食事をそのままにして外に飛び出した。子ども心にも、何とか払拭しなくてはとあせつていた。

あの時いつももうさかつた父親がその行儀の悪さを見逃してくれたのは父にも覚えがあつたからだろうか。そして母親が少しも心配そうでなかつたのは、母がその気分とさっぱり縁がなかつたからであろうか。

次男が小学校の二、三年生の頃、夕暮れの窓辺でさびしいと言いながら泣いた時、わたしはなんと不思議な気持ちに打たれた。かわいそうに思ったが、何かうれしくもあつた。あの時、「分かる、分かる、子どもはみんなそういう気分になるものなんだよ」と言つたような気がする。

以上は二〇〇一年、五月二十八日の日記だ。

思えばあの頃は、たまにはあつても、ひとつテーブルに家族四人で座り、夕餉を囲みながら

話しをすることがあった。そして、そういう時の話題で一番無難なのが小さい頃の話だった。この時、家族で話したことは、もちろん日記に書いたからではあるが、印象に残っていて、しばしば意識に上った。

この夕暮れ時のさびしさのことについて、もう少し書いておきたい事がある。

わたしはこの九歳から十歳にかけて、しばしばわたしを襲った虚無感とも不安ともつかないこの気分の正体がいったい何だったのか、時々、思いを巡らせたが、ある時、シュタイナー学会が主催したある講演会で「九歳の危機」の話聞いて、はつとするものがあつた。

ドイツの神智学者また教育学者ルドルフ・シュタイナーによると、子どもは幼児期、母親の中から出ていこうとし、やがて、母親を背中に感じるようになる。さらに九歳ごろになると、もう母親のひざから立ち上がり、母親の隣へと来る。ちょうどこの時期、子どもは自分の周りにいる人たちが、自分とは別の人であることを実感するようになり、その時はじめて、「死」の恐怖を味わい、孤独感や寂しさに襲われるのだという。

わたしが知りたいと思っていた、九歳の頃のあの気分、恐らくは次男が訴える、説明のつかないさびしさが、ここに由来するものだと言点がいったのだった。

子どもによって、その程度には差があるだろうし、また出方も違うことだろうが、わたしの場

合、それは友達と遊んでいる最中だったり、家族揃って食事をしている最中だったり、おおよそ何の脈絡もなく、まるで発作のように起こった。

一旦、その気分に襲われると、ちょうど金縛りにあつたような感じで、自分ではどうにも振り切れないのだ。もう友達といっしょに遊べない、食事がどうしても喉を通らない、というフリーズ状態になるのである。

そういう時のわたしは、まるで追い立てられるようにその場を離れ、とにかく、高い場所を探してよじ登った。

幸いわたしの生まれ育つたところは山にぐるりと取り巻かれており、家も丘の斜面にあつたので、家の脇をずんずん登つていけば、すぐに丘の上に立つことができた。そしてそこから下に広がっている町並みや田畑をはるかに見下ろすのである。

眼下にはたくさんの家があり、人々の暮らしがあり、その上にはどこまでもひとつづきの空が広がっている。その風景の中にすっぽりと入ると不思議なようにそのフリーズの状態が解けた。呼吸が楽になり、暗い恐怖は消えていた。そして、何もなかったかのような心持で丘を降り、遊びの続きをしたり、食事を続けたりしたものである。

襲ってきた気分を払いのけるために偶然見つけた「丘によじ登る」という行為。最近になってその行為が、自分という存在を俯瞰するという行為だったのではないかと思ひ至った。

不安は自分というものがいったい何者なのかということから生じる。

わたしはいったいどこから来て、どこへ行き、また何のためにここにこうして生きているのか、そのことが分かっていないということに九歳のわたしは、はたと気付くのである。

分かるわけではない。わたしがわたしの命を作ったのでもなければ、わたしがわたしの死を選ぶこともできないのだから。明日何が起こるか分からないばかりか、この瞬間の一步先の時間さえ、わたしが支配しているものではないということ我突然に知り、がくがくと足元から不安になってしまふのである。

そこに必要なのが俯瞰であった。自分の存在を、自分の命を、はるかに自分から離れた空の上から見るということが：

わたしはたたくさんの人間の中の一人に過ぎない。たたくさんの人の暮らしや時間の流れの中にあるわたしの暮らし。そこには山も木々も田畑も家々もあり、それらのすべてがひとつの秩序の中に包まれている。

そのように自分を見る時に訪れる深い安堵。

俯瞰、鳥の眼で見るということ。それは、この地上に生きとし生ける物すべての命を司り、自然を創造し管理している神の視線から見るということなのだろう。とすれば、「丘によじ登る」という行為は、九歳のわたしが、神に会いに出かけるといふ行為だったのかもしれない。

いったい人はいつ、どういう状況の中で神に出会うのだろうか。

長男も次男も小さい頃から親に連れられて教会へ行き、中学生の時に洗礼を受けたから、クリスチャンという自覚はあるのかもしれないが、一人の人間としてどのように神の前に立っているのだろうか。

しかし、わたしはもうそこへは立ち入ることはできない。彼らはすでに、自分のさびしさを自分で引き受けなければならない時期を迎えている。

小さい頃に夕暮れの景色を見て涙もなく泣いた次男も、そういうさびしさとは無縁だったという長男も、これから出かけていく場所はいやおうなくさびしい場所である。人が仕事をしたり、愛したり、命を育んだりしながら生きていく場所は本質的にさびしい場所なのだ。いえ、さびしいから人は働き、愛し、命を育んでいく。そうしてさびしさの中で自分を知り、自分を創った神に会う。

またいつか夕暮れ時のさびしさの話を彼らとすることがあるだろうか。あるとすれば、ずっと先のことだろうか。

里子のクレメンス

フォスタープランの事務所から便りが届いた。フォスターチャイルド（里子）のクレメンスが援助を卒業したという知らせだった。

クレメンスはケニアに住む女の子だ。彼女や、その子の住む地域をサポートするようになった時、クレメンスは十四歳、それから四年。彼女は学校を卒業したのだ。

この里親制度のプログラムは開発途上国に住む子ども達が学校教育を受けることができるように、里親となって援助をしようというもので、里親の登録をした個人や団体は里子が十八歳になるまで、毎月、五千円のサポートをする。

そのお金は、里子が学校へ通う費用の他、その子どもの住んでいる地域の生活環境を整えるために用いられ、フォスタープランの事務所からは毎年、里子の生活や学業の様子、また地域でどのような生活改善がなされているかといった報告が、里子の写真とともに届けられる。

プランを通じて、里子に手紙を書いたり、小さな贈り物をすることも可能で、里子からも手紙や絵などが送られてくる。

フォスタープランに登録するとすぐに、里子の地域の事務所から、里子の生活の様子を詳しく書いたレポートと、写真とが送られてきた。

生活するための水を一キロ先の水道まで汲みにいくのは彼女の仕事だった。煮炊きするための薪を採取するには二キロ歩かなければならない。セメントの壁、トタンの屋根、床に板はなく、土の上に敷物を敷くという住まいは、しかしこの地域の平均的な暮らした。

文字が書けなかったクレメンスが学校へ通い始めて間もなく送ってくれた手紙は絵だけだったが、やがて絵に短い英文が添えられるようになり、最近来た手紙には将来は教師になりたいとしっかりした文で書かれていた。

また、報告書によると、それまで、飲み水が確保できずに、不衛生な状況だった学校の給水システムが改良され、雨水を溜る大きなタンクが設置され、さらに、マラリアやエイズから身を守るための医療設備が整えられたということだった。

五千円というお金が、一人の子どもを学校に行かせるだけでなく、その地域の生活環境も整える。日本での五千円が、何十倍もの価値を持つことに驚く。

月に五千円というサポートの金額は、クレメンスと同じ歳の高校生の次男の月の小遣いと同額だ。次男の同級生の中には、もつと多く小遣いをもらっている友達も多いらしい。余裕のない家計の中から見も知らぬアフリカの女の子をサポートするより、我が子の小遣いを増やしてやるのが親心だろうかとふと心が揺らぐこともある。

けれど、やりくりに苦労している息子達に、ちよつとかわいそうかなと思いつながらも、五千円を里子へ贈る。それでなくても、世界中の子ども達の中で、彼らはずいぶん豊かなのだ。少しくらい苦労もしなくては。

クレメンスをサポートするようになってから時々家でやっている英語教室の中学生達に彼女に宛てて、英文で手紙を書かせた。彼らが、部活動や、映画や音楽のことを話題にして手紙を書くのを見て、この子たちと全く生活環境の違うクレメンスは、この経済的な豊かさがにじみ出ているような日本の子ども達の手紙をどんな気持ちで読むのだろうと、心は重くなった。彼女は子ども達が書いているような映画を見ることもないだろう。子ども達が書いているCDのことにして、それがどういふものか想像することも出来ないに違いない。

フォスタープランを始める時は、サポートすることで一人の子供が学校へ通い、また地域の生活まで改善されるという充実感のことしか頭になかったが、実際に始めてみると、生活や経済に

あまりにも格差があることに愕然とする。

知らない子どもであればそれほど胸も痛まないだろうが、里子である。手紙のやり取りなどをするようになる、いくら援助をありがとうと感謝されても、彼女達よりずっと豊かに暮らしている自分達に後ろめたさを感じてしまう。良いことをしていると、晴々とした気持ちになどなれはしない。

支援したり、経済的にサポートすることは、この後ろめたさを引き受けるということなのかもしれない。

青年H、バックパッカーとなる

わたしはここ十年近く、日本の外には一步も出ていないというのに、長男のHは大学生となるや、自分の足で世界を歩くのだと、春と夏の休みにはアルバイトで貯めたお金でバックパッカーをやっている。皮切りはヤップ島だった。

今はHの旅など、慣れっこになってしまい、どこへ行こうが、誰と行こうが、またしばらく連絡が途絶えようが、気にもならないのだが、第一回目のヤップ島行きの時は、ずいぶんと心配したものである。

これはその時の日記だ。

二月二十四日に友達と二人で旅に出た大学一年の長男から二週間連絡が途絶えていた。出かけて二、三日後にグアムから電話があり、翌日飛行機でヤップ島に行くということだった。その後

連絡がないのである。テレホンカードを買ったというのだから電話はできるはず、拉致でもされていない限り。

いったん不安が生じるとそれはむくむくと大きくなる。とてもじつとしてはおれない。それでも、連絡の取りようがないのである。いつしよに行つた友達もダイちゃんとしか知らないし、ヤップ島から息子の大学に來ているという女の子の名前も連絡先も知らない。その子の親戚の家に滞在するようなことを言っていたが、いったい今そこに居るかどうかもさだかではない。

大学で学生の電話番号などを聞こうと電話をかけてみたが、個人的な情報は伝えられないという。これが高校だつたら、担任の先生に相談にのつていただくこともできるのだろうが、大学とはこういうところだつたのか。当然ながら、保護者に配られる連絡網のリストなど存在しない。そういうものは個人の責任で確保しておくものなのだ、こんな当然のことに今ごろ気がつく。

あまり息子のプライバシーにはかかわらないようにしてきたが、友達の携帯番号くらいは聞き出して控えておくのだつたと悔やまれた。背に腹はかえられない。彼の部屋に入り、手がかりになるものを探しかかる。まるで家宅捜査の刑事のようだ。

彼らが企画したパーティーのゲストリストが見つかった。おびただしい名前と電話番号。ここに息子の友人もいるだろうし、そこから連絡の糸口も見つかるだろう。知らない若者の携帯電話にかけるのは抵抗があるがこの際しかたない。上から順番にかけていくが、圧倒的に通じない。

番号が変わっている。通じたと思つても、ただ誘われて出かけたパーティーだったから知らない
とそつけない。

そこで思い出したのが昨年の誕生日に彼がもらつたサイン帳。確か同じ学部の子達がメッセー
ジと名前を書き込んでいた。彼は新しく友達になつたばかりの子達がみんなで心のこもつたメッ
セージを書き込んでくれたと、そのサイン帳を自慢気に見せてくれた。

あつた、あつた。本や雑誌や紙切れが無造作に積み重ねられている机の上に見覚えのあるサイ
ン張が見つかった。そこに書かれた名前の有難いこと。メッセージにはプリクラまで貼つてある。
調べていくとプリクラの写真の下にある名前がパーティーのゲストリストの名前の一つと一致し
た。この子は少なくとも息子のことは知つている。息子の交友関係も分かるかもしれない。

電話が通じ、フレンドリーな声にほつとする。二週間も連絡がないのは大変と、彼女も心配し
てくれ、ヤップ島出身のJさんの連絡先を調べてくれるという。また他の息子の友人にも当たつ
てくれることになった。

ほどなく彼女から連絡があり、Jさんの携帯番号が分つた。すぐに電話をかける。有難いこと
にJさんの携帯電話にはすぐにつながつた。

さて、Jさん。一週間前にヤップ島の親戚の家から、日本からの客が来て楽しくやっている
という電話が入つたということだつた。ああ、よかつた。行方不明になつてゐるわけではない。と

もかくヤップ島へは無事たどり着き、寝泊りできる場所で暮らしていることは分つた。

Jさんから親戚の電話番号を教えてもらい、さつそくかけてみる。電話局で国番号を問い合わせるとヤップ島では分らないという。そもそもヤップ島つてどこの国なんだろう。グアムから行くというのだから、アメリカだと思つていたのだが、どうやら違うらしい。国番号を無視してかけてみると何とつながつた。市外局番だと思つていた三けたの番号がどうやら国番号だつたのだ。

電話の向こうから女の人の声が聞こえた。訛りのある英語だ。Hの母だというと、Hは今いなが夜に帰つてくるという。ということはそこにまだ滞在しているということだ。

ほつとする。わたしがお礼を言うと、向こうの方がしきりにありがとうと言われる。やつかになつているのは息子たちなのだが彼らが有難がられる理由が何かあるのだろうかと言はかつた。

夜になるのを待つてもう一度電話をする。

「はい、もしもし」といきなり息子の声。

「なんであんたが日本語で応対するの。その家の電話でしょ。別の人からの電話だつたらどうするつもりだつたの！」

「ここのおばさんが今日お母さんから電話があつて、また夜にかけてくると言うから、きつと

お母さんからの電話だと思つて僕が取つたんだよ。ここ、電話なんてめつたにかかつてこないからね。辺りに公衆電話なんてもんないし、電話代が高いからこの家の電話は使わせてもらえないし、連絡の取りようがなかったんだ。」と言う。

ヤップ島では労働賃金の時給が七十五円なのにコココーラはアメリカと同じ値段。電話に限らず、店で売られているものは外国からのものばかりで、島の人たちにとっては高くて手が出ない。そこで自分たちで作つているタロイモを堀り、毎日海へ出かけ、エビやらカニやらを取つてきて食べるという自給自足の生活をしているのだとHは説明した。

「それで君たちはそこで、ただで食べさせてもらつていゝというわけ？」と心配になつて聞くと、「とんでもない。二人で三〇〇ドル出したんだよ。」と言う。

時給が五〇セントの社会では三〇〇ドルは大金だが、観光客用のホテルに泊まろうとすれば三日分にもならないのだから、双方にとつて悪くはない話しに違いない。一方的にやつかいになつていゝのでなくて、まずはよかつた。

ヤップ島にいる間中、息子と友人はやつかいになつていゝ家族の人と共に海へ出かけ、食料となるエビやらカニやらを採つて過ごしたらしい。

美しい自然のもと、お金がなくても仕事がなくとも島の人々は幸せに暮らしてゐて、ここはま

さに地上の楽園だと、Hはこの旅を満喫している様子だった。

いつかわたしもその地上の楽園で、日がな一日エビやカニを取りながら過ごしてみたいものだと、美しい海を思い描いてうっとりとなつた。

それにしても、今回の旅はアジアのあちこちを見聞して歩く社会派の旅だったはずなのに、ヤップ島へ渡るだけで、飛行機代に五〇〇ドルかかり、滞在費も予想外にかかって、インドを回るはずのお金が底を突いたとHは早々に戻ってきた。危険も伴うかもしれないが、貧しいインドの人たちの暮らしを見ることは必要だろうし、何か大きなものを掴んでくるだろうと期待していたので、ちよつと拍子抜けしてしまつたが、危険なことに出会うことなく戻つてきてほつとしたことも事実だ。

とにかく、日本とは違う価値体系の中に身を置いて、現地の人々の生活の中に溶け込んだことは、旅としてはそれなりの収穫であつたに違いない。

*

さて、青年H、その年の夏休みの旅はイタリアだった。八月いっぱい、夜遅くまでアルバイトをし、旅行の費用はなんとか捻出し、前回ヤップ島へいっしょに行った相棒と二人で旅する計画

を立てていた。

何しろ、彼はアルバイトで毎晩深夜の帰宅、朝は家族が出払ってからやおら起きてくるという生活をしているのでそもそも顔をあまり合わすことがない。準備はどうなっているのか、旅の行程はどのようなものか家族はおおよそ知らない。

出発の日はずがにわたしが出かける前には起きてきた。これから旅の支度だという。家を出るまでに二時間もあるのだから余裕だというのが、二週間も海外に旅するのに、出発前の数時間までパッキングもしないなんて、わたしならとうてい考えられない。だいたい荷造りもしないでにおいて旅の前の晩、熟睡などできるものだろうかと呆れ果てる。

息子が荷物を詰め込んでいた大きなバックパックは、子ども達がまだ小さかった頃、ヨーロッパ旅行をした際に夫とわたしが担いだフリューム入りの馬鹿でかいしろものだ。二人で同じようなバックパックを担ぎ、子供たちの手を引きつつ、フランス、イタリア、スイス、ドイツと二十日ほど旅した。

イタリアはフィレンツェ、ローマ、ベニス、ミラノを回った。見て回るところは教会と城と美術館だから、子ども達はもううんざりしてしまつてイタリアには良い印象はなかつたようだったが、Hがヤップ島の次に行く場所をイタリアと定めたのはどういうわけだったのだろうか。

日がイタリアを旅している間、わたしはイタリアを回った時のことを思い出していた。

ちようどミラノからドイツのシュツツガルトまで行こうと電車に乗って一時間も走らない時に、国鉄のストライキに出くわしてしまった。前触れもなく電車が止まり、わたし達は、見知らぬ小さな駅で降ろされ、延々と待たされた。数時間後、ようやくバスが来たのはいいが、なんとまたミラノまで戻されたのだった。ミラノから出る電車は朝食付のデラックスな急行列車で、その特別料金まで払ったというのに！ わたし達は憤慨したが、この国では国鉄の山猫ストなど日常茶飯時だと見え、誰も憤慨している様子はなく、天災か何かのように受け止めている感じだった。

その見知らぬ駅で送迎バスを待っている時のこと、一人の老女がイタリア語でわたし達に向かってしきりにわめきたてている。近くにいた人に、あの人は何と言っているのかと英語で訊ねると、その人が通訳してくれたところでは、「あんたたち、日本人は世界を征服するつもりでいるのか」とわめいているらしい。

そんなあく。わたし達がいくら日本人だからって、旅の途中でこの国のストライキの犠牲になっている訳で、謝ってもらいのはこっちの方、非難される筋合いはない！

しかし、わたし達を取り囲んでいるのは、遅いバスに苛立ち始めたイタリア人達、またお互いにとつて外国語である英語で通訳まで立てて議論する気力もなかったので、わたし達はただ黙っ

ていたのだった。

あのバブルの時期、豊かだとされる日本人はどこへ行つても叩かれる運命にあった。

さて、ようやくミラノに戻り、高いドーム型の屋根に激しく叩きつける雨音を聞きながら、わたし達はいつ動くとも知れぬシュツツツガルト行きの電車を延々と待った。

駅はバックパッカー姿の若者で溢れていて、わたし達も彼らと同様のいでたちだったから同じようにフロアーにべったりと座りこんで、世界各国から集まって来ているであろう若者達の様子をそれとなく眺めていた。

二人連れのアメリカ人らしいバックパッカーがいた。ひとりが相棒にm&mを食べようよと持ちかけている。どうやら相棒が食料係りのようだ。食料係はバッグを覗き込んで、「最後の一袋だから、大切に食べるよ」と言いながら菓子袋を手渡していた。

なんともほほえましいやりとりだったが、貧乏旅行の大変さが伝わってくるようで、m&mの大袋を買ってあげたいほどだった。そこらにいる大勢のバックパッカー達は、押しなべて同じような貧乏旅行の途上にあつたのだろう。

その時、今はわたし達にくつついて歩いている子ども達が、やがて自分でバックパックを背負つてこの駅に降り立つことがあるかもしれないね、そうだったらいいねと、果てしなく遠いことのように夫と話したことだった。

我が家のバックパッカーは、友人とイタリアの方々の都市を歩きながら、南の小さな町で、この青年達とサッカーまでしてきたらしい。

わたし達が子連れでイタリアを歩いた当時、十歳だった彼が自分の足で再びイタリアを歩くようになる今の時まで、確かに長い時の経過があつたのに、何かひとつとびにこの時が来たような気にもなる。

Hは旅をするのは今しかないと、せつつかれるように、タイ、カンボジアと旅を続けていて、この春もどこかに行くと言つていたが、はて、どこだつただろう。

若い時には、その時にしかできないことがあるものだ。出来る限り、自分の足で世界を歩いて回るといい。

時が巡り、息子達が子育てにあくせくしているその頃、夫とわたしは熟年バックパッカーとなつて世界を歩いているかもしれない。いやぜひそうでありたいものだ。

その時に備えて我々がジムに通つて体力をつけているのは、きつと良い選択なのに違いない。

ぶっとび卒業式は着ぐるみもあり

次男の通う高校の卒業式のぶっとび具合については聞いてはいたが、果たしてそれはなかなかのものだった。まず卒業生の格好。スーパーマン、カーボーイ、アルプスの少女、着物に袴、自分たちでこしらえたとおもわれる奇抜な衣装、ひときわ目立つ大きな熊の着ぐるみまであり、卒業式当日、体育館はさながらハロウィンかコスプレパーティーのようだった。

卒業証書授与式が始まり、クラスごとに呼名が行われる。個性的なのは彼等の出立ちだけではない。名前を呼ばれて立ち上がった生徒達、目つきがきらきらとしていて、これから何かが起こるといふ興奮のようなものが見て取れる。初めのクラスの名前がすべて呼ばれるとクラス全員が彼等の担任に「○○ちゃん愛してるよ！」と叫んだ。女性教師はそれに答えて「みんな愛してるよ！」と応じる。そのクラスに続いて他のクラスも様々なコールを披露した。教師の応答もそれぞれに個性的。どうやらこれはこの学校の伝統であるらしい。

代表で卒業証書を受け取るべく壇上に上がったスーツ姿の生徒はとりわけ何かをするようには見えなかったが、卒業証書を手にするや、それを高く掲げ、やおら腕まくり。

なんとその腕には刺青と思いきや、サインペンで文字が書かれているのだった。前の方からどよめきが起こる。わたしのところからはその文字は読めなかったが、後で息子に聞くと、彼の腕に書かれた言葉は「N高、最高」だったらしい。

ちなみに去年の生徒会長は卒業証書を受け取るや、壇上でやおらカメラを取り出し、校長先生と二ショットの記念写真を撮ったとのこと。なかなかやるじゃない。

さて卒業生からの記念品贈呈の運びとなり、いかしたジャケットにびったりしたチエックのパンツ姿の女の子が壇上に上がり目録を読み始めた。

「ひとつ、ジェットヒーター三台。ひとつ、卒業式第二部」

ということで卒業式に引き続いて卒業生自らが企画した卒業式第二部が記念品として捧げられ、それから実に四時間続いたのである！

この日はあいにくの雨。体育館は思いの他冷え込みが厳しく、わたしは予定していたスーツをやめてセーターとパンツにジャケット、それに厚手の靴下という格好に変更しておいて正解だった。それでも寒さは骨にまで達してきたもの。

この寒さの中、ノースリーブのドレス姿の女の子たちもいて、風邪をひくのではないかしらと心配になった。しかし、この寒さと裏腹に、卒業式第二部が始まるや、卒業生、在校生のみならず教師もまた親達も異様な熱気に包みこまれていった。なんとアツイ卒業式であること。

さて、我が次男、この卒業式第二部で、何かをやらかすらしい。それにしても、彼はまだ受験が終わってはいないのである。国立大の前期試験で破れたなら後期の試験を受ける段取りになっているのだ。そういう状況だと言うのにに本人の目下の関心事はこの卒業式の出し物であることは明らかであり、受験よりもバリユーがあるそのことがいったいどんな事なのか気にならないわけはない。

彼はかなり目立っていた。奇抜な格好の卒業生たちの中でもとりわけ。

なにも青いクマの着ぐるみを着ていたのでもなければ、真っ白いスーツに光ものを貼り付けたプレスリーの格好をしていたわけでもない。黄色いグラサンを鼻にひっかけた、いかつい「ちんぴら」のいでたちでステージの上に登場した。で、暴れたり、怒鳴ったり、踊ったりとなんと豪華なことであった。

彼はなんと学校一人気の五人からなるコントグループの一員だったのだ。文化際や予餞会の度にオリジナルのコントで皆を沸かせていたらしい。話は多少聞いてはいたが、そのステージは初

めてだった。「お母さん、見ると卒倒するかも」と言われて、心の準備をしていなかったら、わたしはほんとうに卒倒していたかもしれない。

この年齢の子たちつてこの軽薄なちんぴらや、やくざがなぜ好きなのだろう。彼らがその格好でステージに現れるや異様な興奮のどよめきが起こる。イケメンのカッコイイ男の子たちへ向けられる賞賛とは趣を異にする、何か別の賞賛。

さてお母様方の反応はいかにと気になるところであるが、さすがN高の親たち、いたって好意的に拍手喝采していた。

「かわいいわよね、あんな格好してても」と、どこからかそんな声も聞こえてきた。

息子のコントのことばかり書いてしまったが、この二部の出しものは実に変化に富んでいて、他にバンドが数グループ、ジャズダンス、ストリートダンス、劇と、卒業生によるパフォーマンスが続いた。

早々に大学が決まっている子もいれば、我が息子のように受験のさ中の子もいるし、また浪人覚悟の子もいるらしい。いずれにしろ、高校生活の最後の瞬間が受験一色に彩られていないのはなんと幸いなことだろう。実行委員長の袴姿の女の子は、「みなさん、寒いところ、こんなに長

いこと体育館に座らせてしまつてごめんなさい」と泣きながら挨拶をしていた。思いがけないアクシデントがあり、時間が予定より二時間もオーバーしてしまつたのだつた。けれど、それすらきつと忘れられない思い出として語り草になるのだろう。ともかく、みんな、よくやつたよ。卒業おめでとう！

コントのステージにどきどきしていた次男もわたしもすつかり「そのこと」が頭からすつとんでいたが、この日はまた大学の合格発表の日でもあつた。わたしは父母と先生方とのパーティーに出席したので、わたしより一足先に家に帰つた次男から携帯に可否の連絡が入ることになつていた。不合格の場合はメール、合格だつたら電話という申し合わせで。

夕方六時すぎ、駅のコーヒーショップにいると携帯が鳴つた。それは電話を知らせる着メロだつた。

こつちもよくやつた、おめでとう！

一人暮らしのトレーニング

次男が四月から大学の寮で一人暮らしを始めるので、自炊のトレーニングを始めた。

わたしなど、母が仕事を持っていたから小学生の頃から料理はしていたし、わたしより八つ年下の弟は小学校五年生の時、下宿先から戻ってきた高校生の兄に天ぷらを揚げて食べさせたという。父親だつて当たり前のようにぜんざいや大学芋なんかを作つて子ども達に食べさせていた。わたしの実家はこういう具合だつたから、息子達にも当然台所に立つことを潔しとして育てたつもりである。しかし、いかんせん、我が家の坊主達は怠け者だ。誰に似たものやら自分で作るくらいならそこいらにある菓子でお腹を満たした方がよいし、さもなければ、コンビニに走つて弁当を買つて来る方がましという輩だ。

レストランで食べたものを自分で作つてみようと、冷蔵庫の食材で気に入った惣菜を作つてみようと、心は心の片隅にも浮かばないのだろう。

しかし、一人暮らしをすとなれば、そうは言つてもおられない。基本的な食材の扱い方から

いは身につけさせなければと慌てた。どうやらこれが子育ての最終ラウンドだ。

タイミングよく食材セットの五日間の試しメニューのチラシが入ってきたので、即注文した。

この食材の宅配サービスは、一応夕食の定番が二品目、あるいは三品目、焼き物、煮物、和え物という具合にバランスの良い献立が組まれている。また盛り付け例の写真もあり、懇切丁寧な作り方も載っていて、初心者にとっては最適な教材ではなからうかと狙いをつけたのだ。それで二、三週間作ってみれば、どういう食品をどう調理するのか、またどのくらいのとんばく質類や野菜類を取る必要があるのか、おおまかなところがインプットされるのではないかと思った。

次男とすればはた迷惑なことかもしれないが、いいのだ、きつと後になって、やつてよかつたと思うだろうから。しかし、問題はそれをやらせることができるかどうか。彼はかなり頑固だ。

昨日はMもわたしも夕方三時まで時間があつた。食材は十二時過ぎに配達となる。そこで今日は夕食ではなく、これを昼食用に作ることにした。なにしろ、鍋や調味料がどこにあるか、そこからしてMは知らないのです、わたしがお料理番組の助手、あるいは家庭科の先生よろしく、隣に待機しながらの調理実習であつた。

Mが作り方の通りに醤油を大匙一杯量ろうとするので「大丈夫、だいたいいいのよ」というと、「そのだいたいの見当が付かないから、きつちり計らないとだめなんですよ」とのたまう。いや、

ごもつとも。わたしも新婚当初は料理の本を片手に、何から何まで書いてある通りにきっちり従って作る他、手がなかった。

彼は、きっちり、砂糖や塩や酢の分量を量って合わせ調味液を作っていた。

さて、この日のメニューは豚肉のしょうが焼きの生野菜添え。ちくわと蓮根とこんにやくと人参の炒め煮。そして、キャベツとわかめの甘酢和え。豚肉のしょうが焼きはともかく、この手の煮物や和え物は我が家の青少年たちにはまずもって人気がないので、食卓にはめったに上ることもない惣菜だ。

「こんなまずそうなもん作らないといけないなんて」とぼやいていたが、テーブルの上にランチョンマットを敷き、しゃれた皿や器に盛り付けると、結構色どりも美しく見栄えよく整った。友達に自慢しようというのだろう。Mは、携帯のカメラに自分のこしらえた料理を収めていた。

この味、お手本通りとはこういうことをいうのだろう。しかし、何か自分の家の食べ物という感じはしない。病院や給食の食事を彷彿とさせる。微妙に満足感に欠けるのである。ということでは、料理にはいかにお手本とは違った自分のさじ加減があるかということだ。きつとわずかな差ではあるのだろう。大匙一杯の醤油がわずかに多かったり、小さじ半分の塩がわずかに少なかったりという程度の違いなのだ。わたしはもはや計量スプーンは信用していないから、すべては目

と手と舌に頼り、勘で調味をしてゆく。たいていの主婦、また主夫がそうであろう。そして、このさじ加減の違いがその家々の味の違いになるんだろうなと妙に納得した。

さて、M。まず、お手本どおりに調理するというスキルはあるようだし、そのことに本人も満足気ではあった。それがやがて、自分のさじ加減で自分の気に入った味が出せるようになるかどうか、そこが問題だ。もしそこまで自分の舌に合うものをさつさと作れたらこんないいことはない。どこの国へ行つても、食で困ることはないだろうから。

これってしかし、料理に限ったことではないなと思う。きちんと基本を抑えながら、体裁を整えながら、しかもその人にしか出せない味、人が真似できない味を出していくのは生活全般に言えること。どんなに状況が変わっても、周囲に振り回されず、自分のテイストを保つことができるような大人に成長してほしいと思う。数年後、彼がどんな味を出しているのか楽しみにしていよう。

この自炊のトレーニングには後日談がある。次男が寮に入り一月ばかり自炊生活をする、五月に入つて、部活の大会があるとかで土日にかけて帰ってきた。日曜日の朝、わたしが朝食の支度をすべく階下へ降りると、すぐに次男が降りてきて、わたしにピンクの封筒を手渡した。「今日は母の日でしょ」と言う。そのピンクの封筒の中身はかわいらしい母の日のカードで、感動的

なことに言葉がぎつしりと書いてあつた。

わたしがにんまりしていると、

「ほく、スクランブルエッグ作れるんだ。」

と彼はフライパンに卵を二つ割り入れ、塩と胡椒を振つて手早くスクランブルエッグをこしらえた。

「なかなかのもんじゃない！」とわたし。

考えてみれば、それは初めて彼が自主的に調理したものだつた。トレーニングの甲斐があつたというもの。これならなんとか自分の食事の面倒は自分でみていけるとひとまず安心した。

朝食を済ませて、家を出て、教会へ行く電車に乗り込んだところではたと気がつく。今朝次男が作ってくれたスクランブルエッグ、あれは母の日のわたしへのトリートだつたのだと。

子ども達が小さい頃から母の日の朝食は夫が作ってくれた。まだわたしがベッドにいる間に、コーヒーが入れられ、卵や野菜の料理とパンが並べられた。そして朝食の支度ができると子ども達がわたしを呼びに来た。階下から自分で入れたのではないコーヒーの香りが漂ってくるのはいいものである。下へ降りていくと、テーブルの上には朝食といっしょに三人からのプレゼントが並べられてあつた。

確か去年もそういう母の日だったが、今年は夫が、義父の病気のこと、九州の実家に帰省中

で留守。次男は夫の代わりに母の日の朝食を用意しようと早く起きてきたのだ。そして彼なりに我が家の習慣を守ろうとしたのだ。

あのごつい手が差し出したピンクの封筒と、テーブルのお皿に載った黄色いスクランブルエッグのことを、これから母の日が来る度に思い出すことになるのだろうか。

火を灯して

子どもの頃、たいていの女の子がやるように、わたしもままごとや人形遊びをした。

ひんやりと冷たい地面にごさを敷き、かまぼこ板のまな板と包丁に見立てたお古の安全かみそり、注意深く葉っぱを刻んだ。

人形遊びに使う人形は、赤ちゃんの体型のぷっくりしたものではなく、ウエストがきゅつと締まった大人の身体つきをした人形だ。遊び仲間と、人形の衣装がたくさん詰まった箱を持ち寄り、そのスマートな人形に、端切れや残り毛糸で不器用にこしらえた服を着せては脱がせて遊ぶのだった。

思えば、ままごとは主婦や母親になった自分達を想定しての模倣遊びだったし、人形遊びは年頃の娘となった自分達を想定してのシミュレーションだった。もちろん、たまにはチャンバラにも混ぜてもらって、男の子と渡り合う術もいくばくかは身につけたが……

子どもは無意識の内に、夢を遊びに変えているのかもしれない。

そんなままごとや人形遊びに加えて、わたしや遊び仲間が学校ごっこをさかんにやった。交代で先生になつては、おおまじめに「授業」をし、「宿題」を出し、赤鉛筆で丸を付けた。

学校ごつこの先生ともなれば、自分が教えたいことを教えることができる。二級上のKちゃんは理科が得意で、わたし達がまだ習っていないことも知っていたから、生徒になるだけでも楽しくて、学校で教わる勉強よりもわくわくした。Kちゃんは後に、小学校の先生になった。今も郷里で本物の先生をしている。

わたしもKちゃんと同じ大学の教育学部に進み、一度は小学校の先生になったものの、結婚と同時に辞めてしまった。

子ども達と日々過ごすことは楽しく充実していた。しかし、教員の仕事は、子どもとかわつたり、教えることだけではすまない。仕事の内容は多岐に渡っていて、様々なことに注意を払っていないではならなかった。エネルギーの配分も悪かったのだろう。二年間で燃え尽きてしまったのかもしれない。

専業母親の日々、仕事を手放した事は浅はかな決断だったかしらと思わないこともなかったが、やはりわたしにはこの選択が正しかったのだろうか。

その昔、ままごとや人形遊びで培ったわたしなりの主婦や母親への夢があった。また、鍵っ子

だったから、いつも家に居るお母さんに憧れていた。いや、それ以上に、子ども達が日々育っていく様子を片時も見逃さずに見ておきたいという貪欲な思いがあったのだ。

けれど、その一方で学校ごっこで培った夢も捨てられない。わたしは、誰に似たのやら、根っからの「教え好き」なのだ。母親や主婦をやりながら、学校ごっこよろしく、近所の子ども達を集めては、何がしかを教える仕事を続けてきた。そして、アメリカから戻ってきてからは、アメリカの幼稚園や小学校をイメージして自宅で英語を教え始め、私立の小学校の英語の授業を受け持ったり、教会の英語学校で、幼児とお母さんのクラスを開設したりと、少しずつクラスも広がっていった。この英語教室も、もう十年。小学生、中学生の頃に通ってきていた子達が、今では大學生になっている。

わたしと子ども達が接するのは、わずか一週間のうちの一時間あまりの時間。短い時間ではあるものの、子ども達の成長にかかわるのだと思うと背筋が伸びる。

英語というもうひとつの言葉を通して、言葉の持つ心地よさやおもしろさを伝えたい。知らない言葉をひとつづつ獲得していく喜びを知らせたいと願う。

歌ったり、踊ったり、読み聞かせをしたり、わたしはステージで観客の前に立つ役者（パフォー

マー)のようだ。そして子ども達の顔が輝く瞬間を待つ。

顔といわず身体と言わず、存在がぱつと明るくなる瞬間がある。その時、「ああ、火が灯った」と思う。

思えば、子どもの頃から、かかわってくれた様々な人から火を灯されてきた。この火は内側から心を照らし、前へ進むエネルギーとなり、生きる喜びをもたらした。

灯された火を次の世代に渡す者として、子ども達の前に立っているのだと思う。

子ども達の心に火を灯そうとするならば、わたし自身の内に火を灯し続けなければならない。火を点し続けるためには、日々を、新しく生きること。そして、命の源へ向かって、一瞬、一瞬、自分を明け渡していくこと。明け渡した心には、魂の求めているものが流れ込んでくる。流れ込んでくるものは心を揺さぶり、わたしの中の何かを変え、また何かを育む。そうして、終わりの時に向かつて日々育っていく。

おわりに

「人生の後半始まって一年ですね。ぼくはまだ十五%です。

これからもがんばってください。」

書類の整理をしていたら、子ども達からもらったカード類が出てきました。これは今からちょうど七年前のわたしの四十一歳の誕生日に、その頃十二歳だったMが手作りのパスデーカードに書いてくれた文です。

百分率を習ったばかりだったのでしよう。さつそく八十歳を百として、母親と自分が人生のどこらあたりにいるのか計算したに違いありません。

しかし時は、そのカードをもらったすぐそばから進み、計算してみるとわたしはもう六十%のところに来たことになります。

いえいえ、人の持ち時間なんて誰にも予測できはしません。百歳まで生きることができただとしたら、まだまだ半分というところでしようが、タイムリミットは実は明日であるかもしれま

せん。

わたしはネット上で日々書こうとしていますが、書くということの動機の中には、「限りある、そして予測不可能なわたしの命」というものがあります。

人生はいつ幕が降りるとも限らない、ひとつのパフォーマンスのようなもの。それならば、いつ幕が降りてもいいように、表現したいことは先に延ばさずに、日々表わしていきたいと、そんな風に思っているのかもしれない。

これからも、わたしの身体がそれを許す限り、日々書き続けたいと思います。
読んで下さり、ほんとにありがとうございました。

初めて本を出す、右も左も分からないわたしを励まし、方向づけを下さったゴザンス編集部の杉本さんに、そして、この本を命あふれるすばらしい表紙で包んで下さったデザイナーの池原ゆうこさんに、心からの感謝を捧げます。

また、最大限の協力を惜しまず、あらゆる場面で支えてくれた夫と、書かれることを快く承知してくれた我が家の青年Hと青年Mに、そしてわたしに命と時とを与え、いつも見ていて下さる神様へ、心からありがとう！

プロフィール

著者：たりたくみ

たりたくみ 1956年、大分県生まれ。埼玉県在住。

大分大学教育学部卒業後、小学校教諭を経て、育児のかたわら、文庫活動をする。4年半のアメリカ滞在中、地域の大学に通い、小学校、教会などでボランティア活動をする。現在、幼児・児童の英語教育に携わる一方、ネット上でエッセイ等を書いている。

<http://members.jcom.home.ne.jp/tarita/>

表紙デザイン：池原 ゆうこ

墨と紙と朱のスローアート。2003年9月 HELLO LIKE BEFORE（ご鼠屑に）設立。日々絵を描いて暮らしている風来坊。

<http://www.yukong.info>

ゴザンスネオブックとは

ゴザンスネオブックは、インターネットをまるごと書籍化したいという野望のもと、スタートしたプロジェクトです。現在、インターネットのテキストは、膨大な量、てんでバラバラに存在していますが、そこに編集を加え、読みやすい形で切り出していき、本を次々に作り出すということを私たちはやっていきたいと考えています。この無謀な計画にあなたも参加してみませんか？ 必要なのはあなたが書いたテキスト、それだけです。

育つ日々

二〇〇四年六月一日 初版

定価はカバーに表示してあります。

著者 たりたくみ

発行者 深水英一郎

発行所 株式会社バーチャルクラスター

GOZANS NeoBook Project <http://neobook.gozans.com/>

発売所 株式会社ブックイング

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 2-8

電話 03-3233-5336 (代) <http://www.book-ing.co.jp/>

印刷・製本 株式会社ブックイング

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

本書の内容を無断で複写・複製・放送などすることはかたくお断りいたします。

著作者に無断でレンタルおよび販売することを禁じます。

©2004 Kumi Tarita. Printed in Japan.

ネオブックは読むだけじゃない

ネオブックはインターネットから生まれた出版プロジェクト。読みたい人も、書きたい人も一緒に楽しめる出版を目指しています。読み手と書き手が一番近い場所で、新しいテキスト文化を楽しんでみませんか？

まず、アクセスする

<http://neobook.gozans.com/>



本を読む

ネオブックから刊行されている本をウェブから注文できます。本屋さんでは置いていない本、これからデビューする本にドキドキできるのがネオブックです。

本を書く

ネオブックはウェブから生まれた新しいテキストたちの書籍化、新人発掘をメインとする出版を手がけています。面白い本を書きたい人はネオブックから。

ネオブックの本を書店で注文する場合

ネオブックの本はお近くの書店でもご注文いただけます。書名・著者名およびISBNコードでご注文ください。オンライン書店での注文の場合は、書名・著者名等で検索してください。

注文に関して不明な点は（株）ブッキングまでお問い合わせください。

●お問い合わせ先：tel/03-3233-5336（代） email/info@book-ing.co.jp